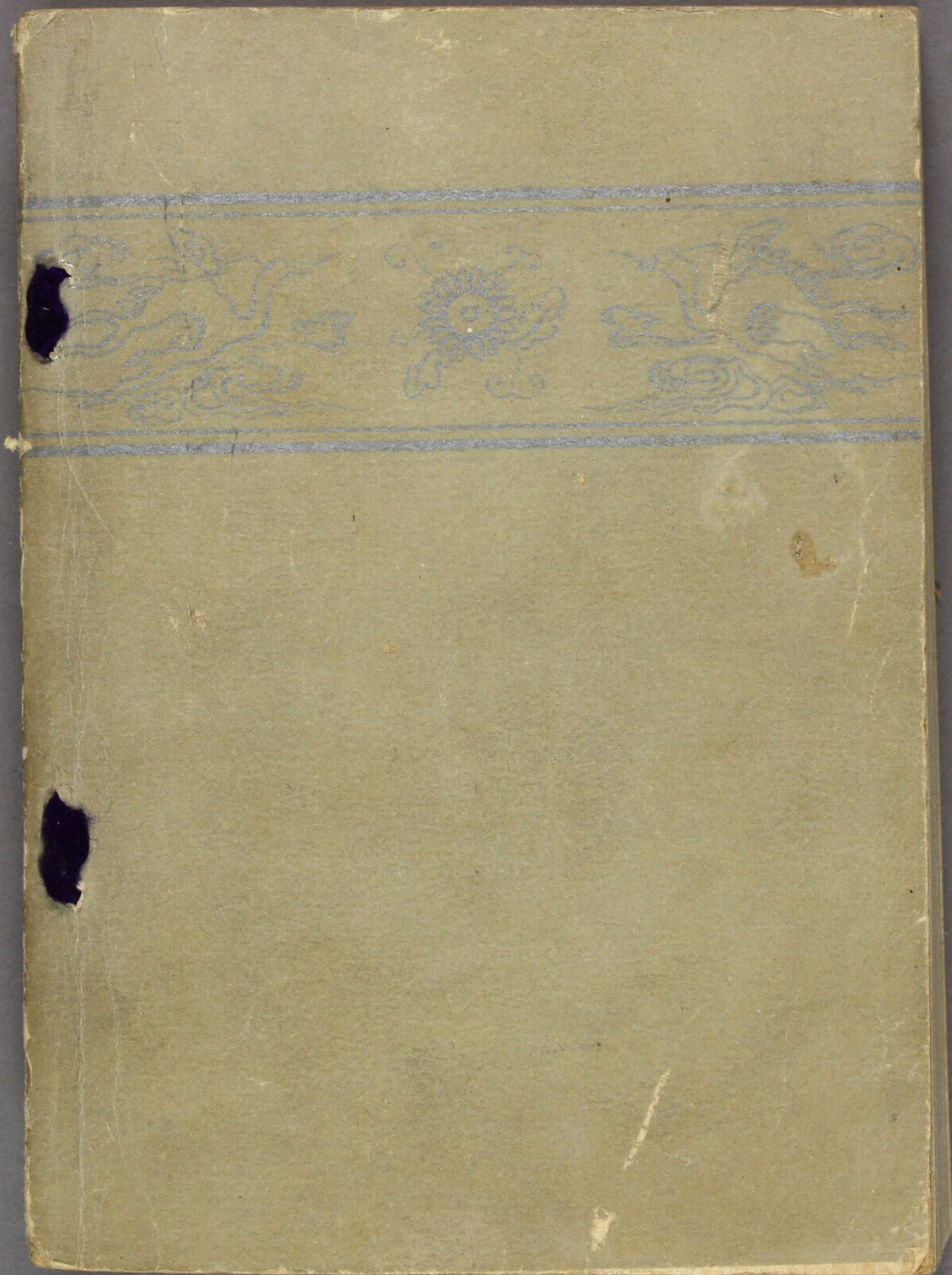


志烈歌集







皇后陛下御下賜

金五百圓也

有栖川宮、伏見宮、閑院宮、北白川宮
小松宮、東伏見宮、華頂宮、山階宮
賀陽宮、久邇宮、梨本宮、各殿下御下賜
金貳百五十圓也

忠烈歌集寄贈人名

《申込順》

五

部

越後國北蒲原郡佐々木村字上中澤十二

鹽原熊次郎

五

部

武藏國八王子町八幡七七

長谷部敬治

四

部

羽後國酒田町番外一二

菊池秀言

五

部

相模國高座郡海老名村河原四六一

古川謙

五部
五部
參部
四部
貳部
拾部
貳部
拾部
壹部
拾部
拾部
拾部
壹千部
貳百五拾部

琉球那霸區字東一四九六
靜岡縣沼津中學校
府下豊多摩郡澁谷村道玄坂上
埼玉縣南埼玉郡大相模村大聖寺
丹後與謝郡市場村字四辻
京橋區木挽町九ノ二五
千葉縣印幡郡八街村
芝區高輪南町五八
東京芝區高輪
芝區白金猿町五九
芝區下高輪一七
東京市麻布區市兵衛町
東京麴町區永田町二ノ一
全

山里永昌
大鹽平作
工藤一記
高岡隆圓
小泉詠歸
三浦安
廣田萬藏
毛利まさ子
毛利安子
小早川式子
大村梅子
多田好問
鍋島直大
鍋島榮子

貳百部
五部
拾五部
參拾部
五部
拾五部
壹部
拾部
五部
五部
參拾部
拾五部
五部
五部
壹部

東京麴町區麴町七丁目
弘前市大官町
麴町區富士見町
府下荏原郡北品川
出雲國飯川郡久木村六四四ノ一
東京市麴町區下二番町
京都市下京區清水町五ノ一
羽後國雄勝郡湯澤町
麴町區永田町二ノ二九
遠江國濱松町旅籠町五〇
芝區三田綱町一
京橋區築地町
東京神田區今川小路一ノ五
岐阜縣大垣町南寺内二三七

侯爵母堂 細川宏子
大道寺繁禎
香川秀五郎
伊達孝子
江角柳四郎
藤波言忠
福田貴美日子
泉而足
宮地嚴夫
鞍智芳章
德川知子
花房義質
齋藤初太郎
吉村八

拾五部

東京神田區佐久間町

七條 愷

七百五拾部

東京芝區下高輪町

男爵 渡邊 千秋

壹百五拾部

大阪府東成郡天王寺村字天下茶屋遊園地

宮内省女官一同

壹部

東京市麴町區永田町

川畑 梓

拾部

全

鄭 はま子

拾部

麻布區飯倉片町二五

水町 ゆう子

壹百五拾部

府下荏原郡品川御殿山

片山 いく子

拾部

府下西多摩郡三田村澤井上分二〇七

松平 頼和

拾部

東京市牛込區若宮町二三

原 六郎

參拾部

東京市麴町區下二番町八

坂本 俊健

貳拾部

麴町區下二番町

吉田 醇一

參拾部

東京日本橋區濱町

福田 操三

壹百五拾部

麻布區市兵衛町

池田 幸子

壹百部

東京市赤坂區福吉町

前侯爵夫人

池田 幸子

壹百部

東京市麴町區平河町六丁目

侯爵

池田 幸子

貳拾五部

東京市麴町永田町二ノ十三

男爵夫人

鍋嶋 渭子

拾部

全

兵動 綱江

壹百部

東京麴町永田町一丁目

男爵

松平 健子

五拾部

美濃國羽島郡駒塚村

石河 光熙

五拾部

東京市淺草區左衛門町一

中山 幸子

壹百部
貳拾五部
壹部
拾部
五部
壹部
五部
拾部
五部
貳拾五部
五部
拾部
五部
拾部

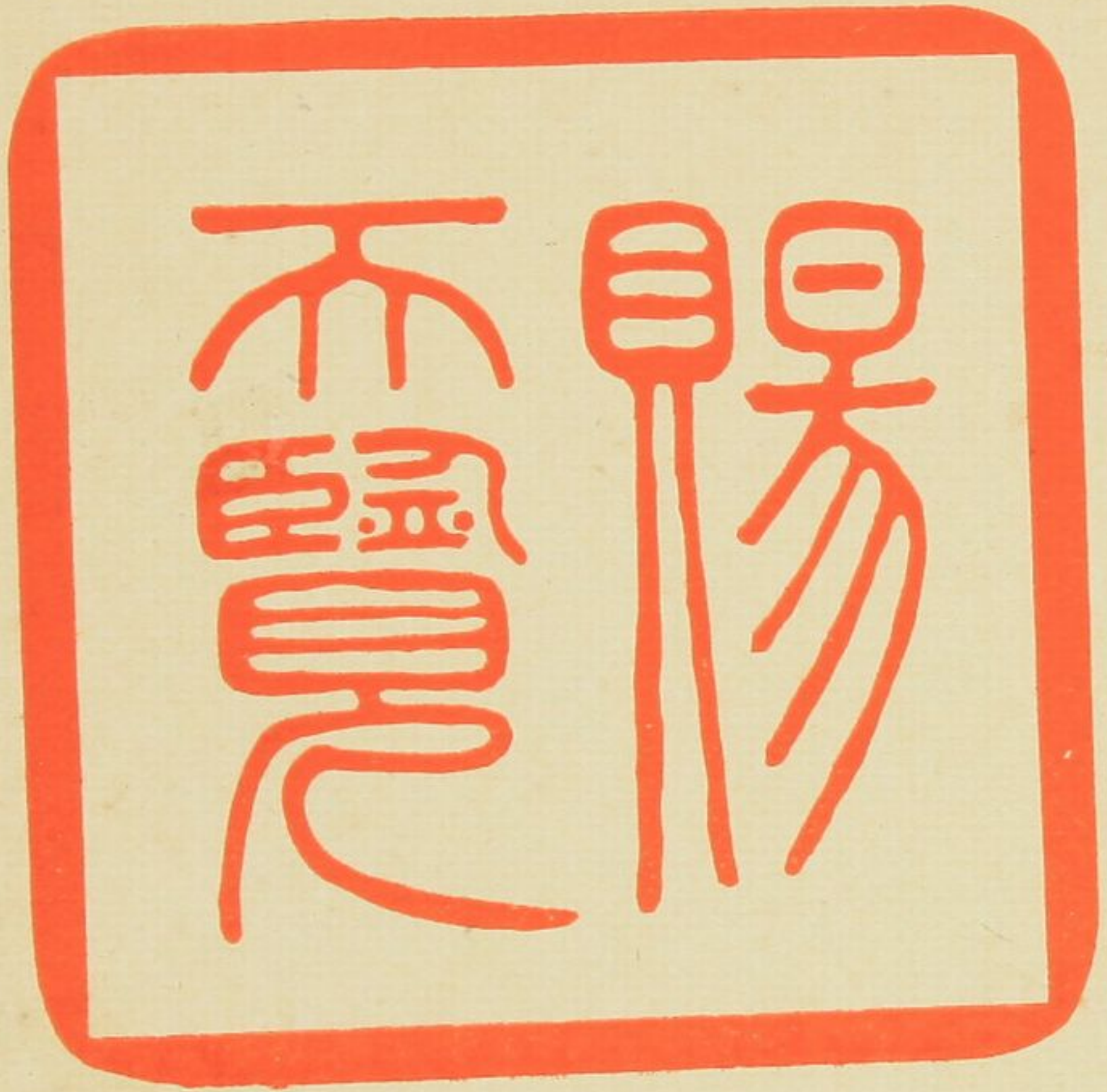
東京市麴町區紀尾井町五
伊勢國飯南郡松坂町字本町五
安藝國山縣郡筒賀村七
長野市縣町官舎
武藏國大宮町九九三
羽前國北村山郡宮澤村字正殿七四八
本郷區駒込西片町十
北豐島郡日暮里村
土佐國安藝郡井ノ口村
東京小石川區水道町
淡路國三原郡福良住吉町六七四
東京深川區深川西町三四
京都市上京區堺町御地北三
京都市岡崎町

子爵
香川敬三
小津清左衛門
山根雪
藤崎虎二
丸山禎吉
阿部司
中村秋香
大槻文彦
川西奠靈
松平幾子
藤田昇月
吉田右之七
尾崎栄夫
須川信行

四部
五部
四部
拾五部
五部
壹部
五部
壹部
五部
壹千部
五部
貳部
五部
貳部
五部
拾五部
拾五部

小倉市寶町卅八
山城國伏見西濱
府下豐多摩郡内藤新宿町北裏七六
東京麴町富士見町
東京市牛込區市ヶ谷佐土原町
羽前國西田川郡鶴岡町五日町一三二
遠江國榛原郡坂部村一〇四
東京市麴町區一番地
新潟市旭町二
北海道旭川陸軍官舎第六區三條通り二
越中國射水郡新湊町
甲斐國南巨摩郡皷澤町三〇六
安藝國加茂郡三津町
東京市麴町區永田町

小林愛岩
江崎權一
社本敬策
賀茂水穂
加藤春路子
酒井勝貫
池ヶ谷順助
田中光顯
宮常吉
佐々木嶠
宮崎儀六郎
矢島順平
三浦仙太郎
柴田芳子



合
部
司

有 八
果 子

一忠烈歌集 六冊

右陸海軍人へ寄贈ノ趣旨ヲ以テ編纂

ニ付

聖上

皇后兩陛下

東宮同妃兩殿下

常宮

周宮兩殿下へ獻納被致候ニ付

御前へ差上候此段申入候也

明治三十七年十一月十五日

宮内大臣子爵 田中光顯

大日本歌道獎勵會

會長侯爵 鍋島直大殿

忠



烈

忠



烈

明治甲辰夏日

田中光顯題



忠烈歌集の

はしめに

高崎 正風

大御代にあひていよく

かゝやさぬ神代なからの

やまこたまこひ

忠烈歌集の成れるを

よろこひて

鍋島 直大

さりくにははふ言葉の

花はみなやまところろに

ねさしてそさく

忠烈歌集序

すめらみことにつかへまつるは、おみとあり
たみごあるもの、すべてをつとめなり。そが
なかに、みいくさびごたちは、どほくもろこし
のうみやまにむかひ、みくに、あたするくな
たぶれらを、うちまためはらひしりぞけん、と、
いみじきあつさはげしきさむさはさらなり、
うゑもつかれもたへしのび、いにしへにため
しもきかず、のちのよにまたごあるまじくお

ぼゆるばかりの、たゞかひせられしとたびか
さなりぬ。われら、みくに、のこりゐて、のごか
におきふしする、おもへばうらはつかしく、こ
しろぐるしくなむ。なに、ごこにもあれ、およば
むかぎりのちからをもて、くがさうみとのみ
いくさびとたちをなぐさめばやと、わが歌道
奨励會にては、かくあまたの歌をあつめえら
びすりまきとし、これをおくることとせり。こ
ゝに、かしこくかたじけなきは、高輪のこのに

おはします、常宮 周宮ふたところのひめ
みこをはじめ奉り、かたゞのみやす所たち
の、みうたをくたしたまへることなり。こを拜
み見る人々のよろこびいかはふかゝらん。こ
の會のめいほくも、またいみじきわざなりけ
り。千秋をぢなきも、顧問におされて、何くれと
この會の事にかゝつらへば、かゝるうたぶみ
のなりをへたるをうれしみ、ひとことのはし
がきをものしつ。あはれこのふみ、幸にあまた

のみいくさ人たちをなぐさめて、のちくま
 でのものこれらば、たぐひまれなる明治の大御
 代の、みいつのひかりをつたふるくさはひと
 もなりなむかし

三十七年のあきのなかば

わたなへの千秋

宣戦の詔勅

天佑を保有し萬世一系の皇祚を踐める大日本國皇帝は忠
 實勇武なる汝有衆に示す
 朕茲に露國に對して戦を宣す朕が陸海軍は宜く全力を極
 めて露國と交戦の事に従ふべく朕が百僚有司は宜く各々
 其職務に率ひ其の權能に應じて國家の目的を達するに努
 力すへし凡そ國際條規の範圍に於て一切の手段を盡し遺
 算なからむことを期せよ
 惟ふに文明を平和に求め列國と友誼を篤くして以て東洋
 の治安を永遠に維持し各國の權利利益を損傷せずして永
 く帝國の安全を將來に保障すへき事態を確立するは朕夙

に以て國交の要義と爲し旦暮敢て違はさらむことを期す
 朕か有司も亦能く朕か意を體して事に従ひ列國との關係
 年を逐ふて益々親厚に赴くを見る今不幸にして露國と覺
 端を開くに至る豈朕か志ならむや

帝國の重を韓國の保全に置くや一日の故に非ず是れ兩國
 累世の關係に因るのみならず韓國の存亡は實に帝國安危
 の繋る所なればなり然るに露國は其の清國との明約及列
 國に對する累次の宣言に拘はらず依然滿州に占據し益々
 其の地歩を鞏固にして終に之を併吞せむとす若し滿州に
 して露國の領有に歸せん乎韓國の保全は支持するに由な
 く極東の平和亦素より望むへからず故に朕は此の機に際
 し切に妥協に由て時局を解決し以て平和を恒久に維持せ

むことを期し有司をして露國に提議し半歳の久しきに亘
 りて屢次折衝を重ねしめたるも露國は一も交讓の精神を
 以て之を迎へず曠日彌久徒に時局の解決を遷延せしめ陽
 に平和を唱道し陰に海陸の軍備を増大し以て我を屈從せ
 しめむとす凡そ露國か始より平和を好愛するの誠意なる
 もの毫も認むるに由なし露國は既に帝國の提議を容れず
 韓國の安全は方に危急に瀕し帝國の國利は將に侵迫せら
 れむとす事既に茲に至る帝國か平和の交渉に依り求めむ
 としたる將來の保障は今日之を旗鼓の間に求むるの外な
 し朕は汝有衆の忠實勇武なるに倚賴し速に平和を永遠に
 克復し以て帝國の光榮を保全せむことを期す

御名 御璽

明治三十七年二月十日

文部大臣	逓信大臣	司法大臣	陸軍大臣	外務大臣	大藏大臣	農商務大臣	海軍大臣	内閣總理大臣 兼内務大臣
				男爵	男爵	男爵	男爵	伯爵
久保田讓	大浦兼武	波多野敬直	寺内正毅	小村壽太郎	曾禰荒助	清浦奎吾	山本權兵衛	桂太郎

御製

折にふれたる

しきしまのやまご心の雄々しさは

事あるときそあらはれにける

ゆめさめて先つこそ思へいくさ人

むかひし方のたよりいかにと

兒らはみな軍のにはに出て果てよ

おきなやひとり山田もるらむ

千早振かみのこゝろにかかふらむ

わかくに民のつくすまことは

よもの海みなはらからと思ふよに

なご仇かみのたちさわくらむ

つはものゝ心とともに乗るこまも

つかるゝ知らていや進むらむ

益荒雄に簾をさつけておもふかな

日の本の名をかゝやかすへく

端居して月見るほともたゝかひの

にはのありさま思ひやりつゝ

きたひたる劍のひかりいちしろく

よにかゝやかせわかいくさ人

いかならむ薬すゝめてくれのため

いたておひたる身をは救はむ

山をぬくひとのちからもしき嶋の

大和こゝろそもとるなるへき

石たゝみかたきさりてもいくさ人

身をすてゝこそうち碎きけれ

くにとみは一つこゝろに守りけり

とほつみおやの神のをしへを

世と共にかたりつたへよ國のため

いのちを捨てしひこの勳功を

國を思ふみちに二つはなかりけり

いくさの庭に立つも立たぬも

むらさきの心をたねのをしへくさ

おひしけらせよ大和しまねに

皇后宮御歌

をりにふれて

戦ひのかちのたよりをきくここに

みいくさ人の身をおもふかな

たのもしきなにはあれとも戦ひに

かたてはやまぬ大和たましひ

國のためこゝろ盡してかちいくさ

いのるかうれししもか下まで

國のためいたて負ふ身を寫し繪は

見るになみたそ催はされける

あてひとも心あはせてくにのため

いたて負ふ身をもる世なり覺

國たみをあはれみ玉ふひこことの

たまの御聲そ世にひゝきける

大宮の火をけのもともさむき夜に

みいくさ人はしもやふむらむ

常宮昌子内親王殿下

出征の兵卒をみて

勇みたつますらたけをゝ見る度に

つゝかなかれこ祈りこそすれ

出征の將卒を思ひ遣りて

くにのためいさむ心はもえぬこも

なれぬさむさに肌やこほらむ

旅順決死隊の行爲をきゝて

沈むへきふねに乗居て雄々しくも

みなとの口をふさきつるかな

八

陸軍の捷報をきよて

御軍はかちわたりぬときくからに

先つこそおもへ益良夫の身を

昨日まで露のれきゐし城のうへに

朝日のみはた今朝をひくらし

雪のふりける夜

白妙にみゆきふり埋むからくにの

野へにふすらん人をしそ思ふ

春の歌の中に

花鳥のいろにも音にもなにごなく

こゝろごまらぬ春にもある哉

祝捷會の提灯行列を見て

國民のよろこひいはふもろこゑは

みやこ大路になりひまきけり

周宮房子内親王殿下

出征の將卒を思ひ遣りて

九

浦安のくにをはなれていくさひと

ゆきにふすらむもろこしか原

紀元節の日に

御軍は日のもとづくにかちたりこ

みたまも天にきこしめすらん

旅順閉塞隊の行爲をきゝて

鬼神も泣きぬへきかな身をすてゝ

ふねを沈めし仕わさきゝては

陸軍の捷報をきゝて

+

陸の仇うちしはまれは先きつ日の

ふないくさにも劣らさりけり

祝捷會提灯行列を見て

ともしひを手にたつさへて國民の

御代祝ふ聲のいさましきかな

櫻を見て心に思ふことを

しましまのやまと心のいさきよさ

名に匂はなんやまさくらはな

燕の軒に巢くふを

みいくさのありとも知らて軒傳ひ

のどかに遊ぶつはくらめかな

夏のはしめに

冬よりもなほたへかたき夏はきぬ

身をいたはれよ益良夫のとも

富美宮允子内親王殿下

我國にはむかふものをみいくさは

たゝひとうちに平らげやせむ

日の御旗かゝやく野邊につゆの玉

はかなく消ることのうれしさ

家も身も返りみすしてものゝふの

せめおとしけり遼陽のしろ

手も足もこほるさむさを厭はすに

仇うちはらふやまとますらを

討死のしらせをきゝしつまや子の

こゝろのうちは如何あるらむ

よしや身は野原の露ときゆこても

たてし勳功はあかくのこらん
雨の日も風ふく夜半もものゝふの

身のくるしさをまつおもふ哉

泰宮聰子内親王殿下

ものゝふの命をすてゝ世につくす

こゝろたふごく思はるゝかな

命をもさゝけていつるものゝふの

今日の門出をいさやおくらん

御軍にいてたつひとをおくりくる

おやのこゝろは如何あるらん

月かけを見るにつけても戦死者の

あとの妻子はかなしかるらむ

有栖川宮威仁親王妃勳一等慰子殿下

をりにふれて

大御船あかあふひとのこゝろさし

これそ御國のたからなりける

裁仁王の江田嶋に出立玉ふを祝きて

世の中の人のかゝみとなるまで

たゆまずみかけ大和こゝろを

閑院宮載仁親王妃勳一等智恵子殿下

日露戦争につきて

ふないくさかちつゝきたる御いくさは

くかにもあたをうちや盡さむ

山階宮菊麿王妃勳二等常子殿下

折にふれたる

朝夕にかみにむかひてみいくさの

かつことをのみ祈るころかな

我君はいくさにいてまこゝろの

あらんかきりを盡しますらん

久邇宮邦彦王妃勳二等侂子殿下

廣瀬中佐の勇ましき戦死を聞きて

ものゝふのみちにちりにし櫻はな

いつの世までも香に匂ふらん

身は船とともに沈めてをよしくも

あたのみかこをふさきつる哉

賀陽宮邦憲王妃勲二等好子殿下

折にふれたる

御軍のたゝかふことにかつ見れば

神もいてゝやまもりますらん

いくさ人つるさいよくとき磨き

しこのしこくさかり盡してよ

待旅順口陥落

今日も亦鈴の音聞きてかのみなご

おちししらせを待ち渡るかな

雨中進軍

山みちにしのつくあめも物かはと

進むみいくさいさましきかな

遼陽の占領を祝ひ奉りて

うちつゝき仇のとりてを攻取りて

いよゝかゝやく日の御旗かな

伏見宮博恭王妃勳二等經子殿下

折にふれたる

とつ國の海路はるかにひゝくらし

わかみいくさのかちどきの聲

梨本宮守正王妃勳二等伊都子殿下

繻帶製造をなしつゝ

つゝとらぬ女なからもくはのため

なしえむかきり勉めてしかな

をりにふれて

日の御旗うらるの山に押し立てよ

君か代うたふときは來にけり

故北白川宮能久親王妃勳一等富子殿下

赤十字社にて繻帶をまさける時

白布にあかきころをまきこめて

つなきとめはや人のたまの緒

出征の軍人を思ひやりて

いくさ人君かためこはいひなから

いかに寒さの身にはしむらむ

勝報をきよて

かちいくさしらする文をみる度に

まつつはものゝ上をしを思ふ

故華頂宮博經親王妃勳一等郁子殿下

をりにふれたる

御軍にいさをあらはすものゝふの

つよきころを尊ごかりける

久邇宮篤子女王殿下

水 雷

四方の海に轟きにけりあたのふね

うちくたきつるいかつちの音

軍艦

二十四

日の本の國のまもりのいくさふね

かすそふ世こそ嬉しかりけれ

遠征軍をおもふ

君か爲とらふす野邊のゆきふみて

仇まもるらんますらをのこも

出征軍人の家族の心を思ひて

老らくの杖ごたのみしひごり子も

家おもふなこいましめにけん

騎兵

後れしこくつはみそろへ乗出たす

駒のあかきのいさましきかな

待旅順口陥落

かの港あたのまもりのかたくとも

攻め入らん日はほとやなか覽

雨中進軍

雨降りて暗さ夜半にもいくさひと

あたのとりてに進み行くらん

二十五

遼陽の占領を祝ひ奉りて

こゝをこゝて仇の守りしとりてさへ

わかみいくさの物となりけき

宣戦の大詔を捧讀して

侯爵 鍋島直大

しき島の大和こゝろをわたつ海の

内外に見せむみことかしこみ

國民の身のほとゝくに眞こゝろを

君につくさむときはこのとき

陸軍教授 丸山正彦

國こそりこゝろは矢たけはり弓の

ひいてはなたぬ大みことのもり

御歌所録事 遠山英一

人の道ふまぬえみしをこらさむの

大みことのもり讀むもかしこし

ますら男は大みことのり畏こみて

こたへまつれりかちどきの聲

須川信行

うへなはぬ國はあらしな天のした

今日しきましゝ大御ことのり

清水方涯

よこしまの國うてよとそ宣まへる

神のみこゑのうるはしきかな

吉峯浄

大君の大みことのりきゝもあへす

いさみたつなりやまどくに民

藤崎虎二

ほことらぬ身は營業にはけむこそ

大御こゝろにかあふなりけれ

藤田とも子

みことのり下したまへり益良雄の

御國につくすときはこのとき

山口清敏

おほ君のたけきみいつのはた風に

もろくこほるゝつゆのくに原

岡崎常磐

ひと筋にまもれつはもの千早ふる

神のみすゑのきみの御のりを

永田秀石

露西亞なるみやこに皇旗押立て

かちときあくる時は來にけり

兼行文藏

ものゝふの群にこそいらね朝夕に

ちからのかきり國につくさむ

大國魂神社に宣戰奉告祭の御使とし

て参りけるとき

男爵千家尊福

みいくさのしろに捧けむ白かねを

ゆたかに見せてつものる雪かな

靖國神社へ宣戰奉告の御使つかへ

つりしをり 華典 萩原 嚴雄

海山になほも出てゝやまもるらむ

國にたふれしかみの御たまは

此頃召集せられし兵士のあまた我邸

内にあつまりて列を正して立ちあらひ

其隊長とみゆる人のかしこくも宣戰

のみことのをよみさかすを見て

侯爵北堂 前田 朗子

みことのかしこみてさく武夫の

盡すこゝろやひとつなるらん

大君のみこゝろつくしかしこみて

思はずそてをぬらす今日かな

かすならぬをみななからも大君の
ためにはいかて盡してしかな

宣戦の詔勅下るを待ち奉りて

陸軍少尉 大橋 庸 輔

黒鷲をとく打てよとのみことのり

みいくさは人はまちにまつらし

征露軍宣戦の詔を紀元節の日かして

み奉りて 財部 實 秋

すめろきの遠つ御祖のそのかみの

みこと畏こみうちてしやまん

三島大社にて宣戦奉告祭を拜み奉り

ける時 鈴木 八 東

皇軍の御稜威をあふくかみかきに

かちときつくる鶏のこゑかな

白露の國交破れたるを聞きて

大槻 延 世

いさゝらはうちこらしてん大君の

みことに背く露西亞の醜等を

宗教大會の時 千家 尊 弘

戈とりて仕へぬ身にもくにのため

盡さんみちのあらぬものは

遙思戦地 (在英國) 男爵 末松 謙 澄

今日も亦假寝のゆめに見つるかな

益良たけをか血いくさのさま

皇威發揚 男 高崎正風

天つ日のてらさむかきり大みいつ

かゝやかすへき時は來にけり

皇軍奮進 萩原嚴雄

肉のやま骨のはやしも出てくへし

やかて仇うつ西伯利亞の野に

あたらぬ人のこゝろも寒からし

西伯利亞の野に御旗すゝまは

國威宣揚 大矢廣藏

天の下かゝやきわたる日のもとの

ひかりは君かみいつなりけり

入谷盛敏

しきしまの大和の國の日のみはた

天かしたにそかゝやきにける

原莊太郎

大そらにのほる朝日はたかせに

ふしなひきけりしこのしこ草

立野道子

うみ山になりわたるまで勝どきを

あけつゝかへれますらをの友

武雄釵子

いのちをは君にさゝけて妻子をも

かへり見さるやますらをの友

矢田部藤吉

報國盡忠

高麗の野やもろこし原にあら鷺の

たけりくるふを打てや益良夫

擧國一致

深澤清

作

大きみの大御こゝろをかしくみて

御國のあたをうちはらひてむ

王師

鉢嶺清

才

あめつちの神もいかりて打出つる

すめみいくさに誰かむかはん

出征軍人を送りて

伯爵

松

浦

太詮

けふよりはしへりあの野に日の御旗

たてむいさを待こそわたれ

侯爵北堂

細川宏

子

家ことに御旗かゝけてみいくさの

かど出いはゝぬ人なりかり鳧

出て立たん御いくさひとを國民の

いはふこゝろもいさましき哉

子爵

長

岡

護美

千里までこゝろこそゆけあつさ弓

ひきとゝむへき旅ちならねは

くろかねの峰の岩かどふみならず

こまにむちうてますらをの友

子爵

前

田

利豊

いさましき君かかどてに老の身も

ともなはれたき思ひこそすれ

子 爵 水 野 忠 敬

今よりはしこくさはらひ進みつゝ

わか日の本のひかりしめせよ

典 侍 高 倉 壽 子

國の爲身をかへりみぬますらをの

名は残るらんよろつよまてに

しきしまのやまと心のひとすちに

まことのみちにすゝみませ君

權典侍 千 種 任 子

みいくさにいてゆく人は國のため

おもふこゝろの外なかるらし

松 平 健 子

出たゝむみいくさ人のまこゝろも

おしはかられていさましき哉

掌 典 宮 地 嚴 夫

いくさ人おしたてゝゆく日の御旗

あふきてもろく露やきえなん

掌 典 北 郷 久 政

日の御旗うらるの山のいたゝきに

たてゝかへらん時をこそまて

千 家 尊 弘

額にはいた矢たつともあたひとに

そひらち見せそますらをの友

しへりあの野へのしこ草刈つくし

かへれわか友いはひてまたん

荻原 巖 雄

ふく風はつるきに似たるうらる山

ゆきふみしたき君はゆくらん

伯爵 西三條 實義

ちさとをも荒す大とりうちとりて

御國のみいつかゝやかせきみ

遠山 英 一

いてゝ行く車は見えすなりにけり

またよろつよの聲はとよめと

佐々木 信綱

さらはよと立いつる人おくるつま

勇ましきにもなみたくましき

岩崎 勝 從

いさましくいさをたてなん國の爲

つくさん時はあはれこのとき

小金井 喜美子

しへりあに積れるみ雪うらしほの

あつきこほりに身をいとへ君

中村 禮子

かちときをあけて歸らんいくさ人

おくるわれさへいさましき哉

竹下種長

天皇の御稜威を身にはよろひつゝ

大御はた手のさきかけにたて

小澤幸民

憎き鷲狩りつくすへきときは來ぬ

いさやすゝみてゆけよ益良男

角田ともゑ

よろつよの聲こそとよめいくさ人

おくりむかふるうまや〜に

大道寺繁禎

浦汐のからきめ見せてしこくさを

西比利亞遠くかりはらはなん

兵動はき子

のる人ものらるゝ馬もいさみつゝ

いてたつさまにちはみえ鳧

上野兼子

常ならは別れはかなしかるへきに

いさみ立てもおくる今日かな

印東丹靈

しこ草をうち靡かしていさをしを

いく千代までに残せますらを

英光英

鷲のすむららるの山をたひらけて

朝日のみはたたてよますらを

西野宮子

ゆくさきはふゝきのなかそ心して

矢玉のほかに身をないためそ

前島士亮

送らるゝ旗よりたかきみいさをゝ

たてゝかへれよますらをの友

菅野喜太郎

ふるへ君そのしへりあの奥までも

きたひあけたる大和こふしを

麻蒔義嶽

とつくにの人もおのゝく日の本の

ますらたけをの名を揚て来よ

竹崎嘉通

しへりあにしける醜草かりそけて

すめらみくにの道ひらさせよ

關川精一郎

うなる子も片言なからますらをの

門出をおくるはんさいのこゑ

羽田種子

つるき太刀ときてみかきて切味を

ほこりやすらむ日本ますらをを

柳田秀子

ますらををか母とわかれのひと言は

雄々しきものゝ悲しかりけり

眞野好文

きみか名をこま唐山のはてまでも

かゝやかすへき時はこのとき

橘順榮

なみたをはずりに寫し歌かきて

君をおくらん西比利亞の野に

矢島義道

大君のみたてとなりてすゝみゆく

仇の野やまにたてよいさをを

佐々豊水

立いつるみいくさ人のをたけひの

こゑいさきよき朝はらけかな

鈴木雅雄

大鷲を手とりになしてすみやかに

かへりきませよやまと益良夫

鹽原熊次郎

春かせにすめら御國のいくさはた

ひるかへしゆく益良雄あはれ

福田操三

大君のふかきめくみにむくゆへき

ときはこの時すゝめますら男

辻村通子

いさみたつますらたけをの心には

君とくにどのほかあかるらん

秋山すみ子

名におへるきたの荒鷺うちとめて

いさをたてよ大和ますらを。

小泉詠歸

ちらはちれ若木のさくらかくはしく

名をみいくさの庭にのこして

山東泰子

いひ残す言葉なしとていつる身も

いふにまされる思ひあるらむ

氏政長作

國のため醜のえみしらうちはらひ

歸り來まさんときをこそ待て

羽田種子

はまれあるみいくさ人の數に入る

君かうへこそうらやましけれ

某將軍の出征を送りて

侯爵山縣有朋

いつも先はゆつらさりしに軍ひと

送りていはふ身こそおいぬれ

井原陸軍少尉の從軍を送りて

伯爵東久世通禧

ものゝふの道をつくして末とほく

深きよき名を擧げよとそ思ふ

雨ふる夜兵士のいて立つを

侯爵夫人 鍋島榮子

雨風もいとほすむものゝふの

御國をおもふこゝろ雄々しさ

清見寺下にて征露軍隊をのせたる瀛

車にあふ道行く人々立とまりて萬

歳とよふに 御歌所寄人 中 邨 秋 香

これにこそくにの命は積まれたれ

けに萬さいといふへかりけり

陸軍中尉松平恒吉君の出征を

小 出 榮

筑波ねのおほちおとゝの高き名を

君かゝやかせしへりあの野に

相澤陸軍少尉の出陣を送りて

藤 田 時 尾 子

こと國の舟のかすくよするとも

日本かたなにきりはらはなん

弟か出陣を送りて 武 田 貢 子

君かため死ねとをしふる門出にも

なほさきはひを祈りこそすれ

勇ましくおくりなからも人しれぬ

なみたそ胸にわきかへりける

我子か遠征の首途に 横 山 清 男

あたと見し國うちむけよ日の本の

益良たけをのたけふまにく

西堂陸軍少尉に送る 丸山正彦

貝加爾の清きなきさに血かたなを

振すゝきつゝあけよかちとき

我艦隊の佐世保出發の寫眞を見て

西野宮子

いくさ船のせてゆくらむ益荒夫の

くろかねよりも堅きこゝろを

森山海軍少尉の出征を送りて

藤田時尾子

勇ましき大和ますらをいさきよく

うちしつめてむことくにの舟

田中儀平か入しうわつらひてあやう

き程あるに二男の豊吉か出征するを

思ひやりて

兵動ほき子

病みなから子を勵ましていてたゝす

親のこゝろのあはれなるかな

首途

陸軍大將男爵

西寛二郎

いくさひとこゝろの劍研きみかき

ひかりをはなつ西比利亞の原

この春はつゝちか岡をよそにして

高麗の荒野のはなをみるらむ

御用船仁川に入らむとして船員等に

わかれむとするとき 佐々木直

古への宇治のいくさにいやまざる

いさを、立てむありなれの河
初瀬川はなも、みちも散りはて、

かくはしき名は世に流れけむ

留別

陸軍工兵大佐

榊原昇造

先つ行きて君をし待たんあつさ弓

春日か、やく高麗のあら野に

馬關を過くるとき

陸軍歩兵中佐

伊豆凡夫

いくさふね赤馬の關を出て行けは

霧立ちまよふふるさとのやま

出發に際して

陸軍歩兵中尉

桂

勇

喜

滿洲にちりにしはなのいろかをは

海はらかけておくれはるかせ

豫て教育せし兵卒召集に應して來營

したる久振のうれしさに

かゝれとて植ゑにしその、櫻はな

今日匂ふへきときは來にけり

佐世保出發の際よめる

海軍二等機關兵

谷田志摩生

豫てより待にし甲斐の今日ありて

いくさの庭にむかふうれしさ

日露戦争により宗教大會を開きしと

きに

千家尊弘

鉾とりて仕へぬ身にもくにのため
つくさむ道のあらぬものは

戦勝祈禱

加藤義清

人みなのおたたくしならぬ事

神もかならすきこしめすらむ

山本惠篤

皇軍のちをいのれるわれひと

そのまこゝろは神やうくらん

津田吉親

大神にぬさとりむけてみいくさの

勝ちをいのらぬ人なかりけり

廣田直雅

み軍のふな出なりけり今日よりは

守りたまへやわたつみのかみ

神山正良

大方のねかひはおきてみいくさの

かつことをのみ先つ祈るかな

熱田皇太神宮にまうてゝ

光田文次郎

しへりあゝの草なき拂ふみつるさの

めくみあつたの神そたふとき

朗善公使

男爵 渡邊千秋

すみなれし霞かせきやゆめにみむ

花なきくにのはるのよなく

たひらきのなる日は又も歸りこよ

きみかまこゝろ人や知るらん

御歌所參候 大 口 鯛 二

汝か國にかへりつきなは矛ふせて

はやく降れとつけよこさしに

船よするみなとくまけいくさ

きつゝ國にかへりゆくらむ

遠 山 英 一

國のため君かつくし眞こゝろも

むかしく歸ることやくやしき

加 藤 義 清

あたとしも思はさるらむわか君の

恵みのつゆにうるほひし身は

鈴 木 雅 雄

むらきもの心つくしのその甲斐も

あらしとなりてかへる君かな

ローゼン男を送りける時

侯爵夫人 鍋 島 榮 子

妻も子も打つれ立ちて行く見れば

仇としりてもあはれなりけり

兵士送迎のさまを 宇 都 宮 信 亮

母のせにおはれて出しみどり子も

片ことなからよはふよろつ代

露 探 御歌所參候 千 葉 胤 明

御さくさの門出をいばふ血祭りに
まつこの犬をきるへかりけり

加藤義清

つゝとりてわれに射向ふ仇よりも
にくきは彼かこゝろなりけり

遼東還付の當時を思ひ出て

大口鯛二

一度はまきてかへりし日の御はた

またおしたてむ遼とうのやま

たなそこの珠奪はれしそのかみの

うらみはらさむ時は來にけり

●仁川海戦

二月十日瓜生第
二艦隊司令官發

九日正午露國軍艦ワリヤーク及コレーツ仁川港より出で來る我艦隊之
れを八尾島以西に邀撃す砲戦三十五分の後彼れは仁川港に退却せり午
も四時三十分コレーツは爆發し其後ワリヤーク及露國漁船スンガリー
後破壞沈没せり我艦隊は一の死傷者なく船體も損害無し軍氣大に振ふ

星 (寄時局) 伯爵 冷泉爲紀

いくさ人しのひて進む袖のうへを

さひしくてらすあか星のかけ

二月十日の口すさみ

海軍少將 肝付兼行

からいくさ祝ふみはたに國たみの

あかきこゝろの見ゆるけふ哉

二月九日に 御歌所寄人 坂 正 臣

われどわかへる磯邊に碎けり

神の御ふねにむかふあたなみ

仁川の海戦に敵艦二隻をうちしつめ

たりときたるをり 千葉 胤 明

これをまつ手初めにしてあたの艦

あらむかきりやうち碎くらむ

榑 崎 庸 輔

外國にひきわたらん日のもとの

みいくさふねの勝ときのこと

兵 動 は き 子

ふな戦まつかちたりときくやかて

老もうなるもおとりいてたり

逸 見 嘉 種

みいくさのその手始めにあたの艦

出るまもなくうちしつめけり

樋 口 作 治

わかために打ちくたかれて仇の艦

うみのもくつとなりける哉

村上千代田艦長の仁川在泊中の苦心

談をよみて 千葉 胤 明

兎に角におもひし程やいさきよく

たかふよりも苦しかりけむ

時事有感

侯爵 山縣 有朋

いかにして君にむくいんかゝる時

いたつきなから老にける身を

侯爵 鍋島 直大

バイガルの水くれなゐに見ゆる迄

向ふかたきを斬りてなかさむ

日の御旗やかてかゝけむ人のみち

しらぬ露西亞の民ものこらす

今日よりはうみにくぬかに御軍の

かちときわけぬ時やあからむ

農工業をますく勉むへきことを演

説しけるをり 男爵 千家 尊福

つくさひとらさむころを産業の

うへにうつして勉めさらめや

甲辰の春をりにふれて

男爵 渡邊 清

このはるはすめら御軍の旗の手に

にほふさくらの花をまたるゝ

立春朝おもふころを

男爵 藤枝 雅之

みいくさのすゝむをりしも朝日影

てりかゝやきて春たちにけり

折にふれて 陸軍少将 佐々木 直

虎すめる國のさかひにこまたてゝ

み楯をつかんどきは來にけり
かねてより我おほ君にさゝけてし

身を捨てぬへき時はこのとき

男 雷 石 河 光 烈

御軍はうみをわたりていてにけり

しこのあた浪いまそくたけむ

權典侍 小 倉 文 子

親も子もかへりみすしていくさ人

君にいのちをさゝけゝるかな

侯爵母堂 前 田 朗 子

勇ましきみいくさ人のいきほひに

あた野のつゆやもろく碎けむ

大君にむくいまつらんどきは來ぬ

いよゝみかけ大和たましひ

掌 侍 小 池 道 子

老の坂こえしをみなもかゝるとき

盡さむみちのなからましやは

主殿助 川 上 鎮 石

君か爲えみしうつ世にあひぬれど

老たる身こそくやしかりけれ

時事偶感 陸軍歩兵少佐 森 氏 男

龍と云ふ今年とゞもにきたそらの

あやしき雲をふみやふらまし

陸軍一等軍醫 飯 島 茂

銃とらすかたな揮はぬ身なからも

君思ふこゝろのなに劣るべき

陸軍歩兵中尉

堤

角

一

をしまれて玉となりつゝ碎けよな

瓦となりて世にあらんより

大君のためとおもへは降るゆきの

なかにほゝるむ梅のはなかを

小金井喜美子

親に子にうからに友におくられて

ゆく益荒雄のはこらしけなる

尾崎正語

うくひすの初音よりなはこの頃は

またぬ日もなし號外のことゑ

大野秀子

やふさかと世にうとまれて積置し

寶藏ひらかんときはこのとき

富士川武重

今日よりは酒もたはこも忘れつゝ

まことを君にさゝけまつらむ

松澤正澄

御軍のたつときくよりひらきもの

こゝろやすめむ時なかりけり

三輪うら子

らさきよくらくさに向ふ益良雄の

かちてかへらむ時をまたるゝ

平 岩 日 基

仇浪はおそひくるとも何かあらむ

藻屑となしてやらむとぞ思ふ

高 木 三 樂

君のためはた國のためいへのため

起てよ奮へよやまとますらを

太 田 尙

いさましき門出いはへと益良雄か

のこす妻子を見るかかなしさ

梶 田 愛 子

太刀はきて出ます兄の雄々しさを

見送るゆふへつきかゝやきぬ

西 野 宮 子

かゝるときつくさぬ人は日の本の

みくにの外におひはらはなん

毛 利 幾 雄

みいくさの數にもいらすたてまつる

ものもなき身の口をしきかな

能 勢 頼 保

わたなせる國のくる船くたかれて

あとしら波となりにけるかな

富 士 川 武 重

御祖よりつたへくしつるき太刀

あくまで染めんしこの血汐に

安 見 通

おほみよのはるの光にきえかへる

雪こそわたのすかたなりけれ

寺 田 秀 幸

ますら男か國のためとて妻や子を

かへり見すして出立つあはれ

海軍少尉候補生 宮 部 光 利

哨兵のしはふきさむく夜は更けて

左舷にはほそき三日つきのかけ

門末の婦人達に告ぐとて

伯爵夫人 大 谷 籌 子

をみなとてすめらみ國の民なれば

つとめさらめや勵まさらめや

我家軍人の宿舎に充てられたるとき

鶯のなきければ 伊 達 正 子

うくひすも御軍ひとをなくさめよ

もよろこひの聲はりあけて

吾か室も明けわたすとて

文よみしわか部屋にまていくさ人

きてやとれるは嬉しかりけり

始めて雪のふりける時 丸 山 正 彦

待ちわひし雪はふりきぬ陸路行く

大みいくさのおとつれいかに

日露開戦をきいて 池澤清弘

大君に捧けまつりし身にしあれば

あたになすてそ益良夫のとも

雪の日外征の將卒を思ひやりて

藤野莞爾

このころは雪かき分けていくさ人

いかなる床にかりねしつらん

●旅順海戦

二月十一日東郷聯合艦隊司令長官發

聯合艦隊は去六日佐世保を出發したる後總て豫定の如く行動し八日正午我驅逐隊は旅順にある敵を攻撃せり當時敵艦隊の大部隊は旅順口外にありて我驅逐隊の水雷に掛りしもの少くともホルターワ形一隻巡洋艦アスコリッド外二隻ありしものと認む我艦隊は九日午前十時旅順口沖に達し正午より約四十分間港外に残留せる敵艦隊を攻撃せり此の攻撃の結果は未だ明瞭ならざるも敵に少からざる損害を與へ大に彼の士氣を沮喪せしめたるものと信ず敵は漸次港内に逃走するもの、如し午後一時戦闘を止め引上げたり此の攻撃に於ける我艦隊の損害は輕小にして寸毫も戦闘力を減ぜず死傷は約五十八名にして内戦死四名負傷五十四名なり

仁川方面に向たる分遣艦隊の戦況は既に瓜生司令官の直接電報せるが如し我驅逐隊は敵の砲火を犯して攻撃を果し其大部は既に本隊に合せり艦隊に御乗艦の各殿下は皆御無事なり我將本一般の戦闘に従事せる

状況は頗沈着にして恰も平常の演習に異ならず戦闘後に於ける士氣は益々旺盛にして而かも舉動は愈々沈着なり今朝來風波ありて艦船間の交通不通の爲め未だ各艦よりの詳報に接せず不取敢右概況のみ報告す

海軍の大勝利をきゝて

鍋島榮子

外國のはてまでひゞく勝ちいくさ

いよゝくはけめ大和ますら男

千爵梅溪通治

ますらをはやまと心をあらはして

まつ海はらをしめてけるかな

松平健子

いさましくかたきの船をうちしつめ

手はしめよしといはふけふかな

千種任子

軍ふね打しつめたるあらなみの

うへにかゝやく日の御はたかな

文學博士 木村正辭

荒鷲のおそろしやとおもひしか

もろくも羽かひうたれける哉

宮地嚴夫

騒きたるわたのみなどのいくさ艦

けふり寂しくありにけるかな

丸山正彦

天つ日のひかりさしそふわたの原

向ふところにあたなみ立たす

小出 榮

いくさ船かちしたよりに浪たて

みやこもゆるするよろつ代の聲

鍋島 茂子

ためしなき此御いくさに加はりて

勝ちしひとく嬉しかるらる

東久世 玉子

天つ日の佐世保をいてし益良雄の

いさをかゝくる海のうへかな

岩倉 米子

たくひなきみいくさふねに武士の

名は雲井まてとゝろきにけり

御歌所参候 鎌田 正夫

吹おろすやまと島根の夜あらしに

鷺はつはさを折られけるかを

千葉 胤明

たのみつるその親ふねも碎かれて

うかふ瀬なしと世を歎くらむ

加茂 水穂

日の御旗かゝやきわたるうな原に

くたけて消えし露のあたふね

須川 信行

たちさわく浪をしつめて日の御旗

ふたゝひたてん時は來にけり

兵動はさ子

かちどきの聲もきこゆる心地して

あなありかたしけふのにひ文

青砥環

ますらははすゝみゝて仇の守る

みなとの船をうちしつめけり

柳田秀子

勇ましきみいくさ艦のつゝおとに

仇はきもをやまつゝふしけむ

大野泉

天つ日のひかりに消ゆるしこ草の

露のいのちそはかなかりける

神道壽

大君のみことかしこみいくさひと

わたの黒ふねうちくたきけり

石丸かな子

わたの船うちしつめけん海はらの

御船にとよむよるつ代のこゑ

中野半

魚かたの水のいかつちとゝろきて

わたのくる船うちくたきけり

山田善之助

しきしまのやまとたましひ大砲に

こめてそ仇をうちくたさけん

鶴田千秋

十とせまへうちやふりにし氷より

なほはかあくも碎けゝるかな

木谷壽子

さらぬたにみいつ輝く日のもとの

みいくさ船のひかりそひつゝ

吉水宣正

あつさ弓はるをも待たて仇のふね

こほりと共にくたかれにけり

菊地盛實

敵の船くたくひゝきになかき夜の

ねふりをさませとつくにの人

酒井勝貫

わたの船まつ沈めぬる音つれに

かちときあけてよろこひに鳧

高木三樂

かちときの聲と共にふるふかな

君かみいつはわたのみなとに

南喜作

闇の夜に五百重の浪をけやふりて

仇うちくたくふねのをゝしさ

三浦海軍中尉の戦死を悼みて

都筑高庸

君か身はたまどひとつに碎けても

たかきいさをは世にそ残れる

富士乗組三浦中尉 宮崎奈美子

艦の名の富士よりたかきいさをしを

千代にのこして散しきみかな

梶村候補生 男爵 渡邊千秋

いかにしてまたうら若き梶の葉の

一夜のしもにちりはてにけむ

大 口 綱 二

つほみにて散りし初瀬の山さくら

かくはしき名はよろつ代迄に

遠 山 英 一

かくはしき君かその名は言の葉の

はなど共にそ世にのこりける

薬師川 亮 音

おくれしと早くも君はちりはてぬ

はつせの山のはなゝらなくに

高 橋 種 之

初瀬山さかりのはるをまたすして

つほみなからに散るそ悲しき

舍弟梶村文夫の戦死をさへて

歩兵中尉 土方 清

初瀬やま山よりたかきいさをしの

名をのこしけむ和田つみの底

辭世 海軍少尉候補生 梶村文夫

名も初瀬いくさもこれか初なれは

おくれはとらし君のみために

露艦わか商船をうちしつめたるを

鍋島榮子

戦ひのみちもしらすやみいくさの

艦にあらざるふねをしつめて

奈古浦丸船員の生還をさゝて

大口鯛二

家ひとは夢にゆめみしこゝちせむ

うせぬと思ひし人のかへりて

紀元節の日 佐々木信綱

大宮のゆにはのうちにかなから

神に告げますこのかちいくさ

戦地にて神武天皇祭の朝旭日を見て

陸軍一等看護長 庄司祐亮

しのゝめの空くれなるに昇る日は

八咫のかゝみのひかり也けり

紀元節に皇軍の勝利を祈りつゝ

中島隈治

天てらす神の御稜威をとつくにの

北のはてまでかゝやかしませ

立春の日師團の動員令を發せられけ

れは 内村勗

あら鷺の羽風さわけとらやすの

國はのとけくはるたちけり

動員令發布の折に 伊勢齋助

みいくさの後の備へとはものを

めさるゝけふそ雄々し刈ける

國債應募 男爵 高崎正風

仇うたむためのおひめは國たみの

かたにおもきを覚えさりけり

阪正臣

御軍のかすならぬ身はこれをたに

國のみたてと負ひてつかへむ

成田聽泉

仇うたんいくさの資をみつくこそ

くにつみ民のつとめなりけれ

鞍智芳章

大君のめくみのつゆはやまふきの

花のかすにもしるき今日かゑ

扇松穆

つみおさし黄金も今ははなさきて

御國のためになるそうれしき

國債募集 本井源十郎

家のわさ勤めはけみておいの身も

いくさの代のたすけをやせん

國庫債券の募集のために演説しける

とき 男 爵 千 家 尊 福

御軍につらならぬ身もしろみつく

みちには人におくれさらなむ

軍資獻納 男 爵 渡 邊 千 秋

國のうちにつみし黄金も大つゝの

ひかりとありて世をてらし息

いのちさへすつへき世には白金も

こかねも何かわれをしむへき

大 口 鯛 二

ふたつなき命をさへにさゝくるを

黄金しろかねなにかをしまむ

樋 口 國 五 郎

み軍の數に入らざる身にしあれば

こかねさゝけて君につくさむ

土 井 池 源 吉

ほとくにつみてさゝけよ黄金草

花のさくへきときはこのとき

戸 島 重 巽

たてまつるかねこそなけれ國の爲

つくすこゝろの一つのみにて

小 林 元 治 郎

つとめつゝつねにこかねを積置て

國にさゝけんときはこのとき

土 田 道 一

いさゝかの生業なしておくる身も

こゝろはかりを捧けまつらん

成田 聽泉

まつしとてやみぬへしやは僅なる

こかねなりとも捧けまつらむ

貯藏金屬器をさゝくる人々のおほし

ときゝて 男爵 千家 尊福

白かねもこかねも國にさゝけつゝ

さしそふ家のひかりをそ思ふ

金銀提供につきて 伊達 正子

これもまた國のためには捧けてむ

黄金のかさしひとつなれども

明治三十七年二月内務省より發せら

れたる訓示を讀みて 緑野 多三郎

進みゆくみいくさ人のこゝろもて

わさいそしめよあはれ國たみ

東宮へ御使に參りける道にて農夫の

馬をひくをみて

掌侍 小池 道子

御軍のみちにたてんとしつのをも

てかひの駒をひきて出つらん

或地方にて馬匹徵發の光景をみて

森田 春次

ひきよせてえらひあけたる軍馬の

わたへも聲も高くそありける

軍馬徴發

遠山英一

くるまひく馬もめされてあて人も

おほかた徒歩に成にけるかな

伊藤忠恕

御軍にひきいたされてしつか飼ふ

こまもいさめる春の野邊かな

徴馬 奈良慶子

いさみつゝ出立みれはくにの爲め

馬もつくさんこゝろなるらん

神鳩 男爵 高崎正風

御いくさに事ふる鳩はいにしへの

わたのからすの跡やおふらん

男爵 渡邊千秋

あらわしに告げよかみ鳩三人のみ

いきて歸りしむかしかたりを

坂正臣

神いくさいまかたつらん御尾前に

鳩そむれゆくつはさきよめて

鎌田正夫

かみもまつはどの使をつかはして

君か御いくさまもりますらん

大口鯛二

みたらしにつはさ清めて鳩もまた

大御いくさのさきにたつらむ

遠山英一

御軍につかへむものとみそきして

鳩もやしるをたちいてにけむ

須川信行

みな人のねかひをいれしはこ崎の

神のつかひにはとやたちけん

三橋中雄

禊してすめらみいくさにあともひし

鳩もあやしきかみにさりける

松久禹門

はこさきの宮居の鳩はみいくさの

すゝみゆくてを守るあるらむ

住本千秋

みいくさの道しるへにと神はとは

しへりあさして出立ちにけん

松澤正澄

御軍のしるへせんとや千はやふる

神のめてますはともいてけん

財部實秋

八幡やまかみの使ひのはとのむれ

みいくさ船をまもりてやゆく

小笠原長祥

大船のけふりにむせふうなはらに

玉とくたけて見ゆるかみはと

高千穂靈火 宮地 嚴夫

世をまもる神のみいつは高千穂の

高根の火にそあらはれにける

加藤 義清

高千穂のみねの神火はみいくさの

進みゆくてをてらすあるらん

富士川 武重

みいくさの守りとなりて高千穂の

御祖のかみやいて立ちにけん

天佑 阪本 正臣

祈らても道にかなへるみいくさは

あまつ御神やまもりますらん

遠山 英一

たゝかへは必ずかちをしめてけり

神のまもれるおほみいくさは

軍人 權掌侍 北島 いと子

天津日の御旗に向ふあたはあらし

すゝめやくやくまとますらを

相羽 彌平

しき島のやまどこゝろの光りこそ

とつ國までもかゝやきにけれ

舞田 貞子

荒わしのかけるうらるの山あから

奪ひとらすはやましとぞ思ふ

矢 島 義 道

玉きはるらのちさくけて敷しまの

やまと皇國をまもるますらを

●第二回旅順口襲撃

二月十六日東郷聯合艦隊司令長官報告

二月十三日驅逐艦の一隊大風雪を冒して旅順口に向ふ途上各艦を見失ひて相分離せしも司令艇速鳥及朝霧のみ旅順口外に達し朝霧は十四日午前三時港口を偵察し盛に陸岸砲臺及哨艇の砲火を蒙しに拘らず黒烟を上居る一軍艦に對し水雷を發射し且敵の哨艇を砲撃して無事歸來れり速鳥は五時旅順口外に達し港口に近接し敵の二艦を暗中に發見すると同時に其砲火を受たるも直に一軍艦に對し水雷を發射し其爆發を確認して無事歸來せり速鳥朝霧の勇敢なる襲撃の效果は暗夜の爲知るに由なしと雖寡くも敵をして益戰慄せしむるの大功ありたるは疑なしと認む

旅順港の燈臺を 海軍大尉 野 崎 小 十 郎

わかふねの路のしるへとなりて鳧

仇のとりてにてらすともしひ

旅順口再攻撃 男爵 渡邊千秋

波くゝる魚のひれふるおとたかみ

あら驚さへも身をかくしけり

小池道子

仇艦をうちくたきたるはやわさは

神かひとかとおもふはかりそ

加藤義清

速鳥のはやさすかたはあらわしの

みはれる目にも懸らさりけり

三橋中雄

たえまなく打やあられの玉くしけ

ふたゝひふねをくたきける哉

松久禹門

いく度かわたのくる船うちくたき

御國のみいつかゝやかすらむ

水雷艇 華族女學校學監 下田歌子

稻妻の目にもとまらぬはやふねの

行手にひゝくいかつちのおと

九鬼憲子

雨とふるたまの下ゆくはやふねは

ときいかつちも及はさりけり

水雷 田中直二

鳴神はみそらはかりとおもひしを

ひらけゆく代は水くゝるなり

祝春日日進二艦安着

男爵 渡邊千秋

みいくさのふねをもちこし外國の

ひとのこゝろを思ふけふかな

大口綱二

事もなくつく艦みても和田つ海の

神のまもれるほどそしらるゝ

遠山英一

きつかひし御いくさ艦の事なくて

みちどいりする今日を嬉しき

兼島景福

春日艦

春の日のしは路のどかに渡りきて

みいくさ船のちからそへけり

日進艦

護得久朝常

日にすゝむわかみ軍のふねの名の

上にもしるくあらはれにけり

●第三回旅順口攻撃

二月二十六日上村第二艦隊司令長官報告

我艦隊は總て豫定の通り行動し二月二十三日夕旅順方面に近づき旅順港口閉塞の任務を有する特別運送船隊並に其乗員收容の任務を有する水雷艇隊を放つ翌二十四日午前十時豫定集合點にて各驅逐隊水雷艇隊に會す港口閉塞の狀況は報國丸は港口左側燈臺下に武州丸は其外方に至り各自から破壊沈没天津丸武陽丸は老鐵山の東に至り自から破壊沈没仁川丸も亦自ら沈没す以上五隻の乗員は總て收容し得て無事なり我驅逐隊水雷艇隊も總て無事にして港外にバヤーン、ノグヰツク及び敵の驅逐艦四五隻あるの報告を得たるを以て同夜我驅逐隊水雷艇隊を分つて旅順口大連灣及び鳩灣の偵察襲撃を命ぜらる

艦隊は迂路を航し二十五日午前七時豫定集合點にて各驅逐隊水雷艇隊に會合せしも未だ其戰況を詳かにするを得ざりし其れより本隊は旅順口に向ひしに港外左方に當りバヤーン、アスコリッド、ノグヰツクの三隻徘徊し居るも遠く出でず砲臺下を陸岸近く東西するを見午前十一時四十五分より敵艦及び陸上砲臺に向ひ遠距離砲撃を始む砲艦及び陸上砲臺應戰せしも正午過五分ノグヰツク先づ港内に逃れアスコリッド、バヤーン續て港内に逃走せり此分にては港口閉塞は其効果少なりしが如く甚だ遺憾に堪へず是に於て各艦巨砲を以て港内に向つて砲撃を行ひ盛んに火焰の揚がるを見る砲撃十五分の後之れを止め引上げたり此砲戰にて多少敵に損害を與へ且つ港内を威嚇し得たりと信ず此間我巡洋艦隊は老鐵山附近にて西方より來れる敵の驅逐艦二隻を認め其一を逸せしも他の一隻は之を鳩灣に追窮し終に之れを撃破せり我艦隊總て一の損傷なし東郷聯合艦隊司令長官は猶ほ前進地にあり以上は司令長官より報告あるべきも本官より不取敢報告す

旅順閉塞隊

鍋島 榮子

ますらをの猛きこゝろのかく迄に

すゝむも君かみいつなりけり

はからるゝ事とはしらすあた人は

うち沈めぬと見しかをかしさ

おほきみにさゝけし身とて潔よく

死なんときそふ船いくさかを

男爵 千家尊福

わた舟のゆきかふ道のしからみに

身を沈めてといさみたちけむ

長谷場純孝

海原のそこにしつみしすらをの

名こそ雲井にたちのほるらむ

下田歌子

大砲の火くちにむかふふね見れば

ひとは神にもおとらさりけり

神の手にすくはれにけり水そこに

沈むと見えしすらをわはれ

角田ともる

石をつみし船もろともに沈めども

世にとゝろきぬ高きいさをば

宮地殿 夫

國のためなけうちしかと眞白たま

くたけすて皆かへりつるかあ

千葉胤明

いかてかは斯るたくみを成し遂む

生きて歸らぬこゝろならすは

須川信行

たけき名を功とともにたてにけり

はかりしことく船はしつめて

清水方涯

石よりもおもきつとめをつみ重ね

沈むるふねにのれるますらを

布施源右衛門

なき物に身をはなしつる船出には

やまとたましひのみや乗けむ

尾崎吉従

わか船をうみにしつめしみなど口

せめふたきたる益良雄あはれ

矢田部與市

大砲のたまかいくゝりますらをか

たてしいさをや神のわさかも

角田履正

又どなき花のほまれのいさきよく

ちるをこゝろの大和ますら雄

梅原機關兵(本會河北支部追悼會兼題)

伯爵 東久世通禧

身を棄てゝわたの港をふたきけん

一木のうめのかをりたかしも

男爵 高崎正風

火花ちる吹雪のうちにさきかけて

散りにし梅の香こそたかけれ

侯爵 鍋島直大

君かためふねと共にもすてし身の

ほまれそのこるもろこしの海

鍋島榮子

いさきよくいのちをすてし梅原の

かをりは高くよゝにのこらむ

男爵 渡邊千秋

かへらしとともに誓ひし言の葉を

ふみゆく君かこゝろをゝしも

子爵 竹屋光昭

かくはしくきみか勳ものこるらん

千代の末までみなとふささて

子爵 水野忠敬

きみか名の梅もろともに薫るらん

御國のためたてしいさをは

子爵 長岡護美

世にのこる名こそひろけれ海原に

みつくかはねは泡ときえても

下田歌子

はるさむきからのみなとの夜嵐に

をしくもちるか梅のひとはを

文學博士 木村正辭

くにのためたてし勳は代々ふとも

くちせさるへし傳へゆくへし

阪正臣

名は花とさきこそかをれうめ原の

身はそこひなき海にしつめて

宮地嚴夫

あたなみのさむく港になけうちし

たまこそ國のひかりなりけれ

萩原嚴雄

水そこのこゝしき岩と身をなして

今もみなどをふさきてやたつ

中邨秋香

をかしつる仇の玉の緒たえてよに

類ひなき名はとゝろきにけり

小出榮

身はふねと共にしつめと雲井まで

高きその名はとゝろきにけり

鎌田正夫

あたなみに心とちりしうめのはな

かをりしたはぬ人やなからむ

大口鯛二

たゝ一人かへらぬ君そいたましき

もとより捨しいのちなれとも

千葉胤明

たましひはしつめし舟に止まりて

仇のきもをやなほひしくらん

鍋島茂子

國のためその身をすてしうめ原の

香はしき名を世に知られける

鍋島信子

例なきいくさのつれにさきたちて

たふれし身こそほまれ也けれ

遠山英一

くすのきのかくはしき名に倣ふ覽

つほみなからにちりし梅か香

加藤義清

大きみの御楯となりてむないたを

うちぬかれたる益良雄あはれ

佐々木信綱

國のためかくはしき名を残し置て

水泡とちりしうめのはつはあ

須川信行

身をすて、海にしつめしいし船は

君かいさを、つみしなりけり

船曳術

かくはしき名のみ残してわたの原

泡ときえにし人をしそおもふ

雨森巖

おくれしとさき出しものを梅の花

なとちらしけむ沖つしほかせ

井原豊作

かくはしき名のみ残して散にけり

またうらわかきうめのはつ花

片山幾子

ためしなきいさを残して散はてし

ひと木の梅のかくはしきかな

大矢廣藏

天か下にはへるなかにさきかけの

名にそむかさるうめの花かな

大矢弓吾

さきかけて開きし花のいさきよく

ちれるや梅のこゝろなるらむ

矢寺甕雄

白雪のつもれるはらにさくうめの

花はちりても香にはふなり

岡市正人

國のためこゝろかためて石ふねと

ともにしつみし君をしそ思ふ

南耕信

かくはしき名をはとめて夜嵐に

ちりにし梅のはなそゆかしき

南復三

國のためいへをも身をも願りみす

たゝまこゝろをつくしつる哉

柳原大次郎

ちりてこそたかき馨はのこりけれ

豊野のさとのうめのひともと

波多野花涯

いかてこのいさをは立む沈めてし

石よりかたきこゝろもたすは

田邊與三郎

梅のはなさかりもまたて散ぬれど

かくはしき名は千代に匂はむ

森本重次郎

折れてこそかをりは高く成にけれ

あはれ若木のうめのひともと

西尾雪江

いしふねと共にその身は沈めども

名は幾千代も朽ちせさらまし

家村馬吉

梅のはな夜半のあらしに散ぬれど

たかきかをりは世に残りけり

狩野齋一

大船をしつめて夜半のなみかせに

ちりにしうめのかくはしき哉

藤野堯爾

きみかため名もかくはしき梅原の

みをしつめてそ仇ふせきける

仁川丸の舵手二等水兵安保助藏氏

男 爵 千 家 尊 福

舵とれば波もさわかぬいさをしは

かゝけし舟のほにも見えけり

武州丸の中川一等兵曹

海こしの火にうちむかふおも影を

けふりの中にきみを見せける

決死隊林紋平氏 遠 山 英 一

血しほもてかきなかしたる水莖の

あとにもしるし赤きことゝろは

伊 藤 忠 恕

かくてこそ國のひかりを益良雄か

赤きことゝろの見ゆるなりけれ

鹽 原 熊 次 郎

眞ことゝろのあかき血しほに命毛を

そめてそ願ふくにのみために

福 井 義 眞

指さりてちかひしふみの血汐こそ

赤きことゝろのかさりなりけれ

橘 順 榮

血しほもてかきしたゝめし願ふみ

赤きことゝろのいろを見せつゝ

決死隊士谷田機關兵を 雨 森 巖

國の爲しなんと思ひしまこゝろを

神もめてゝやまもりましけむ

海軍々人の戦死者を悼みて

鹽原熊次郎

國のためうしほの花とちりぬれど

芳はしき名は千代にのこらん

旅順口閉塞船に附隨して決死隊を收容

したる水雷艇隊司令櫻井少佐のもとに

千葉胤明

思ひやるも嬉しかりけり残りなく

すくひし時のきみかこゝろを

はやふさのかけるか如く乗めくり

すくひあけゝむ大丈夫のとも

死を決して閉塞の任に就く折

海軍中佐 廣瀬武夫

報國のおもひやたかさかさやま

あさ日に匂ふしきしまのたみ

敷しまの笠置のみやまほうこくの

あさひに匂ふやまどこゝろは

海軍大機関士 大石親徳

敷島のやまどものふこゝろして

亞細亞のうみに波な立たせそ

海軍一等兵曹 米良正義

大君にさゝけまつりしこのいのち

なとて惜まんいまのこのとき

同し折に岩淵上等機関兵曹に送る

海軍三等機関兵 谷田志摩生

玉の緒のよしたゆるとも我たまは

おにともなりて仇をやふらん

旅順口閉塞隊に入り戦死の人々を

千家尊弘

なきからは水つくかはねとくちぬとも

なとかその名の沈みはつへき

●浦鹽砲撃

三月十日土村第二艦隊司令長官報告

豫定の如く六日朝結氷せる海を航し浦鹽斯德東口に達せり敵艦軍港外に見えずバルサンギン岬半島及ボスフォル海峡砲臺の射界を避けたる位置に接近し約四十分間々接射撃を以て威嚇砲撃せし後引上げたり此砲撃は相應の効果ありしと信ず陸上砲臺には陸兵を見しも更に應戦せず午後五時頃東口方向に當り黒煙の揚るを見る或は敵艦の出て來りしが如くなりしも煙は次第に消滅し判明ならず七日朝亞米利加灣スツレロク灣を偵察せしも異状なし正午再び浦鹽斯德東口に迫りたるも敵艦見えず砲臺發砲せず其れより轉じてボシエツト灣を偵察せしも敵なし

浦鹽攻撃のをりに敵艦のありさまは

かくやとおもひやりて

男爵 千家尊福

あた艦のよるへとたのむ浦しほは

からきめ見へき名とや知けん

浦潮砲臺我艦隊の攻撃に應戦する能

はさりしよしきゝて 宮 地 殿 夫

うたれても打かへすへき術をなみ

みなとの内にたちさわきけむ

大 口 鯛 二

うらしほの山彦いかによわりけむ

波のうつにもこたへさりけり

浦港第一回攻撃上村長官の公報を讀

みて 千 葉 胤 明

幾度もからき目見せてうらしほの

艦もとりてもとるへかりけり

浦港にある敵の艦隊を 遠 山 英 一

ほともなく御國の艦となりぬへし

のかれていてむ道しなければ

篠 山 晃 三

うらしほのうらの黒船いたつらに

うさすとなりて朽やはつらむ

浦鹽斯德砲擊 鴈 金 養 齋

日の御はた向ふをまちて解ぬへし

うらしほ風にとちしこほりも

仁 保 久 昂

やかてわか占め野とあして浦潮の

あかたの春のわか菜つみてん

濱崎兵曹の最期を

千葉胤明

砕かれしこほりは艦にのこりつゝ

水泡ときえしひとそかなしき

鈴木雅雄

うちくたく氷のおとゝもろともに

きみかはまれやよにひゝく覽

寒夜艦上の夜衛を思ひやりて

下田歌子

毛衣のうはきのみそてなみこえて

つらゝゝるる夜をもり明すらん

折にふれて

雨森巖

うらしほの氷もうすくなりぬらん

仇のふねともどくうちくたけ

土田道一

あつ氷くたきゆくらしますらをの

うらしほ風はよしさむくとも

東郷司令長官 男爵 千家尊福

はたふねの三笠は君かいさをしを

さして仰かむ名に社ありけれ

檀崎庸輔

あたのふねうちしつめたるみ軍の

ほまれは君かはまれありけり

大口鯛二

おどろかぬものこそなけれふな軍

開くすなはちたてしいさをに

遠山英一

打ちいたす玉のひゝきに艦よりも

仇のこゝろをまつくたきけん

須川信行

かすくのみにくさ船にあまる覽

浪のひまなきこゝろつくしは

篠山晃三

わたのはらひろきいさをは大船の

けふりにたちて世にしられ梟

矢島久米藏

いやたかき君かいさをはさし昇る

三かさの山のつきとあふかむ

木庭袋連

天の下かくれなきまておほひけり

さすや三かさの高きいさをは

瓜生海軍中將 須川信行

にはとりの林にまつはひゝきけん

御いくさ船のよろつよのこゑ

矢田部藤吉

高麗の野のしこ草拂ひつちかひて

やまとさくらの種を植ゑけり

風流艦長の名ある八代大佐を

山 領 利 貞

小部島の千とりも聲やあはせけん

ふく笛の音の千代のしらへに

閉塞隊總指揮官有馬海軍大佐

三 橋 中 雄

旅ころもきつゝいさをゝたち花の

かをりゆかしき君にもある哉

武富磐手艦長 光 田 文 次 郎

いはほより堅さいはてに乗込みて

あたの大ふねうちくたきつゝ

亞總督 男 爵 渡 邊 千 秋

はるひんは春なほ寒ししはしまて

我御いくさのみいつみせはや

大 口 綱 二

あなとりし昨日の夢やさめぬらん

わかみいくさの砲のひゝきに

雨 森 巖

ひたすらに國擴めんとはやりつる

おのかたくみを今は悔ゆらむ

黒鳩公大將の極東に赴任するを

千 葉 胤 明

御軍のまことのちからしるかれか

こゝろの駒やすゝみかねけむ

ニコライ主教 遠 山 英 一

大君のおほみめくみをいのちにて

おのか國にもかへらさるらむ

をりにふれたる 宮部光利

敵味方おなしおもひに見るつきの

明日は何れのかはねてらさん

典侍 高倉壽子

君の爲みくにをまもるものゝふの

やまどこゝろは神や知るらん

あたちみをけたてゝすゝむみ戦の

舟こそくにのみたてなりけれ

伊達正子

いさきよくにひ文うりの聲すなり

あたの艦をやまたしつめけむ

小山田虎雄

さくさひとおもひやりては小夜衣

かさぬるさへもこゝろ苦しき

北の海さむさをたえてますら男か

たてしいさをそ顯はれにける

飯高勝彦

うてはやふりつけはくたきて軍艦

皇國の名こそとゝろきにけれ

●第四回旅順攻撃

三月十二日東郷聯合艦隊司令長官報告

聯合艦隊は豫定の如く行動して更に昨日旅順口の敵を攻撃せり
 驅逐隊の二隊は同日午前零時旅順口港外に達し港外を搜索して敵なき
 を認め天明まで港外に留まり乙驅逐隊は各所に特種の機械水雷を沈置
 せしが敵の要塞は之に對し時々砲撃したるも我驅逐隊は無事其目的を
 達するを得たり然るに午前四時三十分頃甲驅逐隊は老鐵山の南方に於
 て約六隻より成る敵の驅逐隊に會し近距離に於て約二十分間激戦し朝
 潮、霞、曉の三艦は敵の諸艦と殆んど舷々相摩せんとするが如く接戦し敵
 の三四艦に猛烈なる砲火を加へたるを以て敵は或は汽鐘を破損し或は
 火災を起し或は悲鳴を揚げ多大の損害を負ふて敗走せり我三艦も亦敵
 彈の爲め多少の損害を被り死傷十五名内戦死下士卒七名負傷霞の大艦
 副士南澤安雄の外下士卒七名ありたり就中曉は汽鐘の補助汽管を破壊
 せられ一時漏瀆したるが故に機關兵四名熱湯に依り戦死せり但各艦共

に戦闘航海に支障あらず又乙驅逐隊は午前七時港外に去らんとする際
 偶々洋中より旅順口に入らんとする敵の驅逐艦二隻を發見し直に其前
 路を遮りて之を攻撃し戦闘約一時間多大の損害を加へたる後其一隻を
 逸したるも他の一隻ステレグシチー號を撃破し敵の要塞砲火の下に於
 て漣は之を捕獲し曳航しつゝありしも漏水甚しく且つ波浪高く曳網切
 断せしを以て捕虜兵四名を收容して捕獲敵艦を放棄せり其後午前十時
 十五分に至り右ステレグシチーは全く沈没せり

此戦闘に於て乙驅逐隊の諸艦にも損傷ありしも多大ならず漣、曙の二艦
 に戦死卒二名負傷曙の少尉島祐吉外下七卒三名ありたり
 之より先き敵艦ノーヴ井ク及パーヤンは港外に出で來りて我乙驅逐隊
 に向ひ進航し來りしが我巡洋艦隊の港外に接近するを見て港内に退却
 せり

我主力艦隊及巡洋艦隊は同日午前八時旅順口沖に達し巡洋艦隊は直に
 港口正面に進み我驅逐隊を掩護し次で主力艦隊も亦老鐵山附近に至り

午前十時より午後一時四十分まで連続港口に對し間接射撃を行へり巡洋艦の一隊が港口正面より看的報告するところに依れば其彈着は概して良好にして其効果少からざりしものゝ如し我砲擊中敵の要塞も時々應戦したるも我艦隊の諸艦は一の損傷なかりし又巡洋艦の他の一隊は大連灣外に至り港口三山島に於る敵の建設物を砲撃破壊せり又た高砂千早は殊に旅順口半島の西岸を索敵せしも敵を見ず前回の攻撃に於て我巡洋艦隊に撃破せられ鳩灣に擱岸したる敵の驅逐艦はウメシイテリキイにして今や檣及び煙突の上部を水面上に現はして沈没し居れり我各部隊は午後二時戰鬪を止め一旦豫定地點に集合したる後引上げた

水雷驅逐艦隊接戦 萩原 巖 雄

しかはねをかさねてふける船屋形

したるゝものは血の雨にして

鎌田 正 夫

あたのふね蜂の巢なして沈みけむ

さしあてゝうつ玉のしけさに

千葉 胤 明

啼きさけふ聲さくはかり近つきて

うちくたさけむ敵のふちばた

遠山 英 一

船の名の其あかつきもまたすして

やみの夜うちや烈しかりけん

加藤 義 清

船の名のあかつきかけて水けふり

たちまちあくるかちどきの聲

三月十日旅順攻撃の後敵艦のあり

さまをおもひやりて

男爵 千家尊福

たゝかはむ力もなみにたゝよひて

ふねもこゝろも沈みはてけむ

壊殘敵艦 遠山英一

傾ふきて浮ふを見ればなかくに

沈みしよりもあはれなりけり

南澤機關少監の功をおもひて

宮川甫

あらわしを打しいさをに鵝の羽の

かゝやくしるし賜はりにけん

名譽の負傷水兵某の記事をよみて

伊達正子

弾きすの癒えなはまたも船いくさ

出てむといひてうせし悲しさ

柳田秀子

仇のふね沈むときゝしますら雄か

いまはのきはも嬉しかりけむ

戦ひに臨み機關部にありて砲の音を

のみ聞きて戦況を見るをえさりしを

恨みて 谷田志摩生

飛ひちかふ砲の音のみうち聞きて

いくさの様を見ぬそかなしき

日韓協商

綿田勇之進

から草も大和のかせになひききて

やかて共にや世にかをるらん

村田弘之

さしのほる日影仰きてからやまの

雪もおほかた解けはてにけり

伊藤特派大使

萩原巖雄

長閑ある春の日かけにさそはれて

から山まゆもひらけゆくらむ

鎌田正夫

たよひし雲はれそめて朝日かけ

てりこそとほれ鶏のはやしに

大口綱二

から山の雲のうきあしまたまらむ

おほみつかひの言の葉かせに

千葉胤明

きみまちてからのこきしも天皇の

大御こゝろのほどをしるらむ

海防といふことを 榑崎庸輔

きたかせに吹あらし来る仇なみを

ふせくはやすし君かみいつに

小出榮

仇波もきみかみいつにふせく世は

いとまあるらん伊勢のかみ風

制海權

三橋中雄

仇なみを右にひたりにうちしつめ

わたり安くも世はなりにけり

小暮宗敏

至る所かちにかちつるすめくくの

み船によするあたなみもなし

●第五回旅順攻撃

三月廿四日東郷聯合艦隊司令長官報告

聯合艦隊は豫定の如く行動し兩驅逐艦は二十一日夜より二十二日未明迄旅順口港外にありて與へたる任務を遂行せり此間多少敵の砲火を被りしも別に損傷なし又本隊及び巡洋艦隊は二十二日午前八時旅順口沖に達し其一部を鳩灣の方面に遣し富士八島をして港内に對し間接射撃を行はしめたり此砲撃中敵艦は漸次に港外に出で來り午後二時過ぎ間接射撃を止むる頃其數戰艦五隻巡洋艦四隻驅逐艦十隻となれり敵は始終砲臺下に運動し我を誘致せんとするものと認めたり又敵艦よりも間接射撃をなしたるものゝ如く特に富士附近に着弾多かりしが一も損傷なし我部隊は午後三時迄に港外を去り引揚たり

海軍の連戦連勝をさゝて

子爵長岡護美

日の御旗掲ぐるふねのときあしは

へたてさゝふるあた波もなし

于 爵 唐 橋 在 正

いく度も船をしつめしますらをの

猛きこゝろそおもひやらるゝ

松 平 健 子

支那の海たちさわかしゝあた波の

くたけてちるかこゝちよき哉

富 澤 政 恕

日の出る國のひかりに夜をてらす

露ははかなくきえうせにけり

清 水 方 涯

すめらきのみはたをゝしき軍ふね

むかふうみにはたつ波もなし

梶 田 正 平

和田津海もくぬかも共に打勝ちて

とよめきわたる勝ときのことる

南 耕 信

仇の艦うちしつめたるかちときは

四方の海にもなりひゝくらん

小 金 井 喜 美 子

いさ子ともとく掲けすや日の御旗

みいくさ艦は勝ちぬといふ也

深 谷 勇

大筒のひゝきのなたを打ちこえて

けふも勝しときかぬ日そなき

海 戦

仲 尾 次 政 雅

敵みかたうつ大つゝのひゝきには

龍のみやこもうこくなるらん

海 軍

小 橋 川 昭 裕

むかふたひ勝をしめたるいくさ船

みいついやますときはこの時

北 原 清 一 郎

日の御旗かゝけてむかふ船いくさ

浪もろともにあくるかちとき

擱岸敵艦

大 口 鯛 二

さくさ艦こゝろ淺瀬にのりすてゝ

敵ははちともおもはざるらむ

探海燈

千 葉 胤 明

わたつみのそこまで照らす燈火に

しのひてよせむ仇なみもあし

陸軍を護送する海軍の任務をさきて

伊 達 正 子

いくさ人のせたる艦をまもりつゝ

行くほどいかに危ふかるらむ

大 口 鯛 二

千よろつのはもの乗せて行船を

守りゆく艦のつとめおもしろ

海戦の捷報を聞ける日陸軍の某を送

りて

丸山正彦

海原ははやもわか手におちにけり

ゆけやものゝふ陸路なひかせ

下瀬博士

伊勢齋助

仇のふねうちしつめたる玉くすり

君かいさを、見するなりけり

下瀬火薬の應用

矢島久米義

たくひなききはけしき玉にあら驚の

羽うちとめよあはれますら雄

薦田信次郎

たくひなきき、めありてふ丸薬

つくりし人のほまれのみかは

●第二回旅順閉塞

三月二十九日東郷聯合艦隊司令長官報告

聯合艦隊は去廿六日再び旅順口に向ひ同廿七日午前三時三十分敵港閉塞を執行せり四隻の閉塞隊は驅逐隊及水雷艇隊掩護の下に旅順口港外に達し敵の探海燈の照射を冒して港口に直進し約二海里に達する頃敵の發見する所となり兩岸の要塞及哨艇より猛烈なる砲火を受けしも之に屈せず四隻相次で港口水道に闖入し第一の千代丸は黄金山の西側に於て海岸より約半鏈の處に投錨爆沈し第二の福井丸は千代丸の左側を過ぎて少しく前方に進み投錨せんとするとき敵驅逐艦よりの魚形水雷一發命中し次で其の位置に爆發沈没し第三の彌彦丸も福井丸の左側に出で投錨爆沈せり第四の米山丸は稍や後れて港口に達し敵の一驅逐艦の艦尾を衝突しながら既に沈没せる千代丸と福井丸との間を通過して水道の中央に投錨せしとき敵の魚形水雷一發を受け爆裂し惰力の爲め左岸に近く船首を左にして横に沈没せり敵の猛烈なる砲火の下に於て

斯の如く閉塞員が勇敢沈着其任務を遂行したるは事業として間然する所なく誠に賞賛するに餘りあり唯遺憾なるは彌彦丸と米山丸との間に尙ほ空隙を存し完全に通路を閉塞するを得ざりし一事なりとす此壯烈なる閉塞の再舉は前回之に従事したる勇士の切願を容れ將校及び機關士は主として前回の者をして之れに任せしめ下士以下のみは新志願者を以て交代せしめたり閉塞隊員中戦死中佐廣瀬武夫兵曹長杉野孫七外下士卒二名重傷中尉島田初藏輕傷大尉正木義太、大機關士栗田富太郎外下士卒六名にして其他は悉く無事我が水雷艇隊驅逐隊に收容されたり戦死者中福井丸の廣瀬中佐及び杉野兵曹長の最後は頗る壯烈にして同船の投錨せんとするや杉野兵曹長は爆發藥に點火する爲船艙に下りし時敵の魚形水雷命中したるを以て遂に戦死せる者の如く廣瀬中佐は乗員を端舟に乗移らしめ杉野兵曹長の見當らざる爲め自ら三たび船内を搜索したるも船體漸次沈没海水上甲板に達せるを以て止むを得ず端舟に下り本船を離れ敵彈の下に退却せる際一彈中佐の頭部を撃ち中佐の

體は一片の肉塊を艇内に殘して海中に墜落したるものなり中佐は平時に於ても常に軍人の龜鑑たるのみならず其の最後に於ても萬世不滅の好鑑を殘せるものと謂つべし

閉塞隊員の掩護收容に就ては直接其任に當りし水雷艇隊最も其力を盡し天明過ぐるまで敵の砲火に曝露して其任務を遂行せり就中蒼鷹燕の二艇は閉塞船隊を護衛して港口より約一海里に達し敵の驅逐艦一隻と會戦し多大の損害を加へ敵は瀛艦を破壊されたるもの、如く盛んに蒸氣を吹かしつゝ退却せり閉塞隊の端舟は港外に退却するさき目撃する所によれば敵艦と認むべきもの黄金山下に於て進退自由を失ひたりしもの、如くなりしと我水雷艇隊驅逐隊は天明過ぐる迄熾なる敵の砲火を蒙りしに拘らず寸毫も損傷なし閉塞隊員の收容は千代丸及彌彦丸の乗員は燕に米山丸乗員は端舟三隻に分乗して鵲雁に收容され福井丸の乗員は霞に收容されたり

備考 閉塞隊を掩護したる驅逐隊及水雷艇隊は左の如し

驅逐隊

白雲、霞、朝潮、曉、雷、曙、曉、電、薄雲、健、東雲

水雷艇隊

雁、蒼鷹、鴿、燕、鴿、眞鶴

廣瀬中佐の葬儀を送りて

子 爵 田 中 光 顯

和田の原うつわた浪にくたかれて

かへらぬ君をおくるけふかな

男 爵 高 崎 正 風

かくはしき魂のゆくへや慕ふらん

ひつぎの上にもちるさくらかな

鍋 島 榮 子

いくさ神と仰くものから悔しくも

惜きはきみかかはねなりけり

廣瀬中佐の歌に 天皇の御聲かし

こし武士のなにかたるへき功なく

してとあるを思ひて

男 爵 千 家 尊 福

かたるへき功なしてふことの葉は

いさをと共にかたりつかはや

廣瀬中佐の遺肉を新橋停車場にむか

へて

一ひらの肉をむかへてあめつちに

もろ人のそてまてしほる春さめは
みつるいさを、忍ふけふかな

雲の上よりふるにそありける

廣瀬中佐か戦死の報をきゝて悼惜の

あまりに 下 田 歌 子

沖つ波たちかへらすはどはかりに

め、しくきみを惜む今日かな

白波のたまどくたけしますらをか

かはねたに社得まくほしけれ

同じ君の柩を拜みて

時しもあれさそふ嵐にあらそひて

散るさくらにもたくふ君かな

廣瀬中佐 男 爵 高 崎 正 風

七かへり生れかはりてくにのあた

うたてはやまし大和たましひ

侯 爵 鍋 島 直 大

君かためつくすこゝろそ頼もしき

船もその身もらみにしつめて

子 爵 黒 田 清 綱

三たひまて友を尋ねてみかくれし

いさをはくちしよろつ代迄も

海軍少將 山 内 萬 壽 治

敷島のやまとしまねのはなさかり

ちるをうらやむ人こゝろかな

千種任子

ひきつれし友をいかにと三度まで

尋ぬるひまに身はくたけゝむ

小倉文子

あはれ身はなみの藻屑と成ぬれど

いくさの神とあふかれにけり

小池道子

海中に身はしつみてもあたふねを

くたかさらめや君かまこゝろ

北島いと子

くり返しをしまるゝかな廣きよに

かみといはれしこのいくさ人

吉田鉦子

三度まで友をたつねしまこゝろは

わたのそこより深くそ有ける

中村秋香

くたけちるたまの響はあめつちを

ゆするはまれとなりにける哉

御歌所参候 植松有經

つさゝくにいさを立つらむ軍ひと

いくさの神のあとをしたひて

學智院教授 北里 關

ふどころに納めし父のうつしゑは

死にて後まではなたさりけん

鎌田正夫

あた浪に身はくたけても大みふね

なほすもるらむ君かたましひ

大口綱二

三たひまでともをたつねし眞心や

いくさの神のみたまなるらむ

千葉胤明

たふれての後になけきを残さしと

君はつまたにむかへさりけむ

遠山英一

天かけるたまもうれしと思ふらむ

いくさの神とひとにいはれて

加藤義清

萬代のいくさのかみときみなりて

守りますらんわたのはらから

須川信行

しゝむらの唯一ひらをあますまで

身を碎きけんますらたけをは

松波遊山

かたりつさいひつきゆかむ三度迄

友をたつねしきみかまことは

原六郎

いさましきその討死はますらをの

かゝみとなりて世をや照さん

醫學博士 井上通泰

しつみゆく船に三度もたちかへり

友をたつねしまこゝろあはれ

南郷柳子

きみか死を聞くわかむねも太砲に

打ちくたかれし心地してけり

小暮宗敏

のこしつるその肉むらも躍るらん

いくさの神とまつらるゝ身は

毛利歳雄

軍人のかゝみとなりてあまかけり

たまや御國をまもりますらん

寺田秀幸

あらうみの底に沈めどものゝふの

こゝろのたまそよのかゝみなる

宇都宮信亮

天地のひらけしときゆ聞かさりき

かくもめてたきうまし武夫は

中山幸子

しきしまのやまと心のさくらはな

ちりてのゝちもかくはしき哉

元岡千代子

ひたすらに御國を思ふこゝろには

身のあやふさも忘れはてけん

土田道一

ふねと共に身は沈みても日の本の

ますら武夫の名をそなかせる

辭世 海軍兵曹長 杉野孫七

國の爲十とせのむかし死する身は

今日ありしとは思はさりけり

杉野兵曹長 千葉胤明

友千鳥みたひかへりて呼ふこゑも

ふなそこまては聞えさりけむ

征露の歌 侯爵 鍋島直大

ウオルガの水の澄むまもなき迄に

あたきりすてゝ血汐あかさむ

男爵 石河光熙

くもりなき日影匂へりしへりやの

あらのゝ露はいまそけぬへき

折にふれて 文學博士 木村正辭

陸にては勝得へしとてほこりつゝ

空たのめするこにきしあはれ

雪夜思戦地 千葉胤明

雪をふみこほりを碎きすゝむらむ

いくさ思へは寝られさりけり

加藤義清

夜もすからいくさの場を思ふかな

はるなほ寒くつもるみゆきに

をりにふれたる 土田道一

すゝみゆく我日の本の御ひかりに

うるるの山のゆきもきゆらん

小金井喜美子

われからにおこしゝ軍いまさら

敵もくやしとおもひしるらん

三輪政平

もろこしの野山をあらすあら鶯を

いとりて來たれますらをの友

植松延恭

さしのほる我が日の本の旗かせに

鶯のつはさもつかれはつらん

渡邊敏謙

遺しらぬ仇のしめたるこかねやま

うかへる雲のたくひなりけり

三浦義道

海に陸に荒ふるわしを狩りとりて

にへたてまつれやまど大丈夫

中川新七郎

老ぬれといくさに出しこゝろもて

たゆます神にかちをこそ祈れ

稻垣了齋

海に陸にあたふせく人ありてこそ

まくらも高くふすへかりけれ

今野常太郎

天地につらぬくものは日のもとの

みいくさ人のまことありけり

野營 松平健子

ひきまはすとはり一重を城にして

とらふす野邊によをあかす覽

草間幸子

雪ふかきこまのに宿るますらをか

いふきそ白き夜やふけぬらむ

塞上曲 下田歌子

いくさひと水かふ駒のたつかみに

ちる雪さむしはるはたてとも

寒夜哨兵といふ事を

雪をかむ駒のいふきもこほる夜の

たむろか岡にたつひとやたれ

陸兵進撃 長谷場純孝

西比利亞のかたき氷もおのつから

てらす朝日につゆと消えなん

陸戦の勝報を待ち侘ひて

中野徳三郎

うみははやわか物となる勝いくさ

陸のたよりのまたれけるかな

従軍を志願し下命を待ち侘ひて

日野恒次郎

御軍につかへんものとみそきして

春の日なかくまらわふるかな

平壤に於て哥薩克騎兵を撃退せしを

岡崎常磐

こまなへてとりの林にうつつの

おとに逃げ、む驚のひとむれ

安州の役に田所騎兵の戦死をさゝて

子爵長岡護美

身は高麗の雪と消てもかくはしき

名は日本の本のはなとこそさけ

征露の歌の中に

権掌侍津守好子

大きみの大みこゝろをやすめんど

いさみてすゝむますらをの友

松井保

八百よろつ神の守れる御いくさの

むかふかたには仇なかりけり

林慶確

西伯利亞におひしけりたる醜草を

刈てつくさんやまどかたなに

田島等

野に山におき渡したるしらつゆは

のほる朝日にやかて消ゆらん

細田一雲

さしのほる朝日の影にもろこしの
野へにむすひし露そきえゆく

中田 慈苑

つゆ草のしけると見しは日の御影

てらさぬさきのこゝろなりぬ

鳥海宗之助

老ぬるか口をしきかなみいくさに

たてまつるへき身は持なから

八本 義功

家も身もかへりみすして大きみの

大みこゝろをやすめまつらん

和合庄吉

日の御はた立て、野山を踏行かは

もろくも消えんつゆのあた國

石井 祇一

しらすしてはひこりぬらん露草は

その草なきのつるきありとも

征露軍 植松 有經

神もいかてたすけさるへき大和人

いのちを捨ていてやと向は、

岩瀬 眞砂

皇國のますらたけをはとづくにの

醜のあらしもとりひしきけり

光田 文次郎

天津日の御旗のかせにしへりやの

野邊のしこ草なひきふしけん

小川 泰 藤

皇軍はうみにくぬかにたゝかへは

かならず勝つそ嬉しかりける

岡田 水 江

日の本のはたての風にみたれては

やかてきゆらむしこくさの露

眞野 好 文

さし出るあさ日の御旗もろこしの

野にも山にもかゝやきにけり

敵國降伏軍人安全の祈禱祭に

大 矢 弓 吾

たゝかへはかならずかてる御軍の

かちをは神になほいのるかな

皇軍の名譽を思ひて 中野 徳三郎

たゝかひは正しき名もて開かれし

大御いくさの御威稜たけしも

言 志 陸軍少將 伊 崎 良 熙

骨も身も碎きつくしておほきみの

ふかきめくみに報いまつらん

征露中のうた 歩兵一等卒 木 暮 市 三 郎

大きみのみいつかゝやく旗かせに

しこの荒わし狩りはらひてん

●定州占領

三月廿八日午前十一時十五分定州南門外に於て騎兵隊の將校斥候敵に
遭遇し該隊及び歩兵の一部は之を收容し結局此敵を撃退して定州を占
領し陸下の萬歳を唱へ士氣極めて旺盛なり
將校斥候は定州南門附近に在る敵の射撃を受け北方に避け騎兵の主力
之を收容する爲め全力を盡して射撃す午後一時十五分歩兵は急行して
定州東北約二千米突の地に來りて射撃するや敵は義州街道郭山街道を
退却し我歩騎兵の一部は之を追撃す敵の兵力は約六百なり

斥候

加藤義清

こゝろみに打はなちたる砲おとに

仇のもの見もあらはれにけり

吉 峯 淨

あやまちのなかれかして御軍の

たむろはなれてゆくものみ哉

斥候騎兵 英 光 英

駒なへて仇のさかひをさくるらむ

雨のふる日もかせのふく夜も

篠原政禎

しへりあの草葉の露ものるこまの

ひつめにかけて進めつはもの

我斥候兵の勇猛を 古 瀬 惟 光

たゝ三騎ものみに出しものゝふに

あまたの仇はおはれけるかあ

陸戦の捷報ありしとき 高倉壽子

かちどきの聲とともに日の御旗

ひかりそふらん時はきにけり

小池道子

いち早きこのかちどきを聞しめす

御こゝろいかにおはします覺

吉田銚子

いさましき軍のかちをきくことに

嬉しなみたそまつこほれける

征露陸軍第一戦勝の報をきゝて

宮地嚴夫

御軍はうみにのみかはくぬかにも

又うちかちてすゝみそめけり

藤崎虎二

おもひきや露てふ國の名はあれど

かく迄もろく消えんものとは

富澤政起

唐土のはらに羽をのすあらわしを

うちはらひませせ火具槌のかみ

長岡騎兵少尉の武勇を

侯爵 鍋島直大

ものゝふの家に生れしかひありて

稀なるいさをあらはしにけり

同少尉の父長岡子爵に

獨子の得たるはまればよるつ世も

うこかぬ家のほまれなりけり

鍋島茂子

僅なる日かすのうちうれしくも

きゝてけるかな君かほまれを

鍋島信子

さきたちし陸のいくさに手負ても

ほまれをわけし君そうれしき

實弟長岡騎兵少尉の負傷を聞きて

在佛國 公爵夫人 一條悦子

外國にあるひとまでもたへけり

君かいくさにたてしいさをは

細川護全君の奮戦をきいて

宮川甫

細川のなみくからぬかみつ瀬の

さよきその名は劣らさらめや

吾か子騎兵少尉護全が定州の戦に負

傷しつときゝけるをり

侯爵北堂 細川宏子

いちはやくいくさすゝみて定州に

かちうたわけし名こそ高けれ

たゝかひのかちときわけし其折の

こゝろやいかに嬉しかりけん

御軍のかすにいりにしかひありて

わかおほ君につくすうれしさ

鍋島騎兵大尉に送る 松平健子

勝はこるこゝろの手綱ひきしめて

駒のあしとくすゝめよやきみ

白露の地圖を見て

文學博士 本 邨 正 辭

かたちのみ大きかりとも何かせん

くちらは鯨にころさるといふ

千 葉 胤 明

今日はこゝあすは彼處と標しつゝ

大御いくさのすゝむをそまつ

加 藤 義 清

筆とりてしるしをつけぬ日の御旗

やかてたつへきわたの野山に

時事有感 東宮侍講 本 居 豊 顯

國の爲しぬとさためてのちにこそ

いくさは強きならひなりけれ

おもひえてしるやしらすや皇軍は

かみの助けのなき世ならぬを

小 出 榮

御軍のかちてかふとの緒をかたく

むすはんをりを今よりそ待つ

佐 々 木 信 綱

いたつらに人を屠らむ太刀ならず

正義のためにふるふへき太刀

雨 森 巖

秘めおきし父か遺物のつるき太刀

磨きすますへき時は來にけり

青 砥 環

おほえある太刀ふりかさし残なく

あきたふしてんしこのつゆ草

海軍少將 肝 付 兼 行

梓ゆみはるは來にけり高麗越えて

もろこしあらす驚射留めはや

陸軍少將 中 村 覺

こゝかしこ花は咲けども匂へとも

見る人もなく散らんとすらん

ものゝふの心のはなど見るへきは

やまとさくらの外なかりけり

しきしまのやまと心もかくこそと

風にまかせてちるさくらかな

男 爵 藤 枝 雅 之

すゝみ行みいくさ人をおもひつゝ

はおもわすれてくらす春かな

權典侍 園 祥 子

大君のみいつとともにもものゝふの

こゝろの花もにはふはるかな

みいくさのかちときいはふ國人の

聲ひくくなりくものうへまで

前田 朗子

國のためこゝろみかきてさくら花

ちるへき時にちるへかりけり

小池 道子

彼岸の中日に

足乳根の親よりざきにみいくさの

みちにたふれし魂まつるなり

また折にふれて

しきしまの大和こゝろの花さくら

くにてふ國にかをりゆくらん

命婦 生源寺 伊佐雄

大君のみけしのそてにかをるらん

やまとこゝろの花さくらはな

鎌田 正夫

花見んといふ人もなしみいくさの

勝をよるこふこゑはかりして

中 邨 秋香

さしのほる朝日の花のかけしめて

わか勝いくさいはふけふかな

おくつきにしきみ手向る手弱女か

くろかみさむく夕かせのふく

手塚 秀輔

やかて今露のしこくさかりつくし

大和なてしこうゑてなかめん

外山旦正

おほみ軍かちつゝきけり花かけに

けふもとよめるよろつよの聲

吉田儀作

大やまと雄々しき魂はこかねにも

まさる御國のたからなりけり

田所慶次

しへりあの山もかすみて今年より

長閑あるらむ御代のひかりに

菊地千重子

虎ほゆるうらるのいはら刈り盡し

わか日の本のさくらさかせん

平岩日基

太刀風になひく野原のもゝちくさ

しとろもどろに露やちるらん

鹽原熊次郎

くれなるに春の草葉をそめあして

すゝみゆきけり大和ますら男

吾聯隊旗に大鷲の來り留りぬと聞て

文學博士 木村正辭

かなはしとおもひさためて大鷲も

御旗をさしておちくたりけん

花の頃折にふれて 鍋島信子

いくさ人雪ふみわくるきのふけふ

花見ありきもこゝろなきかあ

尾崎吉從

つは菜つむしつか重もたけかきを

抜てかさしていくさことする

花下戦捷を祝す 藤田とも子

咲匂ふさくらのもとにまど居して

大みいくさをいはふ今日かな

鈴木吉太郎

勝ちつゝく大みいくさを祝ひつゝ

花の木かけにうたけするかな

をりにふれて 陸軍少將 中岡黙

仇はらふ事にこゝろのいそかれて

ことしの春はあたにすこしつ

剣はきつはものひきておほきみの

みかきものする時は來にけり

君の爲つはものひきてすめくにの

つるきのひかり敵にしめさん

近衛歩兵軍曹 高岡四作

唐土のどら伏す野邊にしきしまの

やまどこゝろの花さきにけり

ふるさとの母はいかにと思ふかな

いとゝ身に浸むしへりあの風

●我艦隊の大成功

四月十六日東郷聯合
艦隊司令長官報告

聯合艦隊は四月十一日より豫定の如く行動し更に旅順口の敵に對して第八次の攻撃を爲せり第四驅逐隊第五驅逐隊第十四水雷艇隊及び蛟龍丸は十二日夜半旅順港外に至り敵の探照を冒して港口に近づき計畫の通り港外の各所に機械水雷の迅速なる沈置を遂行し得たり又特別の任務を有せる第二驅逐隊は十三日黎明港外鮮生角の南東を巡邏せる時東方より旅順口に入らんとする四本煙突を有する敵の驅逐艦一隻を發見し直に其前路を避りて之を攻撃し約十分間戦闘の後之を撃沈せり又同時頃西方の老鐵山の方向より來れる他の敵驅逐艦一隻を發見し轉じて之を攻撃せしが距離遠くして遂に之を港口に逸せり此戦闘に於ける第二驅逐隊の損傷は輕微にして唯電の卒二名輕傷せるのみ撃沈せる敵艦の溺者は敵艦マヤーンの近づき來りしたため之を救助するの暇なかりし第三戰隊は午前八時港外に達して第二驅逐隊を掩護し且つ敵情を偵察

せり午前九時頃敵艦マヤーン我に向ひ突進し來り遠距離より砲撃を開始せしを以て徐々に應戦して之を撃退せり幾もなく敵艦ノーヴヰックアスコルド、デアアナ、ペトロパワロスク、ホバーダ、ホルター、等マヤーンと合し攻勢を取りて反撃し來り第三戰隊は之に應戦しつゝ敵を南東方向約十五海里に誘致せり此時沖合約廿海里に方りて濛氣の内に隠れたる第一戰隊は第三戰隊の無線電信に接し直ちに急進して敵艦隊に逼りしが敵は艦首を轉じて港口に向ひ背進せしを以て尙益々追窮して之を港前に壓迫せるさき先頭に占位せるペトロパワロスクを見えたる敵艦一隻前夜沈置したる我機械水雷に掛り爆發轟沈するを見る時に午前十時三十二分なり敵の殘艦は此慘憺たる光景に驚きて大に混亂し尙ほ外に一敵艦の進退自由を失ひたるの疑ひありしも敵艦隊混雜の爲め其艦型を識別する能はざりし其後敵の殘艦は約一時間頻りに艦側附近の水面を砲撃しつゝ漸次に港内に入り正午過ぐる頃港外に敵影を見ざるに至れり此戦闘の初期砲戦に於て第三戰隊は一の損傷なく敵の損害も

少許なるべく第一戦隊は遂に敵と砲弾距離に近きなりし
當日午後一時艦隊は旅順口港外を去り豫定地點に集合して洋中に假泊
し更に準備を整へて十四日午後四時より再び旅順口に向ひ發動せり第
二驅逐隊第四驅逐隊第五驅逐隊第九水雷艇隊は翌十五日午前三時前後
相次で旅順口港外に達し豫定計畫の如く再び其任務を遂行せり午前七
時第三戦隊も港外に現はれ敵情を偵察せしが港外に敵影なく港内寂然
たり又第一戦隊は午前九時旅順口沖に至り途上浮流せる敵の機械水雷
三個を發見し一々之れを砲撃爆沈し午前十時より春日日進を老鐵山の
西方に分派し約二時間港内に對し間接射撃を行はしめたり敵の要塞及
港内の敵艦時々之に應戦せしが兩艦共に損傷あらず此兩艦は此日を以
て敵に對し其初弾を發射せしが其射撃の効果は相應に之ありしが如く
老鐵山西の新造砲臺も沈黙せしめなり午後一時三十分艦隊は交戦を止
め歸航せり此連続せる作戦に於て聯合艦隊が一兵をも失はずして多少
の戦果を擧げたるものは一に大元帥陛下の御威徳に依るものにして

下將卒は終始勇往敢爲其任務を遂行するに忠實なるも其奏功成果に至
ては人力の及ばざる所多し特に多數の艦艇が晝夜を間はす敵機械水雷
の浮流せる洋中を縦横に航行し然かも今日に至るまで一の危害を受け
たることなきが如きは只天佑と確信するの外あらざるなり

四月十三日旅順の大勝利を聞きて

伯爵 佐々木 高行

御軍のかちときうみにひくくなり

みやこのはなは今さかりにて

日進春日放初弾 阪 正 臣

山こしにとりて碎きてふたふねの

弾の打ち初め先つはまれあり

昨日かもまちむかへつるにひ船も

はやたゝかひに名をあげに鳧

大口 鯛 二

新艦のはしめてはなつ弾をうけて

仇のつゝくちみなつくみけん

千葉 胤 明

くろかねの山のとりても壊れけり

はしめて寄する浪のひゝきに

折にふれて 松 平 健 子

仇波のたちさわかすはかくまてに

あらはれましを日本たましひ

龜 山 新 一

荒波のうつまくなみのそこふかく

またしつみゆく敵のおほふね

小 泉 詠 歸

眞こゝろをとものにこめたる筒先に

むかはむ敵はあらしとぞ思ふ

鹽 原 熊 次 郎

この春はわかみいくさの勝とき

こゑより外にきくものそなき

北 條 辨 旭

仇なから哀れとぞ思ふたゝかひて

まくれはとともあまり脆さに

中 村 忠 康

戦へはかあらず勝ちて日の御はた

かゝけていはふ時はきにけり

櫻井兼香

渤海にさかまくなみをやふりつゝ

しつかにかへる御いくさの船

敵將マカロフの戦死を弔ふ

阪正臣

日の本の國の御稜威をわたつ海の

そこに知らさん君かあはれさ

大口鯛二

ことならば負けなんまでも一と戦

すへかりしをとくやしかり劍

千葉胤明

艦なから沈むはかなさたゝかひの

みちの奥かも知るひとにして

加藤義清

仇なれど君かなきから手に入らは

花も手向けんみつもすゝめん

伊藤新

仇なからをゝしかりしはしら旗を

かゝけさりけるこゝろなり梟

矢部典則

かけるへき方もいまはなかるらん

わしの片羽はまつをれにけり

中川新七郎

中々にかげんと思ひしわなにさへ

おのれかゝりてしつむ憐れさ

山田啓太郎

強者の名をえしくにのまかるふも

朝日のものどつゆとこそちれ

折にふれて 姉小路良子

つゝゆみのひゝきと共に日の本の

ほまれもたかき世となりにけり

藻屑とも身はならはなれ君かため

このあた波をくたかさらめや

小池道子

もゝ千たひとりてそみつる御軍の

かちをつけたる文のひとひら

おいか身も力をこめてひたすらに

神のまもりをねかひけるかな

権命婦 平田三枝

いへも身もかへりみなくて國の爲

つくすまことは神そもるらん

前田漢子

御軍のたゝかふことにかつみれは

ひたすらかみのまもります覺

中山幸子

なにとなくこゝろの駒を勇むなる

益良夫ならぬをみななれども

兵動はさ子

おそろしきはつゝまくらに仇波の

よるもねむらしみいくさは

宮澤歌子

露はらふわか日の丸のはたかせに

なひかぬ草はあらしとぞ思ふ

高久ひさ子

楯をくたき艦を藻屑になしつれと

なほ吹きそはむ伊勢の神かせ

高橋さた子

神風もうらるのみねに吹きすさひ

八重立くもをはらひますらん

木谷絹江

みいくさに入らさるものと心して

つくさゝらめや大きみのため

我子の軍人ならぬをかなしみて

大野秀子

しかすかに男はあれとみいくさに

つらならぬこそうらみ也けれ

敵艦又もや我が商船を撃沈めつと聞

きて 北里 関

海いくさとても勝ちえぬ怨みをは

あきなひふねに打はらしけん

緒方 萬

ふな軍勝ちえかほなるそらことの

たよりやすらんおのか國へに

土方砲兵中尉夫人におくりし消息の

はしに 海軍中將 柴山 矢八

鶯のすむ野山のくまをうちはらひ

あさ日の影に照らせますらを

親戚の寄せたる消息の端に

海軍一等水兵 張ヶ谷 茂 質

身はたとひ海のもくつと消るとも

にしき飾らむふるさどのはか

獎兵義會 加藤 義清

國民のこゝろひとつになるみても

我みいくさのかたてやはある

砲臺守備中作 砲兵少尉 佐藤 庸也

備ふれとあはは來らすみやしまの

春のうさはらなみのとかなり

戦死將士の手蹟の新聞紙にをりく

掲載せられしをみて 藤崎 虎二

ものゝふのかたみの筆の蹟みれば

かみに聲あるこゝちこそすれ

戦利品をみて 加藤 義清

ますら男のいのちに換へし此品は

うれしくもあり悲しくもあり

軍用手票をみて 伊勢齋助

海やまを立へたてゝもたふときは

こかねにかふる手札なりけり

戦時にあたり暴利を貪る商人を

悪みて 星川清民

わらはへも國の爲にとさゝくるを

こかねむさほる人はひとかは

新聞紙上報國彙報を讀みて

宮島忠三郎

國おもふひとつこゝろの色みえて

豊あきつしまにしける民くさ

征露雜咏 篠山晃三

さらぬたにはかあき露は天つ日の

さやけき影にきえすやはある

養宇能宣

神風のそよと吹くにもちりぬめり

露を名におふじこのあたくに

小澤幸民

ぬきはなすやまと猛雄の太刀風に

鷺は羽たゝくすへやなからむ

思遠征 伯爵 東久世通禧

雪こほりきゆるをときと哈爾賓の

たひろうち壊せますら雄の友

男爵 高崎正風

歸らしとちかひて出てし益良雄も

なほ家ひとのゆめに見えつゝ

男爵 渡邊 清

もろこしの荒野をてらす日の御旗

いかにして草いろなかるらむ

三岡 鶴子

あさは雪ゆふへは風とあるゝ野に

ますらたけをは勇みたつらむ

室田 光子

君のためつゝとりすゝみゆく人の

かはね晒さむ野へはいつくそ

九鬼 憲子

ますらをかいのちをすてゝ外國に

いさみてゆくもたゝ君のため

中川 貞子

君のためちるを惜まぬますらをか

こゝろの花のかくはしきかな

郷 英里子

きみのため虎ふす野にも攻入りて

おどろか露もうたけますらを

岡澤 米子

神風のふきおこりなはあらわしも

つはさたゆまむきたの海はら

鍋島 茂子

さはへなすわしをとらへて軍ひと

あくるからとき今よりそまつ

東郷弘子

わかくに命さけしものふは

雪もこほりもいとほさるらむ

穴戸幾子

うき雲をはらひつくせや日の本の

ひかりいたらぬくまもなき迄

池田信子

天つ日のみはたの風にしこくさの

露はみたれて消えんとすらむ

蛭海松代

日の本の朝日のひかりてらしなは

いかある露かきえてあるへき

山本ゑみこ

君のため國のためとていさみたつ

すかたをしき大和ますらを

秋山こと子

雪のうちにおふる醜草しけくとも

ふみしたくらん大和ますらを

中村郁子

さしのほるわか日の本のはた風に

もろくみたるあたし野の露

野津輝子

明日しらぬ身とも思はて益良雄は

御國のためといさみたつらん

鍋島信子

あらわしをかりつくしつゝ軍ひと

かへる日數をかそへてまたん

吉田とき子

日の本の御旗のもとにいさましく

きはひたつらむますらをの友

阿波清子

大君のみことかしくみますらをか

すゝむかたには仇なみもなし

大屋清子

さしのほる朝日にむかふ露なれば

やかてそきえん西比利亞の原

岡田とよ子

雪ふかきわたのゝすゑも日の本の

みはたの風やふきとほるらむ

佐々木高子

日のもとの光にあひてことうらに

うきたつ雲もきえやはつらむ

大津とき子

のる駒のいふきも氷るわたしのに

いさみてむかふますらをの友

町田とよ子

うちむかふ大和健兒のをたけひに

みたれぬ仇はあらしとぞ思ふ

宮 島 竹 子

日の御旗さゝけてすゝむおほ船に

あたれは玉もつゆとくたけて

山 尾 西 子

草も木もことなる國のしらつゆを

御旗のかせにうちはらふらむ

巨 智 部 金 子

ますらをのかさす旭のはたかせに

つはさしをるゝ北のあらわし

吉 田 寛 子

露ふかきから野のうはらかり拂ひ

さくらうゝへき時はきにけり

恩賜義手足 阪 正 臣

身をすてゝ報いまつらん足のさき

手のすゑまでもかゝるみめくみ

千 葉 胤 明

なにはえのあしの障りも忘れつゝ

おしいたゝきぬたゝ片手にて

加 藤 義 清

みめくみのかゝる手足に益荒雄は

おもき痛手もうちわするらん

捕虜の負傷者に義足を賜はりし

ときよて

汝か國に歸らんのちもわするゝな

我おほきみのふかきめくみを

赤十字社

中 邨 秋 香

このわさの心をやかてこゝろにて

いくさなき世となす由もかな

木 村 吉 房

へたてなくこゝろも赤き旗手には

なひかぬ仇もなき世なりけり

歐米婦人來援我赤十字社事業

阪 正 臣

いたて負ふ人救はんとわたつ海の

ふかきは君かこゝろなりけり

加 藤 義 清

天津日の御旗のかせをしたひきて

さらにもかをる花うはらかな

赤十字社篤志看護婦人會

男 爵 千 家 尊 福

布まきにつくすこゝろのひと筋は

いく玉の緒かつなきとむらん

繙帯を造りつゝ 鍋 島 榮 子

君かためうけたるきすは手弱女の

こゝろをこめし布につまむ

鍋 島 茂 子

少女子もまなひのひまに布まきて

みいくさ人におくるうれしさ

鍋島信子

すくひたき少女こゝろをこの布に

まきておくらんみいくさ人に

片山幾子

人々のまこゝろこめししらぬのに

玉の緒かたくまきとめてん

貴婦人の繙帯製作を聞きて

千葉胤明

堪かたき痛手もやかて癒えぬへし

なさけこもれる布にまかれて

華族女學校運動會に看護婦のわさあ

りけるをみて 松平健子

少女子のこゝろをこめてぬのまくも

すゝむをしへのひとつかり鳧

篤志看護婦 鍋島信子

たをやめも御國のために盡すへき

ときは來にけり此御いくさに

米國篤志看護婦マツキ夫人の來朝

を迎へて 藤崎虎二

わたり來し海より深き眞こゝろを

くみてかまけぬ人はあらしな

皇族各妃殿下の繙帯をいとなませた

まふと聞きて

舞田貞子

ますらをはふかき手傷も忘るへし

御あさけこもる布のひとまき

赤十字社に義務奉公を願て許されす

高橋種之

老ぬとも身をくろかねに打なして

せめてむくいむ國の御ために

軍人家族授産婦人會

男爵千家尊福

いくさ人いてつる家のうすけふり

いさをと共にたちまされとや

勿忘の歌七首 于爵田中光顯

らしほもてわかせめとりし國土を

奪ひさられしうらみわするな

國のため家をも身をもわすれつゝ

たゝかふ人をゆめなわすれそ

真心のあかきしるしのはたとりて

おくりし人のなさけわするな

死に代り生ひかはりても忘るなよ

わかおほ君にむかふかたきを

勝ちしとき兜の緒をはしめよてふ

古ことわさをつねにわするな

幾千度からさめみてもわするなよ

きみか御楯とおもふこゝろを

武士は朕か手あしそとのたまひし

大みさとしをわするなよひと

男 爵 渡 邊 千 秋

朝夕によみてわするなたゝかひを

宣らせ玉ひしおほみことのみ

からやまの吹雪凌ぎてよもすから

銃とるひとのこゝろわするな

さく花を見ても忘るなあらなみの

うへにちりにし人のいのちを

戦ひにいのちすてにしものゝふの

つま子をめくむこゝろ忘るな

ひとひらの黄金も積みてくにの富

まさむこゝろを常にわするな

つねのわさいよゝ勵みて忘るなよ

あどをはまもる民のつとめを

皇軍のかちときわけしそのゝちの

よきはかりこと今もわするな

國母陛下の瑞夢 阪 正 臣

秋の宮のみ夢に入るは熊ならて

くもゐをかける龍馬なりけり

千 葉 胤 明

かちいくさ續くもうへな君か世は

世になき臣もつかへまつれり

加 藤 義 清

もれ聞くもかしこかり梟益荒雄を

御夢に立ちしみものかたりを

古戦場

大口綱二

十年へてまたかこまんと思ひきや

我が攻め取しおなしとりてを

露國負傷兵士日本赤十字社の厚意を

感謝するを聞きて

小笠原長祥

眞こゝろをうつす十字のはた風に

なひかぬ民はあらしとぞ思ふ

出征豫後備軍人

遠山英一

をりくに妻子の上やおもふらむ

大御いくさのかすにいれども

軍國農民

大口綱二

武士にいかて譲らむみいくさの

かてをつゝくる民のいさをは

千葉胤明

ひとり子も馬も軍に出たしやりて

たかへしはけむ老もありけり

戦死者の遺族に

遠山英一

日の本の國のひかりとなる見れば

捨し甲斐あるいのちならすや

戦死者の未亡人を思ひて

安藤とき子

我父のかほもえしらぬみどり子の

おひたつさきをいかにまつ覽

負傷者を思ひて 高倉壽子

傷の跡いゆるもまたてたゝかひに

こゝろやすゝび大和ますらを

戦死者を吊ふ 高岡直翁

國の爲いのちをすてしますらをの

立てしいさは千代も朽ちせし

出征軍人遺族を扶助せんとて吾村一

同積金するを 松谷庄藏

ふたつなき命さゝけしますらをの

あとなくさむるやまふきの花

出征軍人を思ひて 宮崎島次

雪こほりふみわけすゝむ益良雄は

たゝかふよりもくるしかる覽

日露開戦以來臺灣守備隊中なる我脊

の君を思ひやりて 川口鐘子

みいくさのかちぬと告るたひゝに

我脊やいかにうてさするらん

出征軍人の家族のこゝろを思やりて

前田朗子

はしらともたのむ我子にわかれ鳧

やかても君のためとおもへは

うちいてし我子のうへのおもほえて

ねさめかちにや夜をあかす覽

大 口 綱 二

いく度か胸さわくらむときならぬ

にひふみうりの鈴のひゝきに

鍋 島 茂 子

残されし妻子のこゝろ如何ならん

いくさの便り待つはかりにて

幡 江 晁

母のそてに縋りて父のゆくへとふ

子を慰さめにみするいくさ繪

松 岡 多 吉

脊は太刀をはきていてたち妹は鍬

とりて畑うつすめくにとのため

出征軍人の妻に代りて 鹽 井 敦

小夜ころもたち重ねても忍ぶかな

仇守るせこやいかにさむきと

大本營 坂 正 臣

仇は皆あみにいるへしみいくさの

大つなとりてきみしいませは

大 口 綱 二

はかりこときこしめすらし大前に

いくさの君の今日もつとへる

参 謀 坂 正 臣

たゝかひの庭はふまねと勝ぬへき

みちをちさとの外にしるさむ

●鴨綠江畔の渡河九連城の攻撃

(黒木大將報告)

其 一

四月二十六日正午頃より九連城の砲兵は義州附近を砲撃し近衛歩兵第一聯隊の兵卒一榴霰彈の爲め負傷せり二十七日も亦時々砲撃す我砲兵は應射せず九里島に在りし第二十二聯隊乗馬斥候部隊長少尉セミヨノフの死體を九里島對岸にて發見し義州城内に埋葬せり細谷艦隊より差遣したる宇治摩耶の二砲艦二水雷艇二武裝蒸汽船は中川海軍中佐の指揮の下に二十五日夕龍巖浦に入港せり其際宇治は安子山より敵の砲射を受けたり廿六日の朝水雷艇一蒸汽艇一は水深測量の爲め娘々城附近に航進せり艦隊は午後五時より同五十分まで安山子の敵と對戦し敵砲を沈黙せしむ又其附近を通行する數百騎を砲射せり海軍は損傷なし

其 二

架橋準備を爲すの必要上軍は廿六日朝威力を以て即ち近衛師團の一部を以て九里島の敵を撃退して之れを占領し第二師團の一部を以て黔定島を占領せり敵は悉く九連城方面に敗退せり此戦鬪に依り我死傷者近衛師團戦死(一字不明)重傷九、輕傷十六名第二師團死傷無し又敵は少なからざる死傷者を運搬し去るを見たり但し我衛生隊に收容したる敵の重傷者(乗馬斥候兵)一は東部西比利亞狙撃歩兵第二十二聯隊の者にして同人の言に依れば同第二十三第二十四聯隊も亦前面に在り其長官は少將ツルメフにして各聯隊は二大隊より成り乗馬斥候兵百四十二を有す敵は九連城後方高地に在る砲兵八門(九珊半)を以て西湖洞附近を射撃せり又虎山の高地にホツチキス機關砲二門を顯はせり元化洞高地に在りし我砲兵一中隊は虎山の高地に顯はれたる敵の高等司令部らしき者に對し三回の齊射を行ひしのみ

其 三

敵は鴨河右岸に沿ひ九連城以北に工事を繼續しつゝあり二十八日も亦

時々砲射しつゝあり二十六日九里島前岸に於て斃れたる敵の馬匹九十五頭外に生馬六頭を得たり

其 四

昨二十八日近衛第四聯隊の二中隊は偵察の爲め虎山に至り更に一小隊を栗子園に派遣す敵約三十同村の南端を防禦す我兵之を撃退す敵は死者五名を残せり其隊號は狙撃歩兵第廿二聯隊なり其時敵は楡樹溝東南端高地の砲臺より砲撃を初む我に損害なし九連城附近の敵の砲兵は時し大角度射撃を行ひ其彈丸は九里島義州西湖洞弘北洞西方附近に落下々我攻撃準備作業を妨害し夜間と雖も時々發砲す然れども其効力は極めて微弱なるものゝ如く我に損害なし本日も時々義州城内を砲撃す我は應射せず第十二師團は水口鎮の前岸に在りし微弱の敵を撃攘し今二十九日午後二時架橋を開始す

其 五

一、第十二師團は今朝午前三時水口鎮に於ける架橋完成續いて渡河午後

六時豫定の陣地に着く

二、野戰砲兵第二聯隊及重砲兵聯隊は未明迄に豫定の陣地に着午前十時四十分點定島より中江臺に出したる我歩兵斥候に對し九連城北方及び東方高地に在る敵の砲兵之に向つて射撃したるを端緒として猛烈なる砲戦を開けり午前十一時十五分九連城の敵砲兵は沈黙馬溝東方の高地に在る敵の砲兵約八門は九里島西方の架橋に向ひ射撃を續行せり我義州東方に附置せる近衛砲兵之に應ず約十分の後馬溝東方の敵砲兵亦沈黙す午後零時半兩方面の敵砲兵再び射撃を開始せしも我射撃の爲め一時廿分頃再び沈黙せり我砲撃の結果敵に充分なる損害を與へたるものと認め我軍の損害は輕傷將校五、下士以下即死二、負傷廿二なり

三、鴨綠江本流の架橋は午後八時完成し諸隊は續々虎山北方の高地に進す

四、細谷艦隊の支隊は安東縣の下流に於て戰鬪に參與し就中裝砲汽艇は敵の砲兵及び歩騎兵と最も激烈なる戰鬪を爲し歩騎兵約四百を撃退せ

五、軍は豫定の如く明一日未明攻撃を實行せんとする
六、敵の砲兵は發射速度大にして其曳火線は確實に七千五百メートル以上
上に達す

鴨綠江南既に敵なしとさして

坂 正 臣

こま野にはたつしこ草の影もなし

御稜威の風やいかにするとき

神くにむかへはよわし向ふかた

あたなき仇のいくさなれども

鴨綠江船橋架設

男 爵 千 家 尊 福

ありなれの川こそあせめ舟はしの

なかくつきぬはいさをあり鳧

敵前架橋

坂 正 臣

いのちをもかくるなりけり御軍か

あたらちわたす河のふなはし

遠 山 英 一

あたまみの折々よせてありなれの

川のかりはしかけなやみけん

鴨綠江附近の勝利をきいて

宮 島 忠 三 郎

ますらをか命をかけしうきはしに

くちぬはまれはありなれの河

矢田部與市

くれなるの波やたちけん鴨の羽の

みどりの川のいくさはけしも

陸戦のことをおもひやりて

文學博士 木村正辭

日の御旗靡くひかりに消え果てむ

しへりやか原のくさの上の露

陸戦 高田文太郎

やき鎌のと鎌にかけて西比利亞の

しこ草からんますらをのとも

皇軍進撃 山口道賀

ますらをはとく刈拂へところせく

から野にしけるしこのつゆ草

細川宏子

益荒雄か勇みすゝんてたゝかふも

みなおほ君の御稜威なりけり

大君のみことかしてみひとすちに

みくにゝつくすますらをの友

きみかため身は海中にしつむまで

たゝかふ人のたのもしきかな

今よりはしへりやの野も春ことに

さきやにははむ大和なてしこ

武夫もしへりやの野にはことりて

さむき今宵のつきをみるらん

國のため身を返りみぬますらをの

こゝろにまさるたからあき哉

朝日影にはふかたより消えそめて

むすふかひなし草の上のつゆ

侯爵北堂

池田幸子

ますらをかこまのあかきに醜草を

ふみなひけつゝいや進むらん

草も木もなひきふすらん天つ日の

ひかりかゝやく國のみいつに

池田亨子

御軍のむかふところのあたはみな

君かみはたになひきふすらん

君のため國のためとてますらをか

たてしいさは千代も朽せし

池田巖子

あたなせるとつ國うちて大きみの

みいつは四方にかゝやきに梟

いくとしのうらみかさなる外國を

うちこらすへき時はきにけり

池田住子

あまてらす我日の本のひかりには

さもこそきえめつゆのくに人

あら鷺のはかひことと折つへし

山さけとほるつゝのひゝきに

●安東縣九連城一帶占領

(黒木大將報告)

敵は九連城西北高地に於て再抵抗を試しも五月一日午後一時五十分より退却を始め軍の右翼隊(第十二師團)は大樓房中央隊(近衛師團)は蛤蟆塘左翼隊(第二師團)は安東縣に向ひ又軍の總豫備隊は遼陽街道を前進し午後六時軍は安東縣より老古溝を経て梨樹溝に亘る線を占領し特に蛤蟆塘附近にて三面より敵を包圍し激烈なる戰鬪の後砲二十門馬匹車輛共悉皆將校二十餘名下士卒多數を捕虜とせり

我に對せし敵は狙撃歩兵三師團の全部及び同第六師團の第二十二第二十四聯隊とミシチエンコの騎兵旅團砲約四十門機關砲八門にして鳳凰城方面に背走せり我軍の死傷將校以下七百ならん目下取調中

戰利品は速射砲二十八門小銃及び彈藥等多數なり我砲兵の効力は頗る偉大にして捕虜將校の言に依れば昨今兩日の砲戰に於て敵の軍團長ザ

スリツヤ師團長カシタリンスキーは共に負傷し其他捕虜騎兵中佐の言に依れば敵の死傷は八百以上なりと云ふ

摩耶艦隊は午前十時より安東縣下流に至り敵の砲兵と約三十五分激戰の後之を退却せしめ午後二時龍巖浦に歸れり

當軍司令部は午後五時三十分九連城に至る 殿下以下各將校極めて元氣軍隊の士氣大に振ふ

以上取散へず報告す

其二

昨一日午後敵は我追撃に對し頗る勇敢の抵抗を爲し爲めに我軍の死傷は更に三百を加へたり又此敵は最終の時期に至る迄奮戰し其砲兵約二中队は人馬の大半を失ひ遂に閉鎖機の要部を破壊し白旗を掲げ降服せり

捕虜將校の確言に據れば蛤蟆塘附近の戰鬪に於て師團長カシタリンスキー及狙撃歩兵第十一第十二聯隊長狙撃砲兵大隊長は戰死し其他高級

將校に死傷者多し敵は數回の打撃に依りて全く潰亂して退却せしもの
如く昨夜來各所に遁竄し在りたる敵の投降するもの多く捕虜の總數
今や將校ロウエフフギ一中佐以下約三十内健康者十下士以下約三百健
康者二百其詳細及び我軍死傷者の姓名確報は取調中

蛤蟆塘の追撃

大口 鯛 二

しかはねの多きを見ても仇なから

よくたゝかひし程そしらるゝ

ちよろつの仇は畏れぬみいくさも

多きとりこはもてあましつゝ

九連城占領の捷報を聞きて

小池 道子

いくさ人いかにこゝろを碎きけむ

このかちときをあくる時まで

九連城占領

阪 正 臣

城のみか師團のをさかいのちさへ

おちけるいくさ烈しかりけん

遠 山 英 一

わたの城こよひとりての月を見て

よろこひ酒やくみかはしけん

皆人のまゆもひらけぬきつかひし

このたゝかひに敵をやふりて

岡 田 順 達

大御旗ありなれこえてすゝみゆく

さきてにおつるわしの片はね

三橋中雄

こゝを瀬と仇の頼みしつゝらをり

折よくわれはしめ得つるかな

小川文治郎

ありなれの仇のかはねを橋として

やすくわたりぬやまと大丈夫

九連城の陥落をきゝて

于爵長岡護美

日の御旗今こそなひけあらわしの

巢をくふこまの峯のあなたに

深瀬眞一

日のみはた風になひきぬ昨日まで

あたのこもりしとりてくゝに

光田文次郎

みいくさに攻めやふられて砲門を

すてゝにけつる敵のあはれさ

小川清風

國を思ふますらたけ雄の太刀風に

あたのゝ露はちりはてにけり

矢田部與市

かためたる九つらねもひとうちに

攻め落したるいくさをしも

木谷壽子

ありなれの川さへやすく渡りえて

はまれをわけしすめら大丈夫

九連城の戦ひに近衛師團のいさをあ

りしとて 外山且正

いさをしの高砂しまのおほかみも

よみしたまはむこの勝いくさ

戦捷を聞きて 佐々木松老

ひむかしの支那よりこまにおく露は

朝日をうけてやかて消ぬへし

深澤清作

さくたひにころの駒も勇むなり

いくさのにはにかちどきの聲

●鳳凰城の占領

(黒木大將報告)

一、五月六日我騎兵斥候は鳳凰城東北に於て敵の騎兵を襲撃し死者三名
傷者數名を生ぜしめたり

二、同日又我騎兵は二臺子、三臺子、四臺子の敵を撃退し歩兵の一部隊を以
て鳳凰城を占領せり報告に據れば遼陽街道沿道の家屋は多くは焼失
せられたり

三、敵の退却途上に人馬逃走したる衛生材料遺棄し在りたるを以て之を
當軍に收容し彼我傷者の治療に使用し又敵の衛生部員數名は其希望
に依り之を敵傷者の救護に使用せり

四、敵は鳳凰城退却の際彈藥庫火藥庫を焼きたり七日に至るも森林及び
村落内等より出て來り我れに投降する敵の敗竄兵續々として絶えず
又敵自ら埋葬したる墓地も少なからず土人の言に據れば去る二日擔
架にて鳳凰城を通過せし敵の負傷者は約八百なりしと之に依りて見

れば敵の損害は確に三千以上なりしならん

●遼東半島の占領

我一支隊は五月六日小数の敵を撃退して普蘭店を占領し鐵道電線を破壊して旅順との交通を切斷せり

●遼東掃海の續行軍艦宮古の沈没

第五戰隊及び第二水雷艇隊(第四十五號艇を缺く)は五月十四日早朝大窩口沖に至り艦隊掩護砲火の下に聯合掃海艇隊を放ちて掃海を續行す敵は去る十二日ロビンソン角九〇〇呎の高地に在りたる監視哨を撤退したるものゝ如くなりしも大活山北東六三〇呎山の北東側に新に假設砲臺を急造して野砲約六門を備へ又同山の東側に掩堡を設け歩兵約一中隊を配備する等應急防備に努めたるものゝ如く終日頑強なる抵抗を爲せり

此日掃海艇隊は終日敵の機械水雷敷設面内に在て敵の砲火を冒し能く

其任務を遂行し水雷五個(内三個を撃沈し他の二個を爆沈す)を破壊し又我艦隊の砲火は陸上の敵に多少の損害を被らしめたり

然るに午後四時三十五分作業を中止し掃海艇を收容せんとするに當り敵の機械水雷不幸にも宮古の左舷艦尾に觸れ轟然爆發して艦體に大破を被らしめ死傷者二十四名(内戦死下士二)を出し艦隊も亦二十三分時の後沈没するに至りたるは深く遺憾とするところなり

鳳凰城占領

藤崎虎二

荒わしものはさ收むるいとまなく

またもねくらを捨て遁けむ

陸戰の勝利をきゝて 土田道一

ありおれの川をわたりて日の本の

くかいくさ人かちしうれしさ

久木田正秋

天皇のみいつにそひて日のもとの

ひかりいやます時は亦にけり

川島儀三郎

外國のひともとよみていはふなり

我ますらをのからしいくさを

目壽祐

皇軍の御稜威はいよく輝やきて

御代になひかぬ國やなからん

多胡喜久磨

御軍にあらそひかねてろしやひと

白はたあくるときやきぬらん

廣瀬令行

神國のあまつ日つきのみいくさの

むかふかたには仇なかりけり

森川勝美

すめ國のあまつ日かけのはた風に

あたの、驚も落ちはてにけり

千葉胤明

陸いくさ思ふみなどに上げぬまは

なみの立居にこゝろ置くらむ

敵前上陸 大 口 綱 二

敵は皆あとにひきけんみいくさの

うしほの如くよするみなどは

鐵道破壞

阪正臣

まかな路は絶たれ港はふたかれぬ

いつくへ敵はにけんとすらむ

普蘭店占領 遠山英一

程もあく敵はとりこと成りぬへし

のかれむ道をわれに絶たれて

加藤義清

船はくたけ道は絶たれぬあはれ仇

しら旗あくるほかあかるらむ

幡江晃

仇人のみなとにかよふよしそなき

めくるくるまの道をたゝれて

●第三次旅順口閉塞

東郷聯合艦隊
司令長官報告

聯合艦隊は豫定の如く行動し五月三日午前三時四時の交を以て旅順口
第三次の閉塞を執行せり閉塞船隊及之を掩護せる赤城(艦長海軍中佐藤
本秀四郎)鳥海(艦長代理海軍中佐岩村圓次郎)第二驅逐隊(司令海軍中佐石
田一郎)第三驅逐隊(司令海軍中佐土屋光金)第四驅逐隊(司令海軍中佐長井
群吉)第五驅逐隊(司令海軍中佐眞野巖次郎)第九艇隊司令(海軍中佐矢島純
吉)第十艇隊司令(海軍少佐大瀧道助)第十四艇隊(鵜真鶴を缺き第六十七號
艇第七十號艇を加ふ)司令(海軍少佐櫻井吉丸)は二日夕刻艦隊を分れ豫定
航路を旅順口に向ひ前進せしが不幸にして午後十一時頃より南東の強
風俄に起り波濤高く爲に閉塞船隊は離散し相失ふに至れり閉塞船隊總
指揮官海軍中佐林三子雄は船隊の集合到底見込なきを認め閉塞事業中
止の命を下せしも其信號到達せず午前二時頃迄通信に盡力せる間に船
隊相前後して既に旅順口沖に達せり然るに三河丸(指揮官海軍大尉匝磋

胤次は港外を偵察せる第十四艇隊に對する敵の砲火を見て前續船既に港口に突進せる者と思考し直に港口に向て邁進し佐倉丸(指揮官白石藤江)と思はしきものに續く敵は港口附近に敷設せる視發水雷を發火し強力なる探照を猛烈なる砲火を以て之を防禦せしも三河丸は港口防材の一部を破りて奥深く水道に闖入し中央の好位置に投錨爆沈し佐倉丸と思はしきもの港口尖岩の附近に投錨沈没す之に次で遠江丸(指揮官海軍少佐本田親民)江戸丸(指揮官高柳直夫)小樽丸(指揮官野村勉)相摸丸(指揮官湯淺竹次郎)愛國丸(指揮官海軍大尉大塚太郎)朝顔丸(指揮官向菊太郎)も相次で港口に向ひ猛進す此時敵の防禦砲火猛烈を極め其敷設水雷は前後左右に爆發し閉塞隊員の戦死負傷するもの最も多かりしが遠江丸は港口防材に衝突し船首を東にし殆んど港口の半部を閉塞して其位置に爆沈し江戸丸は港口に達し將に投錨せんとする際高柳指揮官は腹部を射られて戦死し指揮官附海軍中尉永田武次郎直に之に代はり投錨を命じ次で爆沈せり小樽丸相摸丸と思はしきものも亦港口に入り沈没せ

るものゝ如く又愛國丸は港口より約五鏈の所に於て敷設水雷に罹り瞬時に沈没し指揮官附内田弘機關長青木好次以下八名行衛不明となれり朝顔丸と思はしきものは舵機を損じたるものゝ如く港口に達せずして終に黄金山下に爆沈せり右八艘の閉塞船の内五艘は港口に入りて爆沈せしを以て港口は少くとも巡洋艦以上の通航に對し充分閉塞せられたるものと認む

今次の閉塞事業は天候の異變と敵の防備増大したるに依り前二回のものに比し頗る慘烈を極め戦死負傷は甚だ多く特に小樽丸相摸丸佐倉丸朝顔丸四隻の閉塞隊員は一も收容する能はず其最後の勇行さへ之を知るに由なかりしは遺憾至極なりと雖も其忠烈の事績は永く帝國の史乘に特記すべきものなりと信ず閉塞隊員の收容に従事したる各水雷艇隊及驅逐隊は翌朝まで風濤と戦ひ敵に抗して能く其任務を盡し特に水雷艇隊は港口に接近して閉塞隊員の約半部を收容せり此難業中六十七號艇(艇長海軍中尉松平眞雄)は敵彈に瀆管を破られ負傷卒三名を出し一

時敵前に於て進退自由を失ひしが其機艇第七十號(艇長海軍太尉森本義寛)は之を救助して曳行せり又蒼鷹(司令兼艇長海軍中佐矢島純吉)も敵艇に左舷機を傷けられ卒一名戦死し軍にては下士一名戦死せり其他驅逐艦水雷艇には一も損傷なし

第三戦隊(司令官海軍少將出羽重遠)は三日午前六時第一戦隊(司令官海軍中將東郷平八郎、司令官海軍少將梨羽時起)は午前九時旅順口港外に達して驅逐隊水雷艇隊掩護集團し午後四時まで各方面に分れて閉塞隊員の搜索收容に盡力せしが終に得るころなかりし此日濛氣頗る深く爲めに敵状を見ること能はず夜に入り我艦隊は各其集合地點に引上げ四日朝より更に豫定の行動を續行せり

第三回旅順口閉塞の命をかゝふりて

出て立つをり 海軍少佐 本 田 親 民

死といはす生ともいはす今さらに

くにのためにとたゝ思ふ身は

提灯行列 男 高 崎 正 風

みいくさのから路ねりゆく燈火に

かゝやくものは御稜威なり梟

阪 正 臣

道もせにともし火捧けかちを祝ふ

人こそたかし大御城のあたり

遠 山 英 一

國民のあかきこゝろはつらなれる

このともし火にあらはれに梟

加 藤 義 清

櫻田のうちとまはゆくともし火の

花をさかするかちいくさかな

子爵夫人

芝山松子

雲井までかけや見ゆらん國たみの

赤きこゝろのもゆるともし火

目壽祐

かち軍いはふしるしの火かけにも

御代のひかりは照添ひて見ゆ

連夜祝捷の聲さかりなりけるに

小池道子

勝いくさことはく聲をまのあたり

たゝかふ人にきかせてしかな

皇軍連捷 權命婦 吉田愛

いくさ人戦かふことにいさましき

やまとこゝろをあらはしに鳧

千家尊弘

しへりあにはひほひこりし醜草も

かれしほむへき時は來にけり

竹崎嘉通

しへりあに羽たゞく鷺も日の本の

神のいふきにきそひあへめや

大勝利を賀して日比谷の公園に萬歳の聲きこえければ 兵動ほき子

久方のくもゐのにはにひゝくらし 日比谷にあくる萬代のこゑ

をりにふれたる

稻垣了齋

あめつちも動くはかりに聞ゆなり

うみの陸のかちどきのこゑ

雨森巖

のはる日の御旗の風になひきけり

しへりあの野にしける草木も

井村本太郎

空たかくのはる朝日はたかせに

もろくも仇はにけらせにけり

龜山新一

日の旗のゆくへさへきる物もなし

もの音もなし西比利亞のはら

福田操三

敏鎌もてとくかり拂へしへりあの

われにあたなす露のしこくさ

安田權兵衛

みいくさのほつゝのたまに千萬の

あらふる鷺をうちやつくさん

齋藤千彌

すめらきの御稜威の風に國の名の

つゆとや消えんちよろつの仇

石原正誓

吹すさふわか神かせにふしはてゝ

見るかけもなし露のしのはら

あたし野の露はもろくも消果て、

のほるあさ日に影もとゝめす

●初瀬、吉野の沈没

(東郷司令長官報告)

其 一

本職は茲に三度不幸なる變災の報告を進達するを遺憾とす五月十五日午前五時千歳出羽司令官よりの無線電信報告によれば本日午前一時四十分頃第三戦隊は旋順口封鎖の任務より歸航中山東角の北方海面に於て濃霧に遭ひ春日は吉野の左舷艦尾に衝突し吉野は浸水甚しく終に沈没せり春日より出したる救助艇にて收容されたる者機關長以下約九十名なり濃霧未だ霽れず痛心に堪へず

其 二

本日は海軍に在て最大不幸の日にして茲に又最も不幸なる報告を進達するの止むを得ざるに遭遇せり初瀬敷島八島笠置龍田は本日午前十一時旅順口沖にて敵を監視中初瀬は敵の水雷に罹り先づ舵機を破られ初瀬より曳船送れの電信に接したるを以て將に之を發送せんとするさき

更に敷島より初瀬は第二の水雷に罹り終に沈没せりとの悲報來れり本職は之を報告するに臨み只だ遺憾至極と云ふの外なし善後の處置に就ては夫々出來得る丈けの手段を盡し災厄を増大せざるに努め居れり當地附近濃霧未だ霽れず

其三

敷島は初瀬遭難狀況報告の爲め今當地に歸港しつゝあり驅逐隊全部及び二個水雷艇隊は敵の驅逐隊に當り且つ溺者救助の爲め午後一時三十分當地を發して旅順口方面に向へり霧未だ霽れず

其四

初瀬が敵の水雷に罹りしは老鐵山の南東約十海里の所にして當時同方面には霧なく又其附近に敵の驅逐艦もあらざりしと云ふ此事實より判斷する時は敵は其附近に機械水雷を沈置したるか或は又潜水艇を利用したるものならん初瀬は約三十分間を隔て二回の被害にて瞬時沈没したるも敷島八島笠置龍田等にて梨羽少將中尾大佐以下三百名を救助收

容せり初瀬の沈没の頃敵の驅逐艦十六隻旅順口内より出て來り我を追尾せしが會々其地に來りし明石千代田秋津洲大島赤城宇治及高砂は前記諸艦と協力して之を撃退し初瀬生存者の收容を果すことを得たり以上の報告は混信の爲め文意不明瞭なるも無線電信は今朝遭難報告の爲め龍田の少尉並に八島艦載水雷艇指揮官の口頭報告を綜合して製作したるものなり當地近傍霧未だ霽れず

其五

昨朝(十七日)濃霧霽れ各隊逐次入港す其報告により初瀬は全く敵の機械水雷に罹りしものなることを確かむるを得たり

初瀬吉野のしつみしをきいて

前田漢子

名にたかき吉野はつせのさくら花

いかてもろくはちりはてに劍
をりにふれて
北里関

われになほ富士八島あり三笠あり

よし野初瀬はよししつむとも

布施恒之

春の日のかすみの海にしつむとも

よしや吉野の名まてくつへき

露帝進發の風説を聞きて

萩原嚴雄

かしこくも君か門出のぬさしるに

さゝけまつらむ下瀬くすりを

従軍記者

大口綱二

勇ましさいくさの様を見するかな

うつす筆にも火はなちらして

外國従軍將校

江崎權一

とつ國の人のさもこそさむからめ

わかものゝふのいくさ振見て

●金州城陷落

(奥大將報告)

攻撃軍は本日(二十五日)豫定の如く第一線を安王廟、三里庄、陣家庄、王家屯の線に進め、午前五時半頃より同九時に涉り、金州を攻撃し、又南山の敵砲と交戦す。金州附近の敵情に變りなく、敵砲兵は盛に我隊を捜射し、目下尙ほ時々我を砲撃中なるも、我が損害大ならず、軍は明朝金州南山の敵を攻撃せん。

軍の攻撃に連係して、金州附近を砲撃すべき艦隊の一部は本日來らず。彼我の砲戦は二十六日早朝より約五時間に涉り、其間我艦三艘も、金州灣に至り、我に協力し、又敵砲艦一艘は大連灣に在りて、我が左翼を砲撃す。而して今や砲兵戦酣にして、金州のみは午前五時二十分、我が有に歸したり。攻撃軍は二十六日激戦の後、南山を占領し、目下敵を追撃中。

●金州南山の占領

軍は豫定の如く五月廿五日を以て攻撃準備を終り、同廿五日夜半より運

動を起し、第四師團を右翼に、第一師團を中央に、第三師團を左翼に併列し、金州南山に向て前進せしむ。此夜迅雷風雨咫尺を辨ぜず、運動頗る困難なり。き同時一部隊を以て金州城を攻畧せしむ。二十六日午前四時三十分砲火を開始す。べき筈なりしも、濃霧の爲め五時三十分全砲兵は内山少將の指揮を以て南山に砲撃を開始し、同六時頃より我艦隊の四隻は金州灣より此砲撃を援助せり。敵は全備砲を以て之に應戦し、茲に激烈砲戦を交へ、約三時間の後、南山の敵火大に減衰せり。此に於て各師團の歩兵は前進を起し、一進一止し、敵の砲火を犯し、敵の第一線を距る約三百乃至五百五十米突の地に達せり。

午前十一時敵の露天砲は我猛烈なる砲火に依り悉く沈黙せしも、速射野砲二中隊は疾く退却して南關嶺の高地に據り、終極に至る迄時々我を射撃せり。午前十時頃敵の砲艦一艘和尚島砲臺東方に來り、午後二時迄我第三師團の左側背を砲撃し、且つ小蒸汽艇五艘に搭載せる陸戦隊を紅土涯附近に上陸せしめんとせしも、我一部之に向ひしを以て遂に歸還せり。又

甯山南方大房身に在る敵の九珊米砲四門は午前七時迄我第三師團に向つて砲撃を繼續せり我左翼に在る砲兵之れも應戦せしも距離遠くして充分の効力を顯はす能はず敵の占領せる南山の陣地は峻峻なる高地線に半永久築城を施し大小砲約七十門機關砲八門を備へ連續圍繞せる數層の堡壘線に銃眼を穿ちたる援蔽部を作り其前方には數多の地雷及び鐵條網を設け且つ此間隔を補ふに多數の機關砲を以てせり之に對する我砲兵は全力を擧げて之が破壊に努力し又屢々陣地を交換して敵に接近し以て歩兵の前進に勢力を與へたりしも敵歩兵の抵抗は頗る頑強なりしを以て午後五時に至る此時我歩兵の爲め未だ突撃の進路を開くに至らず又我左翼に在る第三師團は敵の包圍を受くるのみならず敵は漸次其歩兵を左側前に増加し且つ南關嶺に在る敵砲二中隊は此攻撃を援助し益々師團の左側に迫らんを以て我携行砲兵彈藥は將に盡きんとし戰鬪を永く繼續すること能はざるに至れり依りて止むを得ず歩兵をして損害を顧みず強襲を行はしめ砲兵は補充し得る彈藥を盡して敵

を猛射せしめたり我第一師團の歩兵は意氣衝天の勇を鼓して敵陣に向ひ突撃せしも敵の猛烈なる瞰射と側射に依り多數の死傷者を生じて前進を繼續することを得ず頗る苦戦に陥りしが恰も良し此時金州灣に在る我艦隊は敵線の左翼に向つて更に猛火を開き砲兵第四聯隊に協力し敵火の撲滅を努め第四師團は此機に乗じ全力を擧げて敵の左翼に迫り先づ高地線に進む

此に於て第一及び第三師團は之に協力し全線を擧げて勇奮突入し累累たる死屍を超えて敵壘に肉薄し劍尖相接するに至る迄激戦して遂に南山を攻畧し各堡壘上に國旗を飄せり時に午後七時過ぎなり敵は潰亂して旅順方向に退却せり此の退却に當り敵は大房身の火薬庫を爆發したり軍は一部を以て敵を追撃したる後全隊戰場に露營す此時士氣大に振ひ萬歳の歡呼諸方面に起り砲兵は全力を竭して敵を追撃す我に對せし敵の兵力は野戰軍約一師團野戰砲二中隊要塞砲兵海軍若干なり察するに敵は旅順及び大連灣を掩護する爲め爲し得る限り南山の陣地に據り

我前進を防止せんことを努めたるものにして尙ほ其防禦工事を増加するの計畫ありしが如し敵の死傷は不明なるも戦場に遺棄せし死體のみにては五百を下らず捕虜は將校以下若干名戦利品は砲約六十八門機關砲十門發電用蒸汽機關一個電氣燈三個ダイナモ一一個地雷鐵罐約五十個其他小銃及び彈藥諸材料等なり其詳細は目下取調中我軍死傷將校以下約三千五百名終に臨んで海軍の有力なる援助に對しては深く其好意を謝す

十六時間の激戦

男爵 千家尊福

久しきにたへ難き世のならはしも

此御いくさをうちやふりける

坂正臣

はけしくもたゝかひしかなわか軍

十まり六ときいきもやすめす

大口鯛二

ひさしきに堪へしを見ても皇軍の

すくれてつよき程をしらるゝ

千葉胤明

うつたまも力もつきすわたみかた

守りもまもりせめも攻めたり

遠山英一

ぬはたまの夜を日につきて戦ひし

わかいくさ人おもひこそやれ

加藤義清

かはかりの時をさへて射向ひし

仇のつよさをそおもひやらるゝ

迅雷風雨中の進撃 坂 正 臣

かみはなり雨はふきなす真夜中も

あたらついくさつらも亂れす

大口 鯛 二

みいくさの進み行手はさまたけす

ときいかつちも雨もあらしも

千葉 胤 明

進みうつはつゝの火花いかつちと

雨夜のそらをてりかはしつゝ

遠山 英 一

鳴神のおとにまきれていくさひと

仇のとりてにすゝみよりけん

我兵沈勇 坂 正 臣

とふ弾の雨よりしけきなかにして

みなともふたき橋もかけゝり

加藤 義 池

のる船のしつむいまはに浪のこと

立ちさわかぬや大和たましひ

追撃 男爵 千家 尊 福

おひしきてうつや火筒の玉あられ

まるひくたけぬ仇はあらしな

突撃 千葉 胤 明

いくたひか味方のかはねふみ越て

つきくつしけん城もとりても

南山激戦 男爵 千家尊福

しかはねを越てはまたも倒れての

後にやまむといさみたちけん

玉しきて終にむかへんみいくさと

しらてや仇の火つゝうつらん

金州灣陸軍徒渉 坂正臣

みいくさはみなさる潮に飛入りて

あたうちうみの江を渡りつゝ

大口鯛二

こゝを瀬とふせくあたをも退けて

海おしわたるますらをのとも

加藤義清

仇波のたちさわくをもかへりみす

かちわたりせし益良雄あはれ

南山占領 男爵 千家尊福

日の御旗みなみの山にかゝやけり

北のくにひとふしあふくとも

遠山英一

われさきに仇はにけゝん斃れたる

友のかはねもかへりみすして

光田文次郎

鐵よりもかたきこゝろの見ゆる哉

はりかね破るますらたけをは

南山の激戦に我軍の戦死者を悼みて

鹽原熊次郎

夏くさのつゆと消えにし益良雄の

しらせにぬらす袖たもどかな

砲臺 護得久朝常

大砲をすゑしうてなも守るひとの

こゝろ弱くはかひなからまし

地雷火 護得久朝置

かねてより雷ふせてまつなれば

よせくる敵をみなころしせん

捕虜 坂正臣

たゝかひにつよきのみかは情まで

ふかき御國とおもひ知るらん

加藤義清

年へてもゆめ忘るなよおほきみの

めくみのつゆに露はひし身を

松澤正澄

ひとたひはあたとなるとも真心に

くたらはなとか恵まざるへき

捕獲馬 加藤義清

小夜ふけて嘶く見ればみうまやに

いくさの庭のゆめや見るらん

大口綱二

御軍にたてまつらむとよきうまを

かねてもあたの飼や置きけむ

千葉胤明

皇軍のえものとなりてしへりあの

野末のこまも世にしられつゝ

戦勝ちて近衛公を思ふ

いさましきみいくさ人の勝ときを

苔のしたにやきみはさくらむ

連戦連捷 鶴岡定之

海山もとよむはかりにひゝくなり

みいくさひとの勝ときのことる

宇井可道

日の旗のみいつの風にしをるらむ

世にはこりにし鷺のつはさも

陸軍の捷報をきゝて 山田文平

さし昇る朝日のひかりかゝやきて

もろくもきゆる草の葉のつゆ

佐藤直彦

あさつゆは我日の本の御ひかりに

うちてらされて消え果てに鳧

泉而足

天津日のひかりをうけてしへりあの

つゆときえゆくしこのたみ草

沼倉さと子

やかて見よ我が日の本の山さくら

うらるの峰に咲きにはふらん

矢 島 順 平

たゝかへはかならず勝て日の御旗

かゝやく國のはまれたかしも

吉 田 忠 恕

日の御旗うらるの峰におしたてゝ

みちなき國にみちををしへん

征清の役大山大將の金州城中に手つ

から植られし旭櫻をよめる

陸軍少將 藤 井 茂 太

唐人もさくはることにあふくらん

朝日のかけにゝはふさくらを

折にふれたる 中 邨 秋 香

かちてすら人は數多もうせにけり

うたてきものはいくさなり梟

吾子やいかに吾せやいかに勝ち軍

勝ちぬときくは嬉しけれとも

守 本 朴 鳳

いままでの罪をはわひよろしや國

人のふむへきみちをたどりて

松 澤 正 澄

天か下にとゝるきにけりしき島の

やまとみくにの筒のひゝきは

大橋榮

鈴の音におとろきたちて買ふ文は

またも御國のかちいくさかな

渡邊敏謙

かみとこそいふへかりけれ戦へは

かならす勝をつくるみいくさ

西澤善兵衛

大君にさゝけまつりし身なりとて

のこる妻子のいさむこゝろは

鏑木忠兵衛

うみに陸に仇なかりけり日の本の

ますら健雄のむかふかたには

鏑木まつ子

しき島のやまと島根のつはものは

おそろしやとも思はさりけり

植松延壽

日の本のひかりかゝやく夏の日

かれやはつらむろしやの露草

遼東南部港灣封鎖 大 口 綱 二

みなど口うらもおもても鎖されぬ

小舟のかよふすきまなきまで

千葉胤明

いろくつのかよはん隙もなかる覽

みいくさ船のとさすみなどは

掃海

植松有經

すめらさの御國のものとなして鳧

わたの底まてはらひきよめて

大口鯛二

わたつみの底に潜めるいかつちを

はらひつくさん神かせもかな

遠山英一

いかつちにかゝるを見ればふな軍

たゝかふよりは危ふかりけり

加藤義清

たはやすく船はかよへり和田海の

そこのたまもを拂ひつくして

青泥窪上陸

大口鯛二

ひとさゝへさゝふる仇もなかり鳧

みなどのとりて我にまかせて

橋を毀ちみなどを捨てゝ遁つらん

我御いくさのせめよせぬまに

矢島義道

時事雜詠

くれなるの血汐なかるゝ川瀬をも

いさみ渡れりますらをのとも

いくさ人身はしへりあに曝すとも

君かみいつをわするなよゆめ

柳澤文真

千代ふともたてし功はくちせめや

いのちはくさの露とけぬとも

井村米太郎

そらたかくのはる朝日の旗かせに

もろくも仇はつゆときえつゝ

動員令を待ちわひて

陸軍少將 小泉正保

今夕なほそら頼みとは知らねとも

おほつかなくもまつ外そなき

某師團は最後にあらされは動員令下

らすと聞きて

きもを嘗め薪にいねしかひもなく

またみいくさをよそに見る哉

遠からず動員令下ると洩れ聞きて

あつさゆみはるには暫し後れても

花のかすには洩れしとそ思ふ

いよく動員令に接して

山さくら春にはよしやおくるとも

あさ日に匂ふいろはかはらし

出發のとき

かねてよりかくとは思ひ定めしも

母にわかれの惜しまるゝかな

子に示す

親につかへ學ひに勵みひたすらに

おのれゝか身をはみかけよ

斥候行

陸軍歩兵伍長

瀧

口

述

里やいつこ敵やひそまん霧こむる

山のふもとにいぬのこゑする

それとなくいこふ木かけに敵人か

つなきしこまの足趾のこれり

月冴る野邊に立ちたるうつろ木を

しはしは敵の伏すかどそ見し

露ふかき草のふすまに太刀まくら

こよひもきぬ山ほととさす

從軍雜詠の中に

松

田

甲

はるくと糧おくり行く牛くるま

起せるちりのはてもなきかな

六月廿二日七盤嶺にて敵を討ち退け

し後しはし木蔭にやすらひけるに姫

百合の花の咲けるを見つけれは折

り取りて故郷なる師の許に贈るとて

多

田

春

樹

外國の野なからゆかしこまつなく

老木かもとのひめ百合のはな

かへし

富

田

行

正

もろこしの荒野のはてに言の葉の

花さくへくとおもひかけきや

出征中なる兄柳萬に菊の畫をおくる

とて

井

上

三

男

もろこしの荒野は花もさかさらん

これみてしのへふるさとの庭

返し 在戦地 井上柳高

諸越の野にしてみんとおもひさや

わか日の本のしらすくのはな

出征中の義弟歩兵軍曹栗川久幸のも

とより端書をはしめて得たるとき報

國唯一心至極壯健に遼東の野に起臥

すどありしをみて 島津久實

一言は千々のふみにもまさりけり

とる手おそしと見つる端書の

月のよきよ父母の上を思ひ出て、

海軍中軍醫 石川宏平

戈とりて波よりなみのかちまくら

月かけこひしふるさとのそら

鈴木梅次氏臨終の際實兄不羈次氏と

はからす再會し我血にそみし小石を

とりて親の許におくりしとききて

山東たい子

ゆくりなくめぐりあひしも同胞の

つきぬえにしのおれはなる覺

●常陸、佐渡兩船遭難

(六月十六日大本營着電)

其 一

佐渡丸は十五日午前十時支海沖にて敵艦三隻の砲撃を受け其結果戦闘員は敵艦に來れ非戦闘員は本船を去れこの申込を受け遭難者約七十名此地に漂着せり糧食なし

其 二

土佐丸は六連島にて常陸丸の生存者三十七名を救助して入港す軍曹田所龜松二等卒藤崎虎一及び火夫山瀬辰二郎の報告に據れば常陸丸は十五日午前十時半頃敵艦三隻に追はれ全速力にて前進す敵は初め空砲を放ら引續き實弾にて連續急射撃し死傷するもの多し此際彈藥庫を開く間もなかりしが敵艦は更に接近し側面より急射撃を爲し汽罐破裂乗組者死するもの多し又第三艙より失火す藤崎二等卒は分隊長沼里

伍長の命に依り聯隊旗を保護せんさせしに聯隊長須知中佐は既に軍旗を焼き旗竿を碎き居られ汝等は海上に泳ぎ歸りて此旨を報告せよと命ぜられたるが間もなく砲彈肩に中りて戦死せり將校の大部は割腹又はピストルにて自殺某中隊長は海に投ず此間ボートを卸す間もなく船長事務長海に投ず監督將校戦死せり二等運轉士自殺敵は更に第三回の急射撃を爲し常陸丸は全く沈没す浪高く敵艦の行動不明なれども前方に有りし佐渡丸は西北に向て進行せり其後一隻の漁船にて三十七名救助せられ六連島に着き土佐丸に救はる

沈没の際尙ほ一隻の端艇あり三十名許り乗りたる様なれども行先知れず

救助せられたるは田所軍曹外兵卒三十四名火夫一名船内人夫一名なり内輕傷十二名稍や重傷一名あり土佐丸にて本日字品に送る

須知中佐

近 藤 久 敬

御軍のしるしのはたけやきすてつ

船もいのちもあたのまにく

大 口 鯛 二

やきすてゝあたにわたさぬ旗竿の

なかくつたへんたけき其名は

千 葉 胤 明

たゝへさる人こそなけれ仇浪に

みはたぬらさぬ君かいさをは

坂 正 臣

清き火に御旗をやきて君か代を

いはひなからやめをふたき劍

常陸丸船長ゼー、キヤムベル氏

山 東 九 子

世に高しつとめ果していさきよく

ふねと沈みしきみかその名は

太田常陸丸事務長

船長はこどくにひとそわれひとり

重荷おはむといひしきみかな

沖島遭難者生還 北 里 関

沖の島海士かすくひしなきからの

なかにいくたりよみ返りけん

遠 山 英 一

和田の原沖のこしをめあてにて

汐のからくもおよきつきけん

聯隊旗手大久保少尉の遺髪を見て

山東たい子

玉くしけ箱にひめたるくろかみの

なかさかたみとなりし君かな

常陸丸殉難將校の葬儀に列なりて

船 曳 衛

海行かはみつくかはねの言の葉を

まことにしたるますらをの友

脇光三君の忠死を悼みて

下 田 歌 子

國の爲おもひたえてもたらちねの

みおやのもりの歎きをそ思ふ

坂 正 臣

筆なけて御國のためといのち毛の

たゆるまでにと書きつくし劍

脇氏の最後のさまをよみ侍りて

鈴 木 小 舟

ちりきはに君か洩らし、笑ひこそ

やまどの花のはひなりけれ

志士脇氏の履歴を讀みて

安 倍 井 磐 根

すくくと千里かけりし益良夫の

こゝろの駒のいさましきかな

事し有は火をも踏まんと思ひてし

こゝろのあとも見ゆる道かな
 天か下たれかあふかぬくにのため
 われとくたけし玉のひかりを

●旅順大海戦

八月十二日東郷聯合
 艦隊司令長官報告

聯合艦隊は一昨十日敵艦隊の旅順口を脱出して南下せんとするを遇岩
 附近に邀撃し次で之を東方に追撃し午後一時より日没過ぎまで激戦し
 敵に多大の損害を與へたり此戦鬪の後期に於て敵の砲火は大に衰へ陣
 形は全く潰亂して各艦個々に分裂しアスコリッド、ノーヴヰツク、驅逐艦
 數隻は南方に遁航し其他の諸艦は各旅順口に向ひ我驅逐隊水雷艇隊に
 追尾襲撃せられて更に少なからざる損害を受けたるもの、如くツエザ
 レウヰツチは其救命浮標及び屬具等の戦場に浮流せるに徴すれば或は
 轟沈されたるならん驅逐隊水雷艇隊襲撃の結果に就ては未だ詳細の報
 告に接せず右アスコリッド、ノーヴヰツク、ツエザレウヰツチ、パルラダの
 外は昨朝旅順口に遁入したるが如し我艦隊の諸艦には大なる損害なく
 今後の戦鬪に支障なし死傷は全隊を通じて將校以下約百七十なり

哨艦

近藤久敬

仇浪のしほの八百路にせきすゑて

あさゆふ去らす守るふねかな

大口鯛二

わたなみのたちゐを守るいくさ船

汐のひるよるいこふまやなき

旅順の敵艦

井村米太郎

網の目をのかれぬ魚の藻かくれに

何をいのちと身をひそむらん

逸出を企てし旅順敵艦の敗北せしを

三笠山おろすあらしにくたれて

散りし木の葉の波にたよふ

海戦捷報を聞きし時 深瀬真一

海のいくさ勝ちぬと聞て先を思ふ

我子の乗りしふねはいかにと

制海権 松原美成

仇艦のゆきゝのみちもたえはてゝ

御稜威あふるゝ海のうへかな

留守師團 遠山英一

み軍のかてりときゝてあとまもる

ますらたけ雄や腕ならすらん

敵國擾亂 千葉胤明

みいくさの勝こそ祈れわたのくに

かゝれとまては誰かおもはん

●日本海海戦

八月十五日上村第二
艦隊司令長官報告

二百八十

十四日天明出雲(艦長海軍大佐伊地知季珍)吾妻(艦長海軍大佐藤井較一)常磐(艦長海軍大佐吉松茂太郎)磐手(艦長海軍大佐武富邦鼎)は韓國蔚山沖にて索敵行動中浦鹽艦隊三隻の南航するを發見せり敵は我隊を見るや北に向ひ遁走せんとするを以て直に其前途を扼し午前五時二十三分に至り戦鬪を開始せり

敵の殿艦リユーリックは常に後れ勝にて断えず激烈なる砲火を被れり前續二艦は屢々勇敢に之を掩護し遠ざかれれば轉回して之に近づき近づけば又前進せり依て我艦隊は屢々丁字形を畫きて敵に集彈するの利を得たり其結果敵艦をして何れも數次大火災を起し多大の損害を負はしめたり

特にリユーリックの如きは遂に進退の自由を失ひ砲力も全滅に近づき時々緩慢なる發射を爲すのみにして其艦尾は著しく沈み且つ少しく左

舷に傾斜するを見たりしが敵は遂に遁走せり恰も好し第四艦隊戰場に近づき浪速(艦長海軍大佐和田賢助)高千穂(艦長海軍大佐毛利一兵衛)のリユーリック攻撃に進むを見たるを以て本隊はロシヤ、グロモボイを追撃せり此間激戦約五時間に及び敵の二艦は全速力を以て逸走す

午前十時十九分我艦隊は右舷に回頭しリユーリック搜索の爲めに南航せるにリユーリックは遂に沈没せるの報に接せるを以て直に全隊の集合を命じ其沈没位置に至り浮泳する人員六百名を救助し得たり

我艦隊は多少の損害を受けたるも何れも重大ならず士氣極めて旺盛なり

今回の戦鬪に於て重大ならざる損害を以て多少の効果を收め得たるは偏に 大元帥陛下の御稜威に因る者にして一同感激に堪へざる所なり
〔備考〕司令長官海軍中將上村彦之丞は出雲に司令官海軍少將三須宗太郎は磐手に座乗せり

又第四艦隊司令官は海軍中將瓜生外吉なり

二百八十一

敵艦リューリツクの撃沈

二百八十二

北里 関

沖の島はれわたりにけり身に負ひし

人のうらみもくにのうらみも

浦汐艦隊の敗北を聞きて

千葉 胤明

國民のうらみもこもるおほつゝに

うち沈めけんあたのおほふね

上村艦隊將士の家族を思ひやりて

萬歳と呼ひつゝくらしおやも子も

手の舞ひ足のふむをわすれて

上村司令長官 加藤 義清

對馬瀉なみちさやかにくもきりの

はれてうれしき月や見るらん

戦地視察満州丸 北里 関

事ならはのり入れて見む捕獲たる

あたのふねにて仇のみなどに

大山總司令官の出發を送りて

坪井 晋

十年へしうらみの露をうちはらふ

君かかとの今日そうれしき

西比利亞の原のしこ草なきはらふ

きみかはまれを今よりそ待つ

弟の召集に應じて出立つ時

二百八十三

高木民之助

いさや行け行けや弟ちとせにも

猶あひかたきこのみいくさを

殊更なるつとめおほせつけられけれ

はいと嬉しく譽あることに覺えて春

日を立ち出て、任に赴かむとする時

よめる

海軍少佐

高崎元彦

この事のしとけん迄はたふれしと

おもふはかりのことろなり梟

我子元彦戦死の報を聞きて

男爵

高崎正風

大君のみをしへくさをしをりにて

さきたちし子を何かなげかん

兄君高崎少佐戦死を聞きて

芝山松子

わき出つる涙と、めんよしそなき

國のみためとくちにこそいへ

田中竹子

心にはあきらめなからいくそたひ

かへらぬことを繰り返すらん

高崎海軍少佐の戦死を聞て

高倉壽子

國の爲つくさんときとすてし身の

名はよろつよに輝やきぬへし

柳原愛子

なきかすに入ると聞こそ悲しけれ

もとより捨しいのちなれども

千種任子

君の爲みくにのためになふれたる

其の名は朽ちし千代の末まで

小倉文子

たくひなき功をたてしらなみの

返らすなりし君をしそおもふ

園祥子

君か身は仇の城の上にたふれても

たまはいくさの勝まもるらん

姉小路良子

みいくさのかちときまたて國の爲

くたけし君か身こそをしけれ

下田歌子

ものゝふの鏡となりてくたけたる

なみまの月のかけのさやけさ

●遼陽占領

九月一日滿州軍
總司令部電報

敵は我猛烈果敢なる攻撃に堪へず一日早朝以來遼陽方向に退却し左翼軍の一部及び中央軍は猛烈に之を追撃中敵は太子河右岸に撤退せんとして遼陽附近に大なる混亂を起しつゝあり我戦利十珊知半加農は遼陽停車場附近を盛に砲撃しつゝあり
右翼軍は一日午前十一時黒英臺の敵を攻撃中左翼軍の首力は二日早朝より更に敵を太子河に壓擠せんさす
二十九日以來我軍の損害未詳なるも多分一萬内外ならん

其 二一

九月三日より四日に亘る夜間及四日朝に於ける戦圖にて遼陽は全く我有に歸せり

遼陽陥落の折

陸軍少將

岡

崎

生

三

あつさ弓はるひんの野に團居して

君か代うたふときちかつきぬ

遼陽にて

陸軍少將

今

橋

知

勝

うさき馬いなゝく聲も身にしみて

秋かせさむしもろこしかはら

遼陽占領の祝に

鎌

田

正

夫

哈爾賓もまたはるかありけふの如

祝はんかちはいまいくそたひ

遼陽に於る敵の糧秣焼棄

加

藤

義

清

われとわかまぐさ焼なる烟りにも

あたは追はるゝ心地してけん

黒鳩公の遼陽の官舎に朝顔の
みごとに咲けるよしをきゝて

陸軍少將 岡崎生三

手に植ゑし人はいつこか白つゆの

おきわすれたる朝かほのはな

述懐 陸軍大將男爵 兒玉源太郎

ふりわけし鉦の手もともゆるみ梟

庭のこたちのむかしおもへは

補助輸卒隊 千葉胤明

たゝかひの功におとるいさをかは

くるまをひくもかてを運ふも

敗兵 川上佳長

いかつちのひゝくかことき大砲に

にけゆくあたの見る影もなし

軍馬 大鹽學道

地はやけ風は死にたるなつの日

いくさのかてをはこふ馬かな

軍旗 一條悦子

日の本の御旗のかせにあめかした

なひかぬ國もなきよなりけり

松田繁藏

をゝしくも進む軍旗のかせの手に

ちり亂れさるあななかりけり

國旗 高取慈恭

梓ゆみはるひんせめて日のみはた

たつるその日も近つきにけり

鐵條網破壊

大野泉

黒金のあみもさなからさゝかにの

蜘蛛のふるまひかき拂ひけむ

敵前架橋

角田ともゑ

ありなれの川のうしほと寄來なる

あたなみくたき橋はかけゝん

雨中進軍

竹田隆學

鳴神のしのつくあめもかへりみす

すゝむいくさの勇ましきかな

田中昌

まのあたり仇を迎へてもものゝふは

しのつく雨をおかしてそゆく

露將の戦報に曰く日本軍の追撃狂暴

を極むと

塚越芳

鬼神のあらひ出てしとおそれけん

おほみいくさの強さ知らすも

提灯行列

山本義元

國民のあかきこゝろはかちいくさ

祝ふ火かけにあらはれにけり

古田保文

かちときをあけてねりゆく燈火は

國のひかりの花にそありける

祝捷旗行列

子爵夫人

本

多

芳

子

かちいくさ祝ひはやして玉はこの

大路にきはふちよろつのはた

鈴木 八 束

おしなへてたつるあさ日の旗風に

わたのとりてはつゆも残らし

武田 直 樹

戦捷祝賀

天地もゆるくはかりにきこゆあり

みいくさ人のかちとさのころ

九月廿一日午前十一時十五分石嘴山

露營の集合點を發せしに月いと清朗

なるも道はなはだなやむ

陸軍大將男爵

西

寛

二

郎

照る月のひかりに道をたつねつゝ

こゝろを急くしのゝめのころ

湯河原に療養中なる負傷將士を慰問

して 侯 爵 鍋 島 直 大

藥湯のしるしも見えてたのもしき

みいくさ人のきすのいえたる

豫備病院にありて 市 原 隆 作

今日もまた軍かたりを聞きにけり

おはしま近きあをきりのかけ

長岡騎兵少尉の戦死を悼みて

池 邊 義 彥

きみかこま莫斯科河にみつかはむ

音つれをのみわれは待ちしを

日のみはたかやく功脊におひて

かへらん君をわれはまちしを

坪内鏡雄君の戦死を悼みて

在戦地 瀧口

述

みいくさに君もぬますと知りし時

きみは早世に在まさゝりけり

我縁邊の甥にあたれる平岡八郎か戦

死を聞て 于 雷 黒 田 清 綱

萬代にはまれそのこるくにのため

よくこそ身をは盡したりけれ

北田中尉の戦死を

櫻井喜一郎

赤駒にしつくらおきて北のくにの

あらし射むと出てし君はも

をりにふれて 大 野 種 平

やさかまの利鎌を持て西比利亚の

しこくさはらふ時は來にけり

山 本 壽 助

みいくさの筒の火花のはけしさに

ちりてみたれぬ仇なかりけり

南 耕 信

かちとさの聲と共にあかりけり

わか日の本のくにのはまれば

外山且正

富浦太刀はきて遊へるめくし子の

けなけなるにも君ししぬはゆ

深瀬真一

からいくさ嬉しけれども友ひとり

またうちしにときくそ悲しき

渡邊甚吉

讀賣のすゝのおとにもおもふかな

我みいくさのたよりいかにと

櫻井喜一郎

たふれふすどもの屍をふみふみて

進むすらをあはれ雄々しも

玉井吉太郎

みらくさの向ふところは仇もなし

朝日かゝやく西比利亞のはら

磯貝三右衛門

萬代にためしもきかぬみいくさそ

なに惜むへきかきりある身を

廣瀬正種

勇ましきやまとたけをの太刀風に

なひきふすらん西比利亞の原

川口鐘子

ますらをの恨みやいかに玉くしけ

ふたゝひふめるもろこしか原

山・田さど子

神代よりきたへあけたる太刀風に

なひかぬ國はあらしとぞ思ふ

藤野鉦齋

笑ひつゝ船にのほりしきみか身を

泣てをしまぬひとやなからん

一 志省三

軍はてゝ火筒のけふりきえゆきし

みそらにのこるゆみはりの月

井原豊作

乗るこまのひつめにかけて遼東の

城の上に旗をさみたつらんか

七月十七日部下某師團司令部を巡視

して別れを師團長に告ぐる

陸軍大将男爵 乃木希典

野も山も討しにちしゝものゝふの

あとなつかしきなてし子の花

攻圍陣中天長節を迎へければ

陸軍少將 中村覺

きみか代をけふは歌ひて勝とき

聲あけましとおもひしものを

待旅順口陥落 伯爵 壬生基修

みいくさの旗手の風につゆどのみ

あたの亂れん日こそまたるれ

男 爵 渡 邊 清

命ともあたのたのめるみなとをは

攻め落すへきときちかつきぬ

男 爵 小 畑 美 稻

海に陸に守れるあたをやふりなは

御稜威はいよ、四方に振はん

男 爵 藤 枝 雅 之

あらわしのこゝと占めたる唐土の

みなどのいははつひに崩れん

主殿助 中 川 忠 純

黄金てふ山の上たかく日のみはた

なひかん日のみ待ち渡るかな

鎌 田 正 夫

かねのあみ幾重はるとも深きほり

いくへはるとも今におとさん

滋 野 井 實 麗

こゝをせとふせきたゝかふ仇人の

みちどのおちん時ちかつきぬ

中 澤 重 業

ますらをか身をも沈めて鎖しつる

みなとも今か御手に入るらん

尾 崎 実 夫

仇こもるみなととりうへき時つ風

待ちこそ渡れ今日か明日かと

長利清平

頼みにし仇のとりての落ちん日を

待ちこそわたれ朝なゆふなに

沖禎介君を悼む (本會兼題抄)

伯爵 東久世通禧

日の本のますらたけをのあらみ魂

天かけりてもあたをうたなん

侯爵 鍋島直大

こゝろさし貫ぬかぬまに仇の手に

身をはたしつるこゝろ悲しも

侯爵夫人 鍋島榮子

いかばかり悔しかりけん仇の手に

かゝる恨みをきみははらさて

男爵 渡邊清

いつはりはやまと心のまことそと

たふれし君のいさきよきかな

子爵 竹屋光昭

潔きよき名のみ残して西比利亞の

つゆと消えにし君をしそ思ふ

子爵 水野忠敬

からくにゝとほくふみ入りて仇浪に

碎かれしこそくやしかりけれ

文學博士 木村正辭

いさましやすてし命は日のもとの

國のみためそきみかみためそ

阪正臣

ものふにあらぬ身にして武夫に

勝るいさをたてんとやせし

丸山正彦

國の爲あたのをつゝにうたれけむ

恨みはらさてやまんものかは

宮地嚴夫

身をすてゝ國の爲にと西比利亞の

奥までふかくおもひ入りけむ

中村秋香

世に残る香こそ高けれあたしの

草の葉かくれちりしそのはな

陸軍歩兵少佐

平井直

よしや身に苔はむすともこの君の

赤きこゝろは世々にくちせし

井上頼圀

國の爲こゝろつくしのおきのふね

思はぬかたにはてにけるかな

大道寺繁頼

北支那の草葉のつゆときえしかど

きえぬその名は世に薫りけり

島津久實

からころもつゝみかねけん國の爲

もゆるか如きやまどこゝろは

鍋島禎子

仇し野の露とその身は消えぬれど

いさをそ残るよろつよまてに

鍋島茂子

あな悔しおもひも遂けず敵の手に

露と消えにしきみか身のうへ

鍋島信子

仇の手に君ははかなくたふれても

大和こゝろはあらはれにけり

大口鯛二

人知れすこゝろつくしの沖のいし

くたけてそ世に顯はれにける

千葉胤明

西比利亞の野末の露のおきふしに

くたさしこゝろ思ひこそやれ

黒川眞道

いのちはも仇の火筒に消えぬれど

きえぬいさをは世にひゞき鳧

遠山英一

わたつみのふかき心はありなから

泡ときえにしことそくやしき

加藤義清

仇をこそおとろかしけれ今さらに

さふへきことのなしと答へて

雨 森 巖

君か名は世々に残らんあつさゆみ

はるひんの野の露と消えても

井 原 豊 作

わたつみの深き重荷を負ひながら

なとくたけ、む沖のまたまは

山 川 佐 代 子

とこしへに世に社薫れ西比利亞の

芝生かくれにさきしそのはな

片 山 幾 子

仇浪にくたけなからもおきの名の

動かさりけんこゝろをしき

村 井 兼 子

一筋にくにをおもひてあたしの

露とはあられ消えにけるかな

宮 崎 奈 美 子

外國のつゆと消えにしこのきみの

いさをはたかく世に残るらん

江 崎 權 一

哈爾賓の雪にそゞきしきみか血は

わかくにたみのいのち也けり

大 矢 忠 衡

西比利亞の荒野の風に散らさらは

大和こゝろの實もむすはんを

稻垣重一

哈爾賓の土となりてもものゝふの

猛きその名は世にきこえけり

宮澤政恕

仇草のつゆときえてもまこゝろの

ひかりを國にのこしけるかな

綿引謙

日の本にやかてにははん花をしも

はかなくちらす春の夜あらし

平井文太郎

かくはしき名のみ残して哈爾賓の

雪とはかなくきえしきみかな

坂倉仁五郎

真心をあつさのゆみにはるひんの

露とちりにしますらをあはれ

和合庄吉

國の爲あたのかなちをたゝんとて

齊々哈爾近く入りしきみかな

山口道賀

一人にてちよろつの仇とゝめなん

君まかねちをたちなましかは

廣瀬正種

大國のみねに消えにしものゝふの

大國の心算みたまは守れ西此利亞のはら

土田道

喇嘛僧のころもに身をは包みても

一人ごころもやまとこころはあらはれに鳧

●沙河の會戰

十月十五日大本營着電

去る十日以來今十四日に至る數日間の連続せる戦闘に於て各方面共盡く優勢なる敵を撃破して勇猛果敢なる追撃を加へ之を渾河の左岸に逼し以て彼に多大の損害を與へ且つ三十有余門の野戦砲を奪取し數百の捕虜を得全然彼の企圖を挫折し其攻勢運動を根底より失敗に終らしむるを得たり各所に遺棄せし敵の死體は多數にして容易に計上するに至らず敵の損害其他共目下交戦中にして詳細に知るを得ざるも其數少くも三萬以上に達せしならむ又鹵獲品は前記三十余門の外彈藥車小銃等莫大にして數ふるに暇あらず

沙河對戰中月を見て

陸軍騎兵中尉 白木弦弓

矢たけひのたゆるまもなき戦ひの

にはにふさはしゆみはりの月

沙河にて雁をさゝて

陸軍歩兵一等卒

山井久太郎

こゝろあらは一こともかな故郷に

このありさまをつけよ雁かね

沙河會戰

星川清民

みなさりて逆まさよせしあた波も

ちりてくたけぬ沙河の岸邊に

勝ちいくさ

平倉屹子

幾ちたひさこえあけゝん勇ましき

みいくさ人のかちとさのこゑ

戦死者を吊ふ

歩兵伍長

山田

辨

御國もる楯となりけるものゝふの

潔きよき名は千代よろつ代に

親戚松田貞次君黒溝臺にて名譽の戦

死を遂けられしをさゝて

渡邊甚吉

ためしなき軍にいて、ほまれある

名を残しつゝきみうせにけん

従軍雜詠

三村清三郎

天の川きたにあかれてまもりやの

ともし火くらし夜やふけぬ覽

某より防寒具を送られたるに答へて

陸軍少將

藤井茂太

よもすから岩もる身にふるゆきも

君かなさけに消えうせやせむ

諸人のまこゝろこめしきぬきては

ふゝくあられの雪もいとほし

寒夜思軍人

本間 三千 矛

さゆる夜の氷もゆきもものゝふの

ふみしたくらんもろこしの原

陣中にて忠烈歌集をよみて

陸軍歩兵軍曹

福井 恬

はらからの言葉の花をたゝかひの

にはに見るこそ嬉しかりけれ

衆議院より陸海軍傷病者へ贈る慰問

の手拭にそへて

衆議院議長

松田 正久

國の爲いたて負ふまでたゝかひし

ますら武雄そたふせかりける

慰問袋の裏にかきし歌 長谷場 純孝

さくさ神まもれやまもれ日の本の

御旗のしたにすゝむますらを

慰問袋を手にして

陸軍歩兵大尉

猪谷 不美男

嬉しさを何につゝまんからころも

短かきそてもやれ果てし身は

毛布の寄贈を受けて 上野 廣五郎

もろこしのゆきも氷もとけぬらむ

よするうからの厚きこゝろに

恤兵品の扇面の赤色特に麗しきに旭

日を書きたるに題して

陸軍中將 淺田 信 興

みいくさをねきらうひとの眞心を

うつすともみゆ朝日子のかけ

故郷なる人のもとに

陸軍砲兵中佐 大友 毅

東風さむきえみしか浦の夕まくれ

おもひ出にけり古さどのはな

新城といふ處を三回通過せしも何の

風趣もなければ

陸軍歩兵中尉 新田 勝 寛

いつみても更にかはりはなかり梟

やれしたかかへかたふける軒

故郷の友のもとに満州のすみれの花

を贈るついでによみてそへたる

陸軍砲兵少尉 曾 我 年 雄

ひつめまで香るはかりのすみれ草

ゆかしきるかも君にみせはや

戦死者の遺族に送るとて

服部 元 子

我こそく同しなみたにむせふらん

君のこゝろをおもひこそやれ
征露の折から亡夫の事ともおもひ
出て、

世にまさは又此の度もいさましく

み國のためにつくしまさんを
戦地にある友人に送る書信のはしに

村瀬由太郎

はるかなる北の空をはあふきつゝ

君やいかにとたよりまちわふ

征人を思ふ 山本恒右衛門

みいくさの庭にすゝみしわか友の

たよりいかにと待ぬ日そなき

出征者を送る 奈良慶子

萬よのこゑにおくられよろつよの

こゑに歸りませ仇をくたきて

東郷大將の入京を祝ひて

原六郎

たくひあきいさを荷ひて飯られし

君にあふこそうれしかりけれ

聖恩に感して 陸軍二等
看護長 佐藤興三郎

玉の緒のたへぬ限りは身をすてゝ

大みこゝろにむくいさらめや

●旅順開城

一月一日夜大本營着

本日午後九時關東要塞地區司令官ステツセル將軍より開城に關する書面を受領せり

二日午後七時大本營着

彼我全權委員は本日午後四時卅五分を以て其談判を終れり彼は大體に於て我提出せる條件の下に開城を約し目下調印中なり
右談判結了と同時に兩軍の戰鬪行爲を停止したり

二日夜半大本營着

二日午後九時四十五分兩全權委員間に於て開城規約の本調印を終れり

旅順開城の報を聞きて

男爵 高崎正風

攻めかたく落ちすと誇りし城戸口を

ひらくはやかてとつるあり鳧

男爵 千家尊福

あたはらふみはたの風の末はれて

空にもくもはのこらさりけり

男爵 石河光熙

動かしといひけむ仇のとりてすら

みいつの風になひく今日かな

柳原愛子

あらたまの年のはしめに響くなり

わか御いくさのかちどきの聲

阪正臣

あらたまの年の初日のひむかしに

君のこゝろをおもひこそやれ

征露の折から亡夫の事もおもひ

出て、

世にまさは又此の度もいさましく

み國のためにつくしまさんを

戦地にある友人に送る書信のはしに

村瀬由太郎

はるかなる北の空をはあふきつゝ

君やいかにとたよりまぢわふ

征人を思ふ 山本恒右衛門

みいくさの庭にすゝみしわか友の

たよりいかにと待ぬ日そなき

出征者を送る 奈良慶子

萬よのこゑにおくられよろつよの

こゑに歸りませ仇をくたきて

東郷大將の入京を祝ひて

原六郎

たくひあきいさを荷ひて飯られし

君にあふこそうれしかりけれ

聖恩に感して 陸軍二等 看護長 佐藤與三郎

玉の緒のたへぬ限りは身をすてゝ

大みこゝろにむくいさらめや

●旅順開城

一月一日夜大本營着

本日午後九時關東要塞地區司令官ステツセル將軍より開城に關する書面を受領せり

二日午後七時大本營着

彼我全權委員は本日午後四時卅五分を以て其談判を終れり彼は大體に於て我提出せる條件の下に開城を約し目下調印中なり
右談判結了と同時に兩軍の戰鬪行爲を停止したり

二日夜半大本營着

二日午後九時四十五分兩全權委員間に於て開城規約の本調印を終れり

旅順開城の報を聞きて

男爵 高崎正風

攻めかたく落ちすと誇りし城戸口を

ひらくはやかてとつるあり鳧

男爵 千家尊福

あたらふみはたの風の末はれて

空にもくもはのこらさりけり

男爵 石河光熙

動かしといひけむ仇のとりてすら

みいつの風になひく今日かな

柳原愛子

あられたまの年のはしめに響くなり

わか御いくさのかちどきの聲

阪正臣

あられたまの年の初日のひむかしに

のほれはくたるきた山のあた

鎌田正夫

うちまけて降りし仇もみめくみの

浪をかへちてかへりゆくらん

大口鯛二

膽をなめたきゝに臥しゝ國たみの

十年のうらみけふそはれぬる

千葉胤明

膽をなめたきゝに臥して晴さんと

思ひしうらみやゝはれにけり

遠山英一

かくはかり嬉しきことはなかり梟

としのはしめの勝ときのことゑ

加藤義清

誰もみな年のほきことあとにして

先つこそいはへこの勝いくさ

今井萬之丞

十年あまり心をこめしとりてさへ

今はみくにのものとなりけり

加藤六藏

くにたみの一日千秋とまちわひし

城をおちけるとしのはしめに

宇井可道

うては碎き攻むればとりて仇の守る

とりても船も御手におちけり

太田操子

たてなへし砲臺もおちて勝どきの

聲いさましくなりひくかき

丸木光子

十年あまりおほひし雲を吹散らし

天てるひかりあふく今日かな

中西小三郎

仇はみなとりて渡してまつろひぬ

比ひもあらぬすめらいくさに

篠原政禎

皇軍にふねもとりてもくたかれて

あはれしるをも明わたしけん

佐々木 嶠

海も山もちからやつきて降りけむ

わかおほきみの高き御稜威に

飯田新五郎

きのふまで仇せし敵もはた伏せて

くたると聞けばあはれなり梟

高橋光容

難かりし仇のみなどのおちにきと

きゝて祝はぬひとやなからん

豫備病院にありて旅順陥落を聞きて

陸軍少將 中村 覺

からとさの聲勇ましくあけつらむ

攻めおとしたる城山のうへに

おのれが率ゐし旅團の占領せる砲臺

に畏くも一戸砲臺の名を命し給ひけ

れば 陸軍少將 一 戸 兵 衛

おは君の名つけ給ひしとりてこそ

生ひ立つ國のもどゐなるらめ

乃木大將を思ふ 千 葉 胤 明

兩人まで子を先たてしくやしさも

うらみもけふは忘れはつらん

乃木大將 三 橋 中 雄

よろつ世も稱へさらめや松の樹の

やまよりたかき君かみいつは

乃木ステセル兩將會見 大 口 鯛 二

にしひかしならふとりての相撲草

かつもまくるも花ならぬかは

遠 山 英 一

くつろきて語るをみれば昨日まで

あたなりしとも思はれぬかな

深 瀬 眞 一

國の爲つくすたかひのまこゝろは

仇もみかたもかはらさりけり

ステツセル將軍の宣誓して歸

國すときゝて 星 川 清 民

いたつらに人を殺してともをさへ

すてゝ飯るをはまれとやする

ステツセル將軍

神代

猛

あはれわかいくさの門に降り來し

こゝろはいかに悔しかりけむ

野邊 左右吉郎

とくゆきて國王につけよ日のもとは

仇となすへきくにゝあらすと

ステツセル將軍夫妻を

山 領利 貞

いもとせの君に盡しゝまこゝろは

國つみかみもうけたまふらし

一月一日沙河の陣中にて

陸軍大將伯爵

野 津 道 貫

秋津洲の國やすかれともろひとの

のはる朝日をいはふ今日かな

陸軍中將

大 久 保 春 野

大御稜威かゝやく御代に生れ來て

君のみたてとなるそうれしき

陸軍中將

木 越 安 綱

仇をなす露はらみつゝみつくにの

山もうれしくとしむかふらん

陸軍少將

上 原 勇 作

御國ふり西比利亞近くまつたてゝ

君かよはひをいはふ今日かな

元旦雜詠の中に

陸軍工兵大佐

二宮五十槻

あたもまたわか大君のにひとしを

祝ひやすらんつゝの音をすする

陣中新年

一志省三

いくさ人野こえ山こえとしこえて

いつこの里にはつ日見るらむ

軍國新年

北條辨旭

かちいくさつゝ祝ひに日の旗を

おろすまもなく年立ちにけり

陣中雜詠の中に

陸軍大將男爵

乃木希典

うたひとは何と詠むらん旅順なる

こかねしろかねくろかねの山

二百三高地占領

鎌田正夫

砲もあれどつるきもあれと拔難き

山をぬきしはやまとたましひ

旅順開城のをり二龍山に

まかりて

大倉喜八郎

物凄き修羅のちまたのあと見れば

悲喜こもくくに袖そぬれける

折にふれて

中川静

勝ちいくさしらせの文を配るへく

賣り歩くこゑのいさましきかな

●奉天占領

三月十日午後大本營着電

今日午前十時奉天を占領せり數日來の包圍攻撃は全く其目的を達し
今や奉天附近各所にて非常の激戦中にして捕虜並に兵器彈藥糧秣等諸
軍需品の鹵獲極めて多大なるも未だ此調査に遑あらず

●撫順占領

三月十日午後大本營着電

興京方面の我一部隊は昨夜撫順を占領し目下同地北方高地端を占領せ
る敵を攻撃中なり

●鐵嶺占領

三月十六日午前大本營着電

我先進部隊は到る處敵を急追し今十六日午前零時二十分鐵嶺を占領せ
り

奉天附近の大捷を聞きて

男爵 千家尊福

崩出てん根さしなきまで亂れ芦の

みたれにけりな仇のいくさは

長谷場純孝

昔よりたくひもあらぬかちいくさ

五十鈴の神のたすけなるらむ

山田魁太郎

こゝろよく落としけるかな北支那の

みやことたのむわたのおは城

黒田政吉

山のことつみし獲ものは益荒雄か

いのちにかへし功績なりけり

佐々木松老

奉天をせめおとしたるみいくさは

やかてしめあん哈爾賓までも

松岡多吉

みいくさのいとも烈しき砲さきに

山なすものはかはねなりけり

小池竹三郎

天地もゆるくはかりにますらをの

かちとき祝ふこゑそいさまし

星川清民

疾き風の吹くまゝなして攻取りし

わかみいくさの猛くもある哉

鐵嶺占領

男爵 千家尊福

黒かねの峰のいはかねふみくたき

今やあくらんかちときのことゑ

長谷場純孝

國をわけてたちし心のひとうちに

鐵のみねをもふみくたきけん

石原正誓

くろかねのみねの砦もひとうちに

うちやふりけり日本たけをは

雪中にて負傷しける時

陸軍少將 今橋知勝

白妙のゆきは血しほにそめつれど

赤きこゝろは見るよしもなし

萬寶山の南方にて負傷しければ

戯ふれに

たゝひとつ玉をひろひてかへる哉

よろつたからの山は見なから

次女さち子が陣中によせし歌の

返しに

陸軍歩兵大佐

安

村

範

雄

夕暮はつねにもものうきたひこゝろ

軒端のはともこゝろしてなけ

砂蛇子占領

陸軍歩兵大尉

相

田

慮

平太

しこくさのはひこりたりしこの砦

かりつくしたる今日の嬉しさ

常宮周宮兩内親王殿下小田原にて催

しける奉天撫順占領を祝する提灯行

列を御覽ありける時 片岡 永左衛門

うれしくも今か雲井にひゝくらん

みいくさ祝ふよろつ代のこゑ

滿洲軍へ寄贈扇子に記したる歌

侯爵

細

川

護

成

みいつさへかよふ扇の風にあひて

きりもはれゆく西比利亞の原

侯爵夫人

細

川

孝

子

名をあけてかへりきませと咲匂ふ

花をあふきにたゝみてそやる

子爵 長岡護美

あたくたく皇軍ひこのいさをしを

あふきておくる秋つしまかせ

畏き邊りより侍従武官長を特派せら

れ優渥なる御沙汰を傳へられ御菓子

烟草を下賜はりたる旨西大將より傳

達に接し感激のあまり 日野恒次郎

妻子にはぬらさぬ袖もおほきみの

めくみのつゆにしほる今日哉

ある夜歪頭山を守備しける折敵陣の

篝火を見て 陸軍歩兵中尉 川上精一

仇のたくかゝりのけふり數まして

こゝろにかゝるあかつきの空

恩賜巻烟草を拜受しける時

陸軍二等看護長 佐藤與三郎

大君のあつきめくみのたまものに

家をも身をもわすれけるかな

軍醫 釋義端

一人して一日に千々の疵をあらふ

くすしの手にや神かよふらむ

輜重輸卒 岸本和平

馬をひさくるまおすとも國のため

つくすまことは天晴なりけり

捕虜 鎌田正夫

みめくみのたかしの濱の松かせは

くたりし仇もすみよかるらん

山口重樹

とらはれの身をも忘れてこの春は

大和しまねのはなを見るかな

渡部敏謙

太刀風にまつるひふして果なくも

つゆの玉の緒つあくしこくさ

植田建教

なつかしき汝か故郷もわするらん

いたりつくせる國のあさけに

捕虜收容 神代猛

人皆のやまところをなさけにて

捕はれし身を知らすかはなる

敵屍 遠山英一

屍もてやまきつくまてなりにけり

やふれてにけし仇のとりては

電信隊 加藤義清

ますらをは夜を日に繼て仇し野に

かけめぐりけりはりかねの糸

無線電信 前島温倫

おきつなみ立へたてたる陸どふね

思ふまに〜問ひつこたへつ

軍人遺族 子爵夫人 本多芳子

よそなからきゝてもかなしみ軍に

うち死しつゝひとのつま子等

軍人遺子

佐藤 壽雄

大君の御たてとなりて亡きちゝの

かへるをまつそあはれ也ける

靖國神社臨時大祭

侯爵 鍋島 直大

たゝかひにたふれて名譽のこし是

いくさ神ともまつらるゝ身は

侯爵夫人 鍋島 榮子

みいくさの勝そいよく續くへき

今日まつらるゝ神もまつりて

子爵 長岡 護美

身をすてし益荒武夫を今日まつる

たまこそ國のひかりありけれ

男爵 千家 尊福

國の爲たふれてやまぬものゝふは

神とありても御代まもるらむ

男爵夫人 九條 茂子

かしこくもまつりたまへり國の爲

たふれし人のたまなればこそ

鍋島 俊子

君か爲いのちさゝけしものゝふを

神とまつらす今日のうれしさ

大 口 綱 二

神とこそ世に仰かるれものゝふの

いのちにかへてたてし勳功は

千 葉 胤 明

たましひは今日還るらむ骨はかり

さきにかへりし友もうからも

伊 達 正 子

かしこしや車ひきにしまつの身も

このみまつりの數に入りつゝ

兵 動 ほ さ 子

かしこかる祝祠の聲につちのした

海のそこにも音にやあくらん

富 田 邦 彦

とこしへに名も香はしく残るらん

いさをゝたてし君かほまれは

征露軍に参加して戦死しける人々の

忠魂を靖國神社に合祀し玉ひし日參

拜して 男 爵 高 崎 正 風

戦ひに死ぬへきものと今日を知る

わかしきしまの大和たけをは

靖國神社臨時大祭をつかうまつりて

靖國神社宮司 賀 茂 水 穂

天皇のみことかゝふりみたまら

神にまつるそかしこかりける

をりにふれて 陸軍少將 中岡 黙

あたはらふことに心のいそがれて

ことしの春はあたにすこしつ

鎌田 正夫

雨の夜もつれづれならず勇ましき

いくさの書をみつゝふかせは

中田 慈苑

天の下ひゝかぬくにやなかるらん

すめみいくさの大つゝのおと

奈良 慶子

花はゑみ鳥はうたへとこのはるは

のとけき野へにゆく人もなし

櫻井 喜一郎

大御手にふたゝひ入てもろこしの

山かはいかにうれしかるらん

松原 錦吾

村からす泣かぬ日はあれと御軍の

ことを思はぬときなかりけり

陣中にてくちすさめる

陸軍少將 仁田 原重行

みそれふる荒野のみちは人たえて

砲おとどほく日はくれにけり

戦場なる甥のもとに 武本 愛子

夜半の雪あしたの嵐をりにつけて

君かうへのみかたりあひつゝ

孫なる歩兵中尉岡原寛に送る消息に

佐々木松老

あつさゆみひきな返しそ北支那の

野邊のしこくさ刈り盡すまで

出征中の弟に 鈴 木 藤 作

大君にあたなすあたをうちとりて

家つとにせよわれはまつなり

三男孝作か騎兵に合格せしかは喜ひ

のあまり太刀一振をあたへて其入營

をおくる折に 白 石 孝 忠

心をはつるさどゝもにみかきなは

光りは千代もくにをてらさん

我子出征の途次門司よりおこせたる

文を見て 曾 我 徳 丸

波のうへつゝかなかれと祈るまに

うれしきもしのふみを見る哉

弟と共に従軍しける時 角 田 常 次 郎

かちときをあけて飯らは二人して

父にかたらんはゝにかたらん

戦死者の弔日々に續きければ

石 澤 寛 助

老の身の常とは知れどこのころは

なみたもろくも成にけるかな

數回の戦に疲勞をかさねて病死せる軍人は砲火に死したるよりも中々に功のまされるよしを聞て病死せる軍人の棺前に手向ける

男爵金子有卿

たゝかひに身を盡したる勳をしは

疵もやまひもかはらさりけり

戦地なる夫の許に櫻花一輪を送るとて

古川義子

春のきて花のさかりにかりにけり

君はいつこにいまおはすらん

●日本海大戦闘報告

廿八年六月十四日東郷聯合艦隊司令長官報告

天祐と神助に因り我聯合艦隊は五月廿七八日敵の第二、第三艦隊と日本海に戦ふて遂に殆んど之を撃滅するこゝを得たり始め敵艦隊の南洋に出現するや上命に基き當隊は豫め之を近海に迎撃するの計畫を定め朝鮮海峡に全力を集中して徐に敵の北上を待ちしが敵は一時安南沿岸に寄泊したるの後漸次北行し來りしを以て其我近海に到達すべき數日前より豫定の如く數隻の哨艦を南方警戒線に配備し各戦列部隊は一切の戦備を整へ直に出動し得る姿勢を保持して各其根據地に泊在せり果然廿七日午前五時に至り南方哨艦の一隻信濃丸の無線電信は敵艦隊二〇三地點に見ゆ敵は東水道に向ふ者の如しと警報し全軍勇躍直に發動し各部隊は豫定の部署に準して對敵行動を開始せり午前七時内方警戒線の左翼哨艦たりし和泉亦敵艦隊を發見して敵既に宇久島の北西二十五海里の地點に達し北東に航進するを報じ巡洋艦隊(片岡中將直率)東郷(正路

戰隊續て出羽戰隊も午前十時十一時の交壹岐對馬の間に於て敵と接觸し爾後沖の島附近に至るまで此等の諸隊は時々敵の砲撃を受けしも終始能く之と觸接を保持し詳に時々刻々の敵情を電報せしかば此日海上濛氣深く展望五海里以外に及ばざりしも數十海里を隔つる敵影恰も眼界に映するが如く未だ敵を見ざる前既に敵の戰列部隊は其第二、第三艦隊の全力にして特務艦船約七隻を伴ふこと敵の陣形は二列縱陣にして其主力は右翼列の先頭に占位し特務艦船は後尾に續行せること又敵の速力は約十二節にして尙ほ北東に航進せること等を知り本職は之れに依り我主力を以て午後二時頃沖ノ島附近に敵を迎へ先づ其左翼列先頭より撃破せんことを心算を立るを得たり主力隊(主戰隊)東郷大將直率(裝甲巡洋艦隊)上村中將直率(瓜生戰隊及び各驅逐隊)は正午頃既に沖ノ島北方約十海里に達し敵の左側に出んが爲め更に西方に針路を執りしが午後一時卅分頃出羽戰隊巡洋艦隊及東郷(正路)戰隊等も敵と觸接を保ちつゝ相前後して漸次に來り合し同時四十五分に至り正に我左舷南方數海

里に於て敵影を發見せり敵は豫期の如く其右翼列の先頭にボロヂノ型戰艦四隻の主力戰隊を置きナスラヒヤ。シソイベリキ。ナワリン。ナヒモフより成る一隊左翼列の先頭に占位しニコライ一世外海防艦三隻より成る一隊之に次ぎゼムチューク。イズムルードの二艦は兩列の間に介立して前方を警戒せるものゝ如く尙其後方濛氣の中にオレグ。アウロラ以下二三等巡洋艦の一隊ドミトリ。ドンスコイ。ウラジミル。モノマフ其他特務艦船等數渾に亘て連綿航進するを仄に認るを得たり是に於て全軍に戰鬪開始を令し同時五十五分視界内に在る我全艦隊に對し皇國の興廢此の一戰に在り各員一層奮勵努力せよの信號を掲揚せり而して主戰艦隊は少時南西に向首し敵と反航通過するを見せしが午後二時五分急に東に折れ其正面を變じて斜に敵の先頭を壓迫し裝甲巡洋艦隊も續航して其後に連り出羽戰隊、瓜生戰隊、巡洋艦隊及び東郷(正路)戰隊は豫定戰策に準し孰れも南下して敵の後尾を衝けり之を當日戰鬪開始の際に於ける彼我の對勢とす

主力隊の戦況

敵の先頭部隊は主戦艦隊の壓迫を受けて稍其右舷に轉舵し午後二時八分彼より砲火を開始せしが我は暫く之に耐て射距離六千米突に入るに及び猛烈に敵の兩先頭艦に砲火を集中せり敵は之が爲め益々東南に撃壓せらるるものゝ如く其の左右兩列共に漸次東方に變針し自然に不規則なる單縱陣を形成して我れと並行の姿勢を執り其の左翼列の先頭艦たりしオスラピヤの如きは須臾にして撃破せられ大火災を起し戦列より脱せり此時に當り装甲巡洋艦隊も既に盡く主戦艦隊の後方に列し我全隊の掩撃砲火は射距離の短縮と共に益々顯著なる効果を呈し敵の旗艦クニヤーシスワロフ二番艦皇帝アレキサンドル三世も大火災に罹り戦列を離れ敵の陣形愈々亂れ後續の諸艦亦火災に罹れるもの多く其騰煙西風に襲きて忽ち海上一面を蔽ひ濛氣と共に全く敵影を包み主戦艦隊の如きは爲に一時射撃を中止せるの状況なり又我軍に於ても各艦多

少の損害を蒙り淺間の如きは後部水線に近く三弾を受けて舵機を損じ且つ浸水甚だしく一時止むを得ず列外に落伍せしが幾もなく應急修理して再び戦列に入れり之れ午後二時四十五分前後に於ける彼我主力の戦況にして勝敗は既に此間に決せり我主力隊は如此敵を南方に撃壓し煙霧の中敵影を發見する毎に緩徐に之を砲撃しつゝ午後三時頃には既に敵の前路に出て約南東に向針しありしが敵は俄に北方に向首し我後尾を回ばりて北走せんとするが如きを以て主戦艦隊は急に左十六點に一齊回頭し日進を嚮導として北西に向ひ装甲巡洋艦隊も其通跡を過ぎたる後正面を變して之に續ぎ再び敵を南方に撃壓し之を猛射し午後三時七分敵艦セムチエーグは装甲巡洋艦隊の後方に突進し來りしも遂に我砲火に因り多大の損害を蒙り既に戦闘力を失ひたるオスラピヤも同時十分に沈没し孤立せしクニヤーシスワロフは益々大破して其一樁二煙突を失ひ全艦隊煙燭に包まれて操縦する能はず混亂せる爾餘の諸艦隊も更に多大の損害を受けつゝ又其針路を東方に採れり是に於て主戦

艦隊も亦一齊に右十六點に回頭し裝甲巡洋艦隊之に次ぎ遁るを追て益
 敵敵を掩撃し時々機を見て水雷發射をも試み午後四時四十五分頃に至
 る迄主隊の戦鬪に就ては別に著しき現象無く始終敵を南方に壓して砲
 撃を繼續したるに過す此間壯烈の事績として特記すべきは千早及廣瀬
 (順太郎)驅逐隊が午後三時四十分の頃鈴木(貫太郎)驅逐隊が午後四時四十
 五分の頃敵の廢艦スワロフに對し勇敢なる水雷攻撃を決行したること
 にて前者の奏効は確實ならざりしも後者より發せし一水雷に敵艦の左
 舷後部に命中し須臾にして艦體十度計り傾斜するを見たり此の兩回の
 襲撃中廣瀬驅逐隊の不知火及び鈴木驅逐隊の朝潮は附近敵艦より猛射
 せられ共に一彈を受けて一時危殆に陥りしも幸にして遂に無事なるこ
 とを得たり午後四時四十分の頃に至り敵は北方に血路を開くを斷念せ
 しにや漸次南方に向つて遁走するものゝ如く依て我主隊は裝甲巡洋艦
 隊を先頭として追撃せしが少時にして遂に敵影を煙霧の中に失し南下
 すること約八海里行くゝ我右方に離散彷徨せる敵の二等巡洋艦以下

特務艦船を緩射し午後五時三十分主戦艦隊は再び針路を北方に執りて
 敵の主力を索め裝甲巡洋艦隊は南西方に折れて敵の巡洋艦に迫り爾後
 日没に至るまで此兩戦隊は分離して各別の行動を執り又相見る能はざ
 りし

主戦艦隊は午後五時四十分頃左方近距離に在りし敵の特務艦ウラルに
 一撃を加へて直に之を撃沈し尙ほ北方に索敵し進行せる際左舷艦首に
 當り敵主力の殘艦約六隻の一群が北東に向ひ遁走しつゝあるを發見し
 直ちに近づきて之れと並行戦を開始し漸次敵の前方に出で、其先頭を
 撃壓せしかば敵は初め北東の進路を探りしも次第に西方に屈折し遂に
 は北西に向針するに至れり此並行戦は午後六時より日没迄連續し敵は
 大破の餘其砲力減少せるに反し我沈著なる射撃は益々其威力を逞ふし
 アレキサンドル三世と見へたる敵艦は早く列外に出で、後方に落伍し
 先頭に占位せしボロヂノ型戦艦は午後六時四十分頃より大火災を起し
 七時二十三分に至り俄然爆煙に包まれて瞬時に沈没せり蓋し火災の彈

藥庫に及びしならんか又當時南方に在て敵の巡洋艦隊を北方に追撃しつゝありし裝甲巡洋艦隊の諸艦は己に傾斜して進退自由ならざるボロザノ型戦艦一隻が午後七時七分敵艦ナヒモフの側に來り遂に顛覆沈没せるを目撃せり後日捕虜の言に依り之れ即ちアレキサンドル三世にして主戦艦隊の見たるものはボロザノなりしを知るを得たり

此時夕陽已に暮き我が驅逐隊水雷艇隊は東南北の三面より漸次に敵に迫り己に襲撃準備の姿勢を執れるを以て主戦艦隊は次第に敵に對する壓迫を弛めて日没(午後七時二十八分)と共に東方に變針し同時に本職は龍田をして全軍北行して明朝蔚陸島に集合すべしと傳令せしめ茲に當日の晝戰を結了せり

出羽、瓜生戦隊、巡洋艦隊 及東郷(正路)戦隊の戦況

午後二時戦闘開始の令下に出羽、瓜生戦隊、巡洋艦隊及東郷戦隊は何れも

我主力艦隊と分離し敵を左舷に見て反航南下し豫定戦策に準じて敵の後尾に占位せる特務部隊及びオレグ、アウロラ、スウイートラナ、アルマーズ、ドミトリ、ドンスコイ、ウラジミル、モノマフ等の巡洋艦隊を脅威追撃せり出羽、瓜生戦隊は終始共同連繫して午後二時四十五分より先づ敵の巡洋艦隊に對して反航戰を開始し漸次敵の後尾を旋撃して其右方に出で更に並航戰を試み爾後優速力を利用し機宜我正面を變じて或は敵の左に顯はれ又は其右に廻はり攻撃を持續すること約三十分にして敵の後方部隊は漸次に動搖潰亂し其特務艦船の如きは遂に左往右往して爲す所を知らざるの情態に陥れり此間午後三時過ぐるの頃アウロラと見えたる敵艦單獨敵中より突進し來りしも我が猛射に多大の損害を負ふて撃退せられ又午後三時四十分頃突撃し來りたる敵の驅逐艦三隻も爲す所なくして撃攘せられたり

出羽、瓜生戦隊協力攻撃の効果は午後四時の交に及んで著しく發展し敵の後方部隊は全く潰亂して個々分裂し其諸艦船皆多少の損害を受けた

るもの、如く特務艦船中には既に操縦の自在を缺くものあるを見るに
至れり

瓜生戦隊は午後四時二十分頃三橋二煙突を有する敵の特務艦船一隻(或は「アナジール」ならん)が一方に孤立するを認め直に近きて之を撃沈し尋で四橋一煙突の特務艦船(或は「イルナツシユ」ならん)を猛射して殆んど之を撃破せり此頃より巡洋艦隊、東郷戦隊も來り加はり出羽、瓜生戦隊と協同して共に潰亂せる敵の巡洋艦及特務艦船を掩撃しつゝありしが午後四時四十分の比北方より我が主隊に撃壓せられたる敵の戦艦(或は海防艦)四隻南下し來りて其巡洋艦に合力せしかば瓜生戦隊巡洋艦隊の如きは少時近距離に於て之と對戦するの苦境に陥り孰も多少の損害を受けしも幸に大ならざることを得たり

是より先き出羽戦隊の旗艦笠置は其左舷炭庫水線下に一彈を蒙りしが爾來浸水漸く増加し其應急修理の爲波靜かなる所に行くの止むを得ざるに至り出羽司令官は自ら笠置、千歳を率ひ麾下の他艦は之を一時瓜生司令官の指揮下に屬せしめ午後六時油谷灣に赴き其將旗を千歳に移し夜に入りて出港北行せしも笠置は修理に時間を要し遂に翌日の追撃に参加する能はざりし

又瓜生戦隊の旗艦浪速も後部水線に敵彈を蒙り爲めに午後五時十分頃同戦隊は一時避戦して其損所の應急修理を爲せり
此時に當り敵は南北兩方面共に既に全軍潰亂滅裂の悲境に在りしを以て午後五時三十分の比装甲巡洋艦隊が我主隊と分離して此の方面に來り南方より敵の巡洋艦を迫撃すると同時に敵は群を爲して悉く北方に遁走し瓜生戦隊、巡洋艦隊及東郷戦隊も共に之を追撃せしが其途上に於て既に進退の自由を失せる敵の敗艦クニヤーシ、スワロフ及工作船カムチャトカを發見し巡洋艦隊、東郷戦隊は直に其撃滅に轉じて午後七時十分カムチャトカを撃沈し尋で巡洋艦隊に隨伴せる富士木水雷艇隊は突進してクニヤーシ、スワロフを襲撃し同艦は尙艦尾の小砲一門を以て最終の抵抗を試みしも遂に我が水雷二發の下に沈没せり時に午後七時廿

分なり議もなく此等の諸戦隊は壽陵島集合の電令に接し何れも戦を止て北東に向針せり

各驅逐隊及水雷艇隊の戦況

二十七日の夜戦は晝戦の終結後直に各驅逐隊及水雷艇隊に依り猛烈果敢に開始せられたり

此日朝來南西の強風浪を揚ぐるこゝ高く小艇は操縦大に困難なるを認め本職が直率せし水雷艇隊の如きは晝戦開始に先だち盡く三浦灣に避泊せし程にて夕刻に至りて風較く和ぎしも浪尙ほ静らず洋中の水雷攻撃は我れに不利尠からざるの状況なりし然かも各驅逐隊及艇隊は此一遇の時機を失するを恐れ皆風濤を冒して日没前に來り會し各々先を爭ふて敵に當り藤本驅逐隊は北方より矢島驅逐隊及河瀬艇隊は北東方向より敵主力の先頭を壓し吉島驅逐隊は東方より廣瀬(順太郎)驅逐隊は南東より其後尾に迫り福田(昌輝)大瀧、近藤(常松)青山、河田の艇隊等は南方よ

り敵の主力部隊及其左後に併行せる巡洋艦の一群に追尾し日没の頃次第に三面包圍の形勢を爲せり敵は此勢威に屈したるにや日没後倉皇南西に避け更に東方に變針したるものゝ如く午後八時十五分矢島驅逐隊が第一撃を敵主力艦隊の先頭に加へたるを始として各驅逐隊水雷艇隊一時に突進して敵の周圍に蝟集し午後十一時頃に至る迄連續激烈なる肉薄襲撃を決行したり敵は日没より探照砲火を以て極力防戦せしも遂に此攻撃に耐へず其僚艦相失して四分五裂の情態となり各血路を求めて任意に運動せしかば我襲撃隊の追躡と共に茲に一場の大混戦を現出し少なくとも敵の戦艦シソイベリキ装甲巡洋艦アドミラルナヒモフ及モノマフの三隻は此間我水雷に罹りて全く其戦闘航海力を失ひ又我軍に於ても福田艇隊の第六十九號艇(司令艇)青山艇隊の第三十四號艇(司令艇)及河田艇隊の第卅五號艇の三隻は襲撃の際敵彈の爲め撃沈せられ驅逐艦春雨、曉、雷、夕霧並に水雷艇鷲、第六十八號、第三十三號艇は敵彈又は衝觸等の爲に多少の損害を被り爾後一時戦闘に参加し難く死傷も又比較的

勢しとせず就中福田青山及河田艇隊の死傷最も多し但し沈没水雷艇三隻の乗員は友艇鷹第三十一號及第六十一號艇に依り救助收容せられた

後日捕虜の言を聞くに當夜水雷攻撃の猛烈なりしは殆んど言語に絶し我艦艇連續肉薄し來りしを以て其應接に暇なく且其距離餘り近き爲め備砲俯角の度を過ぎ照準する能はざりしと云ふ

前記のものゝ外鈴木(貫太郎)驅逐隊及び自餘の水雷艇隊は當夜他方面に索敵せしが鈴木驅逐隊は廿八日午前二時の比韓崎の北東約廿七海里の地點にて敵艦二隻の北走するを發見して直に之を襲撃し其一隻を轟沈せり後日生存捕虜の言に依れば轟沈されたる此敵艦は戰艦ナロリンにして同艦は兩舷に連續二發宛の水雷命中し少時にして沈没せりと云ふ自餘の諸艇隊は終夜各方面を搜索せしも遂に獲る所なかりし

二十八日の一般戦況

二十八日黎明前日來の濃氣拭ふが如く主戰艦隊、裝甲巡洋艦隊は既に鬱陵島の南方約二十海里に達し爾餘の戰隊並に前夜の襲撃を果したる各驅逐隊等も各航路を異にし順次後方より集合の途上に在り午前五時二十分本職は敵の退路を遮斷する爲め麾下巡洋艦隊を以て東西に搜索列を張らしめんとする際後方約六十海里に占位して北進しつゝありし巡洋艦隊は早くも敵影を發見して東方に當り艦隊の煤煙數條あるを警報す幾何もなく同戰隊は敵に近づき復た報じて曰く敵は戰艦四隻(後に至り二隻は海防艦たるを知る)巡洋艦二隻より成り今北東に向針す是れ、問はずして殘敵の主力たるや瞭なり此に於て主戰艦隊、裝甲巡洋艦隊は其針路を反轉し漸次東方に向ひて敵の前路を扼し東郷、瓜生戰隊も亦巡洋艦隊に合して敵の後方を抑へ午前十時三十分の頃竹島の南方約十八海里の地點に於て全く此敵を包圍せり敵は則ち戰艦ニコライ一世、アヨール海防艦ケチラル、アドミラル、アブナキシン、アドミラル、セニヤービン及び巡洋艦イズムルードの五隻にして他の一隻の巡洋艦は遙かに南

方に後れて當時其影を失す固より敗餘の敵艦已に多大の損傷を負へるのみならず我優勢に抵抗し得べきにあらざれば主戦艦隊裝甲巡洋艦隊が先づ砲火を開くや須臾にして敵艦隊司令官子ボガトフ少將は其部下と共に降意を表し本職は特に其將校以上に帶劍を許して之れを受けたり然るに敵艦イズムルードのみは降伏に先ち其快速力を以て南方に遁れ我東郷戦隊に遮られて復た東方に走れり此時油谷灣より歸港したる千歳も其朝途上に於て敵の驅逐艦一隻を撃沈したる後此地に來り會し直に轉じてイズムルードに追尾せしか途に及ばずして之を北方に逸せり

是より先き瓜生戦隊が北航の途上にあるさき午前七時の頃西方に一隻の敵影を發見し音羽新高の一小隊を有馬音羽艦長の指揮下に之が撃滅の爲め分派せしが同隊は午前九時に至りて漸く敵に近接し其敵艦スウエトラーナが一驅逐艦を伴へるものなるを知り益々之を追窮し戰鬪約一時間の後午前十一時六分竹邊灣沖に於て全くスウエトラーナを撃沈

し尙ほ新高は其時來會したる驅逐艦叢雲と共に殘れる敵の驅逐艦アイストリーを追撃し午前十一時五十分途に之を竹邊灣の北方約五海里の無名灣に擱岸破滅せしめたり而して右二敵艦の生存乗員は我特務艦亞米利加丸及び春日丸に依り悉く救助收容せられたり

敵の降伏を受けたる聯合艦隊の大部は爾後尙其地附近に漂泊して敵艦四隻の捕獲處分に從事しつゝありしが午後三時頃南方より敵艦アドミラル、ウシヤークの來るを發見し磐手八雲の一隊は直に之に向ひ午後五時過ぎ其南走するを追及して先づ降伏を勸告せしも之に應ぜず反て彼より砲火を開きしかば止むを得ず砲撃して遂に之を撃沈し其生存者約三百餘名を救助收容せり又驅逐艦健陽炎は午後三時卅分の頃鬱陵島の南西約四十海里に於て東方より遁走し來る敵の驅逐艦二隻を發見し極力之を北西に追躡し午後四時四十五分追及して戰鬪を開始せしに敵の後續驅逐艦は白旗を掲て降意を表せり依て健は直に之を捕獲せしに此驅逐艦はピエードウイにして敵艦隊司令長官ロセストウエンスキー

中將及幕僚の移乗し居るを知り其乗員と共に之を捕虜となせり尙陽炎は他の驅逐艦を追撃して午後六時三十分に及びしも遂に之を北方に逸せり又午後五時頃西方に索敵したる瓜生戦隊及矢島驅逐隊は敵艦ドミトリ、ドンスコイの北走するを發見し之を追尾して午後七時鬱陵島の南約三十海里に至りし頃恰も好し竹邊灣方向より來會しつゝありし音羽新高の一隊並に驅逐艦朝霧白雲吹雪等が既に西方より敵に迫りて砲撃を開始し瓜生戦隊と共に之を挾撃するの好位を制し左右相待て日没後まで之れを猛撃し殆んど敵を撃破し得たるも未だ撃沈するに至らずして遂に夜に入り其形を失せり此攻撃中止と共に吹雪及矢島驅逐隊等連續之を襲撃し其効果不明なりしも翌朝に至りドミトリ、ドンスコイは鬱陵島の東南岸に漂ひ遂に沈没したるを發見せり而して同島に上陸したる其生存者は春日吹雪等にて救助收容せられたり

聯合艦隊の大部が北方追撃の戦果を收むるに汲々たる際南方前日の戦場に於ても亦相應の殘獲ありたり此日早朝戰場掃除の任務を持して出

發したる特務艦信濃丸、臺南丸及び八幡丸は韓崎の北東約三十海里の地點に於て敵艦シソイ、ベリキーが前夜の水雷攻撃に傷き將さに沈没せんとするを發見し之れが捕獲の手續を了して其の乗員を救助收容せり而して該艦は午前十一時零五分終に沈没せり又驅逐艦不知火、特務艦佐渡丸も午前五時三十分頃對馬琴崎の東方約五海里に於て敵艦アドミラルナヒモフが沈没に垂んとせるに會し續て又敵艦ウラジミルモノマフが著しく傾斜して其附近に來るを發見し孰れも佐渡丸にて捕獲處分を爲せしが二艦共に大破して浸水甚しく遂に其乗員を救助し得たる後ち午前十時の交相前後して沈没せり其時又敵の驅逐艦カロマキーも此附近に來りしが遽かに北方に遁逃せしを以て不知火は直に之を追撃して蔚山沖に至り午前十一時三十分頃水雷艇六十三號と協力攻撃し敵砲の沈黙するに及んで之を捕獲し其生存乗員を捕虜させり

該艦も亦大破して遂に午後零時四十三分に沈没したり其他麾下砲艦特務艦等にて戦後戰場附近の沿岸等を搜索して救助收容し得たる撃沈敵

艦の乗員少からず戦利艦五隻の捕虜を合して其數殆んど六千に達す
 以上は五月二十七日午後より二十八日午後には亘れる海戦の経過にして
 其の後當隊の一部は尙ほ遠く南方に敵を搜索せしも遂に又其隻影を見
 ず日本海を通過せんせし敵艦隊約三十八隻にして我撃滅又は捕獲に
 洩れたりを認むるものは巡洋艦、驅逐艦及特務艦各數隻に過ぎず而して
 此二日間の戦鬪に於て我艦隊の失ひたる所は水雷艇三隻のみにして其
 他多少の損害を蒙りたるものあるも一として今後の役務に支障あるも
 のなし又死傷は全軍を通じ將校以下戦死百十六名負傷五百三十八名に
 して其細別は別に報告せるが如し
 此對戦に於ける敵の兵力我と大差あるに非ず敵の將卒も亦祖國の爲め
 に極力奮闘したるを認む然かも我聯合艦隊が克く勝を制して前記の如
 き奇績を收め得たるものは一に
 天皇陛下の御稜威の致す所にして固より人爲の能くすべきに非ず殊に
 我軍の損失死傷の僅少なりしは歴代神靈の加護に依るものと信仰する

の外なく嚮きに敵に對し勇進敢戦したる麾下將卒も皆此成果を見たる
 に及んで唯々感激の極言ふ所を知らざるものゝ如し

(備考)

戰場に顯はれたる敵艦船

戦艦 八隻(内)

六隻撃沈 「クニヤーシ、スワロフ」 「アレキサンドル三世」 「ボロヂノ」 「オスラ

ビヤ」 「シソイマリキー」 「ナワリン」

二隻捕獲 「アリオール」 「ニコライ一世」

巡洋艦 九隻(内)

四隻撃沈 「アドミラル、ナヒモフ」 「ドミトリー、ドンスコイ」 「ウラジミール

ノマフ」 「スウエトラーナ」

三隻 馬尼刺へ遁走抑留 「アウロラ」 「オレグ」 「セムチユーグー

一隻 浦鹽斯德へ逃入 「アルマーズ」

- 一 隻 カラジミール灣へ逃走欄岸破壊「イズムロード」
- 海防艦 三隻(内)
- 二 隻 捕獲 「アブラキシン」「セニヤウイン」
- 一 隻 擊沈 「ウシヤークフ」
- 驅逐艦 九隻(内)
- 一 隻 捕獲 「ビエードウイ」
- 四 隻 擊沈 「アイメイ」「アリストルイ」「グロムスキー」外一隻
- 一 隻 上海逃入武装解除「ポールドルイ」
- 一 隻 上海へ逃遁の途損害の結果沈没「プレスチャースチー」
- 一 隻 不 明
- 一 隻 浦鹽へ逃入「アラウイ」
- 假裝巡洋艦 一隻
- 一 隻 擊沈 「ウラール」
- 特務船 六隻(内)

四隻擊沈 「カムチャツトカ」「イルチツシユ」「アナスイリ」「ルツシ」
 二隻 上海逃入武装解除「コンヤ」「スヴエリ」
 病院船二隻 抑留「アリヨール」「カスツロマー」内「カスツロマー」は解放

合計 卅 八 隻
 内

二十隻(擊沈)五隻(捕獲)二隻(逃走後破壊若は沈没)六隻(逃走後抑留若は武装解除)一隻(不明)二隻(抑留)一隻(解放)二隻(逃走)

波羅的艦隊を待つ

淺間艦長 八 代 六 郎

ゆるきなき千引の岩のありとしも
 しらてやよするあはれあた波

波羅的艦隊の來航 本 居 源 十 郎

懲りすまにふたゝひ向ふ仇のふね

うちしつめんはいつこ成らむ

波羅的艦隊の來航を 西崎金三郎

あたの艦つとひ來るてふ聞ことに

勝のしらせのふみそまたるゝ

波羅的艦隊近づけり 大口鯛二

あたの艦かすをつくして寄來らん

我みいくさにたてまつるとて

遠山英一

おどはかり高くきこえしあた波の

うちよせん日そ近つきにける

敵艦隊撃沈の際風浪はけしかりし

ときゝて 千 爵 黒 田 清 綱

四方の海にひゝき渡りぬろさの艦

くたきし風はかみかせにして

日本海海戦敵艦全滅の報に接して

男 爵 高 崎 正 風

對馬の海おほひてよせしあたの艦

とられくたかれ波のうたかた

侯 爵 鍋 島 直 大

いひつくす言の葉もなし船いくさ

おもひの外にちちをえたれば

宮 地 巖 夫

さましくにたゝへて見れと皇軍の

いさをに及ふことのはそなき

鎌田正夫

打圍みうちこむたまのたまさかに

のかれしふねはたゝ二つ三つ

仇波をうちくたきしはくろかねの

艦よりかたきやまとたましひ

千葉胤明

皇國のひかりとともにあかりけり

みいくさふねのちとぎの聲

大倉喜八郎

大海もくつかへしけりふないくさ

山を抜くへきちからのみかは

中山幸子

豫てよりかくあらんとは思へとも

もろきは仇のふねにそ有ける

新井ふみ子

うれしさに空も笑はんあたのふね

こゝろつくしの海にしつめて

古田保文

みいくさの仇波くたくつゝの音は

うみの内外にひゝきけるかな

大村百衛

天地にひゝくかちとぎさこゆなる

仇ふねしつむおきのしまへに

大瀧直之助

砕きつる果やいくさのはてならん

あたのたのみてよせし艦みな

江崎權一

たよひて石見の濱によるふねは

あたのくるふねこはれたる艦

齋藤多吉

まちに待ちし仇の艦みなうち沈め

海にあふるゝかちどきのこる

横屋幸完

かつことは隠て知りしも思ひきや

仇のおほふねのこりなしとは

岡田順達

對馬瀉やまどよせつるあたなみも

吹きしつめけんあまつ神かせ

宇野祐三

あたふねをうち沈めつる大つゝの

音いかはかりはけしかりけん

井上徳定

手こたへは思ひし程もなみの上に

しつみはてたる仇のふねかな

益江尹雄

大きみのみいつなりけりあた艦を

つしまの沖にうちしつめしも

中島以政

まぢくしあたの大艦うちしつめ

いさをは四方にとゝろきに梟

宮本竹松

比ひなきこの勝いくさことはきて

とよめきわたるくにたみの聲

三橋中雄

四方の海のはてまで響き渡るらん

ひゝきのなたのからとぎの聲

近藤春香

つくしかた立つ白波にくたかれて

うたれし仇のむかしをぞ思ふ

森反作

あたのふねしつめしつめて御軍の

かちを祝はぬひとやなからん

東宮佐七

御軍はかたきのふねをうちしつめ

千尋の海もあさくやなるらん

黒田政吉

嬉しさのきはみに胸のせまりきて

祝ふことのはしはしなかりき

磯野爲邦

言の葉にたゝへむ程もしらなみに

うちしつめたる仇のもろふね

喜 多 大 藏

あたの船沈めつくして四方のうみ

浪しつかなりうらやすのくに

齋 藤 芳 風

幾たひもよせなはよせよ仇なみは

かみかせまたてうち碎くへき

内 山 覺 彌

仇の舟くたきしなみのおとたかく

あかるは國のみいつなりけり

橘 順 榮

元寇のいくさかたりをまのあたり

つしまの海にくりかへしけり

濱 田 逸 馬

壹岐の海くちらにあらて波の底に

えみしか舟はしつみうせけり

船 曳 衛

かねてより心にのりしふねあれど

かく迄もとはおもはさりけり

雨 森 巖

かくまてにくたかるゝとは人皆も

おもはさりけん仇のもろふね

捕獲艦 鎌 田 正 夫

とられたる艦もいま更うらむらん

うこかす人のこゝろおそさを

捕獲船

加藤義清

しは先を我にたゝれてあたのふね

浪のたちとをうしなひにけり

沖の島に東郷燈臺築造の

計畫ありとさゝて 宮崎善朔

ますらをか功をこゝにおきのしま

皇いくさの名を輝やかしつゝ

旅順仁川沈没艦引揚 大 口 鯛 二

わか艦となりて思へはかくまてに

うち碎かてもあるへかりしを

祝捷會 伯爵 東久世通禧

國もせにすめらみくさのかち祝ひ

たゝよろつよの聲はかりなり

于 爵 竹 屋 光 昭

かちいくさ日比谷の園に壽ほきて

あくる花火のいさましきかな

香 川 景 之

七重八重わか日の本をかちどきの

聲につゝめるこゝちこそすれ

文學博士 小 杉 楨 邨

いさましく國の外までとよむらん

かちをとあふるはんさいの聲

芝 葛 鎮

あまたゝひいはひかさねて皇軍の

かちのみつゝく御代そ畏こき

大口 鯛 二

かちいくさ祝ふ花火のはなやかに

かゝやきにけり國のひかりは

鍋島 俊子

たくひなきおほ御軍のかちにける

いさをことほく聲そにきはふ

義勇艦隊創設 千葉 胤明

いつかたにゆくも歸るも海なれば

船そみくにのちからなるへき

加藤 義清

み軍のふねのほかにもくにたみは

そなへてまもれ大和しま根を

京釜鐵道開通 大口 鯛 二

ゆきわたるみいつのほどを人の國

貫ぬきとほすかたちこそしる

をりにふれて 挾間 次右衛門

國をおもふ心はなとかおとるへき

いくさの庭にたゝぬ身なれど

征露軍 井原 豊作

いにしへに例も聞かすのちの世も

ふたたびあらし此みいくさは

コルサコフ占領

七月十日午前大本營着電

釋太上陸軍は大なる敵の抵抗を受くることなく七月八日早朝コルサコフを占領せり

敵は同市を焼きソロイフカ(コルサコフ北約三里附近の陣地に退き再び抵抗を試みしも同日午前十一時我追撃隊の撃攘する所を爲りウラジミルロフカ(コルサコフ北方約九里方面に退却せり

此日の戦闘に於て十二珊知米突加農二門十二斤砲二門及び彈藥を鹵獲せり我に損害なし

樺太首府其附近占領

七月二十七日午後大本營着電

廿四日午後一時樺太軍の上陸掩護隊は第一アルコワ附近に在りし敵を驅逐しボロウインカ及び第二アルコワの線を占領せり當方面の敵は新にニコライアスクより派遣せられたる歩兵一大隊義勇兵數百及アレキ

サンドロフ方面より派遣せられたる野砲約八門より成り東方ルイコフ方面の山地に向ひ潰走せり

是より先き驅逐艦の掩護により歩兵一部隊を海上よりアレキサンドロフ橋に派遣し之を燒棄せんとする敵に對して確實に之を占領し屢々歸來せる敵を撃退して陸上よりの應援を待ち同橋を保持するを得たり

▲ガチ占領部隊は水雷艇と協力して微弱なる敵を驅逐し石炭約四萬噸及輕便鐵道材料を鹵獲せり

午後三時一部隊を以て第三アルコワを占領し一支隊をアレキサンドロフに向ひ前進せしむ此支隊は午後七時十五分敵の抵抗を撃破して全く同市を占領せり敵は同市東方の角面堡及東北高地に據りて抵抗を持續し支隊は猛烈に之を攻撃し遂に日没に達せり

二十五日未明よりアレキサンドロフ東方の敵に對し更に攻撃を開始し之をノチミハイロウスコエに壓迫せり

二十五日全くツエーを占領せり同地及アレキサンドロフは全く火災を免れたり

二十四日の戦闘に於ける捕虜及鹵獲品左の如し

捕虜 二百人 鹵獲品 砲車、彈藥車計七輛、糧秣被服若干

樺太の軍政

八月一日大本營公報

樺太軍司令官陸軍中將原口兼濟は七月三十日樺太全島に軍政を布く旨を達示せり

樺太占領

伯爵

東久世通禧

一度はさきてあたへしきたるその

うれしくわれにかへる御代哉

侯爵

鍋島直大

いにしへにたちかへりけり樺太の

山にも野にもみはたなひきて

みいくさの勝鬨あけしかはふとに

やかてみくにの民も住むらん

侯爵夫人

鍋島榮子

うらみある樺太しまを攻め取りて

御旗かゝやく今日のうれしさ

鍋島信子

まちに待しそのかひありて樺太を

とりかへしたる今日そ嬉しき

年を経しうらみを今そはらしける

かはふとしまに御旗なひけて

鎌田正夫

みいくさのみはたのかせに浮雲は

たちまちきえぬかはふどの島

樺太のしまねにかけしおほわしの

爪はもろくもぬきとられけり

千葉胤明

大君の御手にかへりてかはふどの

島のくさ木もうれしかるらむ

みいくさは人なきさかひ行く如く

進みてとりぬかはふどのしま

横井忠直

いさきよく三十とせの夢破りけり

千代の入江のおほつゝのおと

三橋中雄

打ちなひく御旗の風にかはふどの

島もむかしにたちかへりつゝ

志藤豊治

かはふどの島のたみ草この日より

きみかめくみに伏し靡くらん

上野友太郎

大君のみはたのかせにかはふどの

仇もなひきてくたりけるかな

山本義元

かはふどの海にくぬかに響くあり

吾みいくさのかちとさのこゑ

樺太新地名

大野泉

片岡のきみかいはをはうみとなり

みさきとなりて永くのこらん

間宮近藤諸士の功績を追懐して

千葉胤明

日の御旗すゝむにつれて顯はれぬ

むかしの人のたてしいさをも

樺太占領の日副島伯爵の靈に手向く

井原豊作

なきさみに聞かせてしかな樺太を

とり返したる今日の知らせを

祭樺太探險者靈 于 爵 由 利 公 正

國につくす誠のはなはちりぬとも

高きにはひの實をむすふかな

寺 師 宗 德

しにし人海やまかけて身をつくし

ふみひらきたるかはふとの島

皇軍の威力 竹 下 孝 綱

御狩場のみ雪踏み分け踏みさくみ

たけき鷲をも取らてやまめや

皇軍戦勝 古 川 義 子

みくに人一つこゝろにつくさすは

いくさの勝もかくはつゝかし

媾和談判 鎌 田 正 夫

此しはのさしひきよくも叶ひなは

浪はたちまちをさまりぬへし

吉澤秋三

あめりかの濺く言葉のなさけをは

ふりすてかたく袖にうけむ

山本常磐

露草もかれそめにけり日のもとの

御旗のひかりてりわたりつゝ

小村全権委員の出發を送りて

男爵 高崎正風

みなみたをのみて宣らし、勅語

貫ぬきとはせいのおち死ぬとも

出征の途中にて

陸軍少將 中村覺

鄙都、いづくのはても。もろ人の、集ひ集ひて。

とりづくに、厚く犒らひ。くさぐさの、はなむけしつゝ

こなたには、御旗打ふり。かなたには、諸手さしあげ。

ものゝふの、門出いはひて。萬代を、よびたゝへたる。

その聲は、げに勇ましく。天地に響き渡りて。

きこえけるかな。

反歌

かちどきの聲もかくやと思ふまで

よろつよゝはふ國たみのこゑ

詠露兵長歌一首

懸田訓平

外國の露西亞のこきしは。たけ高く強しといひて。
 さかしらに、ほこらひ居れど。大方は、書もよみ得ず。
 大方は、文字もかき得ず。君思ふ、道をも知らに。
 國思ふ、心も知らに。命のみ、惜みてあれば。
 火筒うつ業もつたなし。太刀かきの業もつたなし。
 かかれこそ、海の軍も。しかれこそ、陸の軍も。
 御軍に、手向ひかねて。ちりくりに、逃れゆくらめ。
 露西亞のこきしら。

征露軍歌 陸軍少將 福島 安正

世界に名高き日本國 旭に輝く日の御旗
 皇統連綿大君の 臣子は今や五千萬
 仁義を以て建てし國 忠勇勝りし國民の

之れに反する敵國の 其有様は皆知らん
 うそ偽りを常として 他國の領地を掠取り
 咎なき家を焼き拂ひ 罪なき人を擊殺し
 逃る婦女子を辱しめ 乳に泣く小兒を刺殺し
 兇惡暴戾神人の 共に赦さぬスラヴ人
 國は廣きも荒野原 人は多きも烏合勢
 一億有餘の人口も 六十有餘の異人種不
 直隸平野の戦ひに 進み兼たる卑怯者
 歴史に名を得し哥薩克も 今は昔の夢なるぞ
 旭に解くる雪氷 消てぞ失せむ露西亞兵
 いざ起て奮へ我男兒 駒さへ勇む春立てり
 仁義の師に敵はあし 愉快極まる此戦ひ

旅順哈爾濱踏破り 烏拉爾の山の絶頂に
旭の御旗を翻へし スラヴの舊都莫斯科の
森の畔に追ひ籠めて 我大君の御威徳を
普く宇内に宣揚し 世界の平和を樂まん

征露歌 海軍中佐 廣瀬武夫

一

御國に仇なす奴原を 打拂はむはわが勤め
今度の仕打のみならず 豫々あしき露西亞坊
打懲さんは今なるぞ

二

樺太交換その以來 無禮に無禮を重ねたる
失敬極まる露西亞坊 日頃積りしわが恨み

晴さん時は今なるぞ

三

いか程國は廣くとも いか程艦は多くとも
手並の知れし露西亞坊 いろはにはへとちりちりと
打破らむは今なるぞ

征露軍歌 横井忠直

其一

膺てや懲せやロシヤ國を ロシヤは平和の讐敵ぞ
正理公法攪き亂す ロシヤは道誼の讐敵ぞ
信なく義なく昔より 他國を取るを國是とし
同州同種の諸國にも 蛇蝎の如くぞ忌まれ居る
暴虐非道豺狼の 歴くを知らざる貪慾は

滿洲三省併吞し
平和を貴ぶ我國の
さてこそ皇師は動くなれ

韓をも蠶食せんとせり
争でか之を座視すべき
膺てや懲せやロシヤ國を

其二

遼東還附は誰が業ぞ
其舌未だ乾かぬに
撤兵條約棚に上げ
暴戾倨傲の振舞は
殊に御國の同胞が
危急を不問に附すべきや
天定まれば人に勝つ
時は來れり今ふ今

平和に妨げありしとて
已は靦然之れに據る
我物顔に他を拒む
世の同情を失へり
鮮血灑ぎて得し土地の
嘗膽臥薪はや十歳
惡運何ふ長からん
膺てや懲せやロシヤ國を

其三

國大なりと言ふ勿れ
人口多しと言ふ勿れ
財源涸渴し負債殖え
糧食繼かず民和せず
金甌無缺の我國は
君を戴き臣民は
名詮自稱の敵國は
日の旗押建て押進み

過半は沙漠不毛のみ
數十種族の烏合のみ
虚無黨潜かに時機を待つ
渠豈に久しく支へんや
上に萬世一系の
忠勇世界に比類なし
朝日の前の露ぞかし
膺て打懲せやロシヤ國を

進軍の歌

日輪照らす其ときは
ひらく蕾や花もなし

平岡 熙

露さへ消えて根を絶やす
憐れや露國の末路かあ

戦は我が儘得手勝手
國に盡すは今ぞかし
大にすゝんで戦へば
利益は御國へ殘し置
陸にはかばねを晒すとも
軍人ビクトモするのじやあひ
萬の神々まもるなり
歳々稱へて譽められよ

陸軍軍歌

加藤 義清

第一章

出征

世界の歴史に日本の本の

光を添へむ時を得て

世界の戦史に日の本の
進みにすゝむ三軍の

武勇を示さむ時を得て
士氣滿洲にあふれけり

第二章

斥候

橋なき川を渡らずば
道なき山を越ざらば
哨兵線外數十里

敵の動靜知りがたく
敵の所在は探り得じ
軍に先立つ斥候兵

第三章

歩兵

彼我の歩兵の小銃の
山なす屍にまじりたる
要害堅固の砲壘を

音絶間なし數時間
吾战友は幾許ぞ
乗取る今日の大快戰

第四章

騎兵

縦横無盡に踏みしだく
乗馬に誇る哥薩克も
一兩三騎の傳令使
吾勇猛の騎兵隊
唯一戦に蹴散らされ
見ても逃ゆくあはれさよ

第五章

砲兵

互に交ふる砲弾は
地の利占めても敵弾は
是に反する吾砲弾
滿洲原野に鳴りひびき
吾に達して發火せず
百發百中壘を抜く

第六章

工兵

偵察隊の報告に
材を求めて橋を架け
戦闘隊に目的の
敵の地雷火うちあばき
鐵道布設に夜を徹し
陣地をあたふる工兵隊

第七章

輜重

連戦連勝壘を抜き
糧道絶えなば三軍の
糧食輸送にかけめぐる
數百里外に進みても
武勇も遂に衰へむ
輜重の任務嗚呼重し

第八章

衛生

十字の徽章腕に巻き
硝烟彈雨を掻い潜り
戦闘隊に従ひて
痛手に悩む負傷者を

たすけ勞はる愛情の 看護は至れり衛生隊

第九章

分列式

盛なるかな吾陸軍 分列式を滿洲の
原野に擧げんはちかゝらん 盛なるかな吾陸軍
千代田の宮にかちどきを きこえあげんは近からん

征露歌 中山幸子

第一章

いくさに進むますらをの たけきこゝろに劣らじと
をみなながらも一すぢに 御國のためにつくさはや

第二章

山田のいほのをのこらも いざやてきちに向はむと

うからやからを返りみす つくすこゝろを勇ましき

征露歌 柳茂太郎

一

明治三十七年の 二月八日は我郷に
召集令の下りたる 出征軍の紀念日よ

二

既に學びし軍人の 精神五條を服膺し
われに仇なす敵國を 伐ちて懲さん時なるを

三

進めますらを勇ましく 伐てよ益良雄敵國を
伐ちて懲らして日の本の 名譽をあげよ益良雄よ

征露歌 戸島重巽

皇統一系連綿と
いむかふ仇をいざや打て

照らし輝く日の本に
陸海軍のますらをよ

二

進みてうてよ諸共に
開闢以來我國は

徳義に背く敵國を
外侮を受けし例なし

三

進めや進め陸海軍
武勇を示さん時なるぞ

世界の歴史に日の本の
名譽をあげん時なるぞ

旅順閉塞の歌

坂正臣

一

海ばら探る火の影に

見れば間近し艦五つ

大膽不敵敵港を

武装も無くて衝かんとや

二

天つ空より降りしか
沸くが如くに騒ぎ立ち

鬼か神かと敵の軍
大砲小銃撃ち亂す

三

篠突く火雨彈霰
光に日さへ眩めくは

あふせかけたり電の
阿鼻の地獄の叫喚か

四

五つの艦は皆碎け
一人も今は残らじと

乗組む七十七勇士
想ひやられて胸痛し

五

是る明治の甲辰

二月二十三日の夜

忠義に凝りし決死隊 旅順を塞ぐ大事業

六

夜も白々と明渡り 見れば港の口狭し
名譽の戦死したりしは 梅原健三たゞ一人

七

壯烈鬼神を泣かしめて 摸範を四海に示したる
この大事業又更に 擧られしこそゆゑしけれ

八

越えて三月二十七 まだ夜深きに四つの艦
さきの將校機關士は 新手の下士を率行く

九

前後二回の閉塞に 勇と智仁を備へたる

十

廣瀬中佐がふるまひは 開闢以來たゞひ無し

ますら武夫の鑑にと 小舟の上に一きれの
肉を遺して飛び去りし 軍の神よ嗚呼神よ

裸體の勇兵

千葉胤明

第一章

雪しろかりし長白山 春吹く風に打解けて
流るゝみづの滔々と 音すさまじき鴨綠江

第二章

瀬踏をする者誰かある 響き渡れる命令に
戎衣も靴も脱ぎ棄てゝ 激流横ぎる快男兒

第三章

續きて渡る全軍の 山も抜く可き勢に
敵は逃げ、り彼の岸を 彼は着きけり彼の岸に

第四章

岸の岩角踏みならし 上る折しも敵一騎
狙ひ定めてとる銃の 曳き金おろす一刹那

第五章

彼が銃器を奪ひ取り 逆手にもちてうちおろす
力餘りて碎け、り 銃の臺尻敵の骨

朝日艦 海軍中佐 廣瀬武夫

そも我々の乗組める 其軍艦の名を問へば
茜さすてふ朝日艦 駭々のぼる國運と
八紘照らす大御稜威 現はし出すも心地よし

見よや勇々しき其姿 豪然四海に雄視して
誰とて勇氣を競ふべき 健兒八百有餘人
君にちかへる節操は 其甲鐵にくらぶべし
巖をもとほす真心は 十二寸の彈丸に比し
なごか劣りのあるべきや つねにあふげる軍艦旗
國にちなめる朝日艦 まもる我々護らるゝ
艦は名に負ふ茜さす 日本一ある朝日艦
世界一なる朝日艦

聞皇軍連捷之報不堪歡喜聊述鄙懷作

歌一首 坂正臣

小舟漕ぐ露西亞の國は 國廣く人おほかれと
人なみの人は少なく 獸なすあらくあり鳧

人のもの奪ひ掠めて
其國の君のおやなる
よのなかの國のことごとく
はかりこと遣し置きけれ
我が方に招き靡かせ
争はんいとくち作り
四方八方の國奪ふめり
露西亞人かゝる心に
韓山に頸さしのへて
しかれこそ遠き御世より
樺太をあさむき取りて
遼東のみさき還へさせ

身を肥すならばしなれば
彼得といひしみかども
わか爲にせむと計りて
をしへ以て人の心を
巧ある毘をまうけて
さてのちに軍出して
おそろしや憤ろしや
滿洲のひろ野をおほひ
皇國をも吞むとしけり
我國の内にいりつる
近き頃支那に勝得し
十とせにも未だならねば

おのれ早とりて築きて
其耻をふくみ忍ひて
大和人いまは起たんと
陸よりは馬なめ行き
敵の船今日も沈めつ
報せ來る聲きく我身
西比里亞の方へこそ飛べ
かくとみて胸痛ければ
人皆のいふはまことか
哈爾賓のみやこ陥れ
ねぢけたる心ひるがへし
人なみの人となるべく

ほこり顔に我を笑へれ
此の腕を鍛ひ堅めし
海よりは船みてつゝけ
戦へはたゝかふ毎に
敵の城今日も取りつと
うれしさに心ぬけいてゝ
ふくつけき露西亞ツアルも
心さへ狂ひ初めきと
あはれく一日も早く
敵の膽挫きこらしめて
道あらぬ望とゞめて
教へてしがな

詠志士沖禎介歌

安部 井 磐 根

國のため身もたなしらぬ。 益良雄の心の劔。
かくもがとい磨ぎすまし。 かくもがとい磨ぎすまして。
波さける海坂こえて。 道さぶる仇雲わけて。
仇雲の千重のおくかの。 西比利亞の鷲も手とらな。
貝加爾の蛟もとらな。 物らいふ草木もながる。
烟ふく龍も斬らなど。 其龍のい通ふ道に。
身をひそめたねらふはしに。 いかなりし物にふればか。
物打際かけて砕けつ。 そこ思へばあやに悔しも。
こゝ思へばかなしかれども。 手もすまにい磨ぎすまし。
劔刃の其の利心の。 氷刃の其の利心は
天地にきらめきわたり。 益良雄のうまし鏡と。

い 照り かつ やく。

勇士大橋啓吉氏をよめる歌

福 田 泰 造

もろこしのからとふ國の。 名くはしき、鑿河の川の。
其川の深さしらむと。 其川の浅さしらむと。
むら肝の心ふりおこし。 裸體にて、い涉りゆけは。
仇どもら、おびえわなき。 戦はむ、ときをしらに。
あるはにげ、あるはくだりぬ。 あはれく、大橋氏の。
たぐひなき、其いさをば。 ひとみな、後の世までに。
かたりつくべし。

南山 攻撃 陸軍少將 中 村 覺

第一章

南山せめむとふくる夜に
山また山をよちのぼり
たどれる路は道ならず
覺られまじと只管に
進みちかづく第二軍

勇み進めるものゝふの
谷また谷を打越えて
こゝにかしこに踏迷ひ
皆息の根をころしつゝ

第二章

折しもあれや夕立の
ひらめき渡る稻妻や
音すさまじくふる雨は
天の佑とよろこびて
進み寄りたる第二軍

黒雲空にふさがりて
はためき落つるいかづちの
車軸をながす如くなり
敵の砲臺めざしつゝ

第三章

警戒さびしき敵兵は
目あてもわかぬ砲弾を
我みいくさは事もなく
岡のあなたに兵を伏せ
明くるを待ちし第二軍

闇夜を照す光弾や
うち放ちつゝ守れども
山のこなたに砲をすゑ
戦列こゝに整ひて

第四章

我砲兵は二百門
それと火蓋を切りければ
火花をちらすそのさまは
この時歩兵の一隊は
難なくこれを落したり

時をたがへず諸共に
敵またこれに應戦し
電光石火もたゝあらず
金州城をうち破り

第五章

第四師團のつはものは
第一師團のものゝふは
第三師團のますら男は
息をもつかず攻よせし
譬へむものもなかりけり

金州灣の海手より
南山堡壘の正面に
大房身の側背に
獅子奮迅のありさまは

第六章

金州灣の波間より
敵壘目掛けて打出せば
敵の軍艦あらはれて
海陸一致の大激戦
天地も崩るゝ許なり

わが軍艦は進みいで
大連灣のあなたにも
また我軍を砲撃す
山嶽爲めに震動し

第七章

この勢に僻易し
さは云へ敵壘堅固にて
右に左に機關砲
防禦のたて抜目なく
敵の勇氣ぞたけづくし

敵砲まもなく沈黙す
西にひがしに鐵條網
地雷火狼奔とりづくに
必死となりて戦へる

第八章

慄悍決死の我兵は
屍の山をふみ超えて
流石の敵も氣をのまれ
我が日の本の日章旗
夕日と共にかゝやけり

硝煙彈雨を冒しつゝ
縦横無盡に突撃す
皆ちりづくに逃落ちて
南山高地の頂上に

第九章

戦ひすみし夜の空
吹来る風はなまぐさし
我が兵士はいくばくぞ
花は櫻よ人は武士
其名や代々にかをるらめ

雲間の月は影清く
この戦に斃れたる
大和島根に名も高き
散べき時に散てこそ

恩賜の繙帶

千葉胤明

第一章

おほうち山のやままつに
千代田の宮のおくふかく
きこしめさるゝ天皇を
よるとひるとの別ちなく
大みやびとをひさむまし

よろづ代よばふ芦田鶴の
大みいくさのはかりごと
かしづき給ふみいとまに
寒さあつさにかゝはらず
皇后宮キサインミヤの御手づから

おほみなさけを巻き込めて

たまふ繙帶イラ 千卷チマキ

第二章

玉のおん身につるぎこそ
いくさのにはに出まして
海にくぬがにたゝかひて
あやに錦に立ちまざる
堪へぬいたみも忘れつゝ
かたじけ涙せきあへず

佩かせ玉はねみこゝろは
ねぎらひますに異ならず
いたで負ひたる益荒雄も
この繙帶にまかれては
なやむ心地もおこたりて
戎衣のそでやぬらすらん

第三章

月日のみかげいたゞきて
たかく尊ときみめぐみに
とりでをおほふ樹は枯れて

みくにのひかり益荒雄が
報いまつらんものやゑに
土さへ裂くるなつの日に

かばねを陸にさらしても
さながらこぼる冬の夜に
かたではやまぬしき島の

ふなばたあらふしら波の
かばねを海にしづめても
大和たましひたゞひとつ

國母陛下の御瑞夢

加藤義清

一章

相模の海のなみのうへ
常磐かきはにいやしげる
皇后宮きさひのみやのならせられ

國のしづめの富士みえて
松の葉山のかりみやに
寒さ避けます頃とかや

二章

名島の磯にゆきかよふ
よるの大殿の御座近く
いとおごそかに申す様

千鳥のこゑの更け渡る
白衣びやくにの武士むしのこひれふして
微臣は坂本龍馬なり

三章

白露の空にたちまよふ
微臣もちからを海戦に
吾海軍のかちいくさ

雲足いよゝ急なれど
そゝぎてまもり候へば
うたがふべくも候はず

四章

御心安くましませと
白衣びやくにのすがたかさゝえて
音ばかりこそこのりけれ

聞えあぐるやたちまちに
岸にくだくるあだなみの
實にも不思議の御瑞夢や

五章

王政復古のそのはじめ
よの浪風をしづめたる
死して護國の鬼となりて

海援隊の長として
坂本龍馬その人は
明治の御代にも仕へけり

詠海戰大捷長歌

岡 部 讓

現まつ神吾が大君は。
 磨あち懲おしむけたまはむと。
 さし昇ある天つ日かげに。
 ふき渡る科しな戸との風に。
 戦へば必かなやぶり。
 いや勝ちにかちつゝあれど。
 おふけ無く海路せかむと。
 大砲を稠しみに備へ。
 波羅的ばらの海を乗りいで。
 かき數ふ月の十月を。
 外海に出ると見せて。

道知らぬるさのゑみし等。
 皇軍みくさを出したまへば。
 朝露あさのきえゆくが如。
 夕露ゆふの散りゆくが如。
 攻むればかならずおとし。
 頑くた狂たふるみしが友は。
 鐵くろがねのいがしき艦に。
 石炭うらつめる船さへ率しきて。
 荒沙あらしのしほのやしほ路。
 たゞ渡りわたり参まる來て。
 わが軍たばかり得しと。

淺らにも思ひ誇りて。
 朝霧のたちのまよひに。
 列なべて對馬の迫せ門との。
 勇たけましく攻とこそ來つれ。
 腕たてを扼とりつゝ。
 わが國の海つ軍は。
 前まへを切り後うしろを斷ちて。
 漏はらさじと競へるはしに。
 御軍を守りますすらむ。
 吹く風に狭霧は晴れて。
 荒浪あらいにならしゝ軍。
 わが艦ゆ打ち出す彈は。

五月の二十まり七日。
 三十あまり八の大艦。
 荒浪を舳へ先さきに截りて。
 豫もてより哨艦しやうを出し。
 とく來よと待ちにまちたる。
 軍艦三隊さんに分ちて。
 敵の艦中にとり籠め。
 天つ神國つ御神も。
 戦たかを助けますすらむ。
 白浪は高く颯りぬ。
 あら浪に慣れぬ敵等。
 一つだに中らぬは無く。

敵艦の放なてる弾は。敵の艦焼くる烟に。うち交はす砲の轟き。たて並べし列は亂れて。遁れむと彷徨ふうちに。水底を溶れる小艇。小艇さへ群り攻めて。海の底いくりに沈め。一艦も残さじものと。敵艦の將軍は。射向はむ心も挫け。皇軍に降り参る來ぬ。

大方に狙ひ外れぬ。玄海の灘の名しるく。響てふ灘もふさはし。己がじし右往左往。野干玉の夜としあれば。水内に雷はなつ。大艦を空にうち掀げ。翌くる日も戦ひ續け。烈しくも追ひ撃ちぬれば。戦はむ力も竭き。白旗を竟に掲げて。かくばかり勝ちぬる事は。

前の世に例も聞かず。皇國の光もしるき。捕獲つる艦にも靡き。今よりは大和島根に。あな樂しあな歡ばし。海原にぞよみ渡れり。現つ神わが大君の。昇る日の如。

後の世も又とはあらじ。天つ日の御旗は高く。吹く風に心も涼し。たち騒ぐ浪もあらじな。もろ聲にあぐる勝鬨。天地にいゆき渡れる。大御稜威吹く風の如。

大日本歌道獎勵會規則

第一條

本會ハ歌學ヲ獎勵シテ斯道ノ振興ヲ圖リ兼テ歌人相互ノ情誼ヲ厚ウスルヲ以テ目的トス

第二條

本會ハ大日本歌道獎勵會ト稱ス

第三條

本會ハ本部ヲ東京ニ支部ヲ各地方ニ置ク
支部ハ別ニ定ムル所ノ内則ニヨリ地方會員三十名以上ヲ以テ組織シ本部ノ統轄ヲ受ク

第四條

第一條ノ目的ヲ達セムガ爲左ノ事業ヲ爲ス
一、毎月一回冊子「歌」ヲ發刊シ帝室ニ獻納シタル後會員ニ頒布ス

「歌」掲載要目左ノ如シ

宮中月次御歌會御兼題會員相互ノ歌合、競點、名評、唱歌、軍歌、長歌、今様其他内外歌ニ關スル時報
一、會員ノ親睦ヲ圖ル爲臨時大會又ハ研究會ヲ開ク

第五條

本會ノ趣旨ヲ養成セララル、者ハ何人ト雖モ會員タルコトヲ得

第六條

本會ノ會員ハ推戴名譽會員、名譽會員、特別會員、通常會員ノ四種トス
一推戴名譽會員ハ名譽ノ爲 皇族ヲ推戴ス
一名譽會員ハ名門貴紳、斯道ノ大家及ビ二百圓以上ノ金圓又ハ物件ヲ五ヶ年間以内ニ若クハ一時ニ金百五十圓以上ヲ寄附セララル、者ニシテ

本會ヨリ推舉シタル者

一、特別會員ハ毎年五圓以上ノ金圓又ハ物件ヲ十ケ年間若クハ一時ニ金五十圓以上ヲ寄附シ又特ニ本會ニ對シ裨益ヲ與ヘラル、者ニシテ本會ヨリ推舉シタル者

一、通常會員ハ毎月會費トシテ金二十五錢ヲ納メラル、者

第七條

會員ハ住所姓名位動功級爵ヲ明記シ本會ニ申込マルベシ本會ハ申込書ヲ受理スルト其ニ會員名簿ニ登録ス

但通常會員ハ別ニ入會金二十五錢ヲ添ヘラルベシ

第八條

本會員ハ三大節ヲ始メ毎月宮中ニ於テ行ハルベキ月次御歌會御兼題及本會特定ノ兼題或ハ競點歌ヲ詠ミ送附セラルベシ

第九條

會員ニシテ本會ノ名譽ヲ毀損スル行爲アル者又ハ會費ノ納付ヲ怠リシ者ハ役員會ノ議決ヲ經テ除名シ其旨冊子「歌」ニ公示スルコトアルベシ

第十條

本會ノ總裁ハ名譽ノ爲 皇族ヲ推戴ス
本會ノ役員ハ會長一名、顧問十名、評議員若干名、幹事若干名トス

第十二條

役員會ハ重要ノ件アル毎ニ之ヲ開キ通常總會ハ毎年一回之ヲ開キ業務ノ成績ヲ報告ス

大日本歌道獎勵會役員

總裁

大勳位
功四級

威仁親王殿下

會長

侯爵 鍋島直大

顧問

(以下イロハ順)

男爵 細川潤次郎

男爵 渡邊千秋

子爵 長岡護美

子爵 黑田清綱

子爵 藤波言忠

伯爵 佐々木高行

伯爵 土方久元

伯爵 東久世通禧

男爵 千家尊福

評議員

文學博士 萩野由之

文學博士 芳賀矢一

馬場三郎

阪正臣

島山健

遠山英一

東儀季熙

千葉胤明

萩原嚴雄

尾崎宍夫

香川秀五郎

鎌田正夫

加藤義清

神田息胤

賀茂水穂

賀茂百樹

武島又次郎

中邨秋香

上田萬年

文學博士

上 眞行

植松有經

文學博士 井上哲次郎

醫學博士 井上通泰

井上頼圀

猪熊夏樹

文學博士 大槻文彦

大口鯛二

文學博士 黒川眞頼

丸山正彦

藤岡好古

文學博士 小杉楨郁

關根正直
須川信行

幹事

挾間次右衛門
千葉胤明
井原豐作
大町壯
船曳衛
雨森巖之進

文學博士	小出 榮
文學博士	跡見花 蹊
文學博士	佐々木信綱
文學博士	木村正 辭
文學博士	三上 參次
文學博士	三輪田 眞佐子
文學博士	宮地 嚴夫
文學博士	篠田時化雄
文學博士	下田 歌子
文學博士	芝 葛 鎮
文學博士	本居 豐 穎
文學博士	物集 高 見

明治三十七年十一月十二日印
 明治三十七年十一月十五日發
 明治三十八年八月十七日增補再版印刷
 明治三十八年八月二十日增補再版發行

(定價金二十五錢)

編輯者兼
行輯者

東京市麴町區永田町二丁目三十九番地
井原 豐 作

印刷人

東京市京橋區三十間堀三丁目拾番地
中村 政 雄

印刷所

全報社

不許複製

發行所

大賣捌

東京市麴町區有樂町三丁目二番地
大日本歌道獎勵會

東京市神田區表神保町三番地
東京 堂

